製八尾市文化財調查研究会報告43

□ 中田遺跡(第16次調査)
□ 中田遺跡(第17次調査)
□ 中田遺跡(第18次調査)
□ 中田遺跡(第20次調査)
□ 中田遺跡(第21次調査)
□ 中田遺跡(第22次調査)
□ 中田遺跡(第23次調査)
□ 八尾南遺跡(第19次調査)
□ 以 山賀遺跡(第1次調査)

1994年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

·				
			,	

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告43 正誤表

ページ	行	誤	正
51	参考文献	春成秀	春成秀爾
66	2	八尾木6丁目	八尾木北6丁目
82	4	文化財室	文化財課
95	32	復原	復元

製八尾市文化財調査研究会報告43

中田遺跡(第16次調査) T Ⅱ 中田遺跡(第17次調査) 中田遺跡(第18次調査) Ш 中田遺跡(第20次調査) IV V 中田遺跡(第21次調査) 中田遺跡(第22次調査) VI 中田遺跡(第23次調査) VII 八尾南遺跡(第19次調査) VIII IX 山賀遺跡(第1次調査) X 山賀遺跡(第2次調査)

1994年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は東に生駒山地、西に上町台地、南に羽曳野丘陵に囲まれた大阪平野の中に位置しています。この平野は、淀川や旧大和川および生駒山地西麓から西へ流れる中小の河川の堆積作用によって形成されており、従来より肥沃な土壌地帯で、人々が生活する上で好ましい条件が揃っていた地域であり、古来より人々が生活していた遺跡が多く存在しています。現在、その遺跡のほとんどは河川等の堆積作用や近年の土地区画等の整地によって地中深くに残っています。近年、平野部では住宅建設や工場建設等の大規模な開発が多く行なわれるようになり、地中深く眠っていた遺跡が破壊されることが頻繁に起きてきました。そこで、これらの文化財を開発による破壊から守り、先人が残した文化遺産を後世に永く伝承させることが我々の責務と認識し、文化財の保護・保存の徹底をはかってきたところであります。

今回、平成5年度に実施しました中田遺跡(第16~18・20~23次調査)、八尾南遺跡 (第19次調査)、山賀遺跡(第1・2次調査)の3遺跡に及ぶ調査・整理が完了しました ので報告書を刊行する運びとなりました。

本書が学術研究及び本市の地域史の資料として、さらに文化財保護への啓発普及に活用して頂ければ幸いであります。

末筆となりましたが、調査においてご協力いただきました関係各位の皆様方に深くお礼 申し上げますとともに、今後ともより一層のご理解、ご支援を賜りますようお願いいたし ます。

1994年10月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木 山 丈 司

序

- 1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成5年度に実施した発掘調査成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成業務は各現場終了後に着手し、平成6年9月をもって終了した。
- 1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
- 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市市役所発行の12,500分の1(昭和61年8月)・八尾市委員会 発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成5年10月1日改訂)をもとに作成した。
- 1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。
- 1. 本書で用いた方位は磁北及び国土座標の真北を示している。
- 1. 遺構は下記の略号で表した。

竪穴住居-SI 溝-SD 井戸-SE 土坑-SK 小穴-SP 自然河川-NR 掘立柱建物-SB 落ち込み-SO 土器棺墓-土器棺 土器集積-SW

- 1. 遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した 弥生土器・土師器・瓦器・埴輪・石類-白、須恵器-黒、木製品-斜線。
- 1. 各調査に際して発掘調査、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

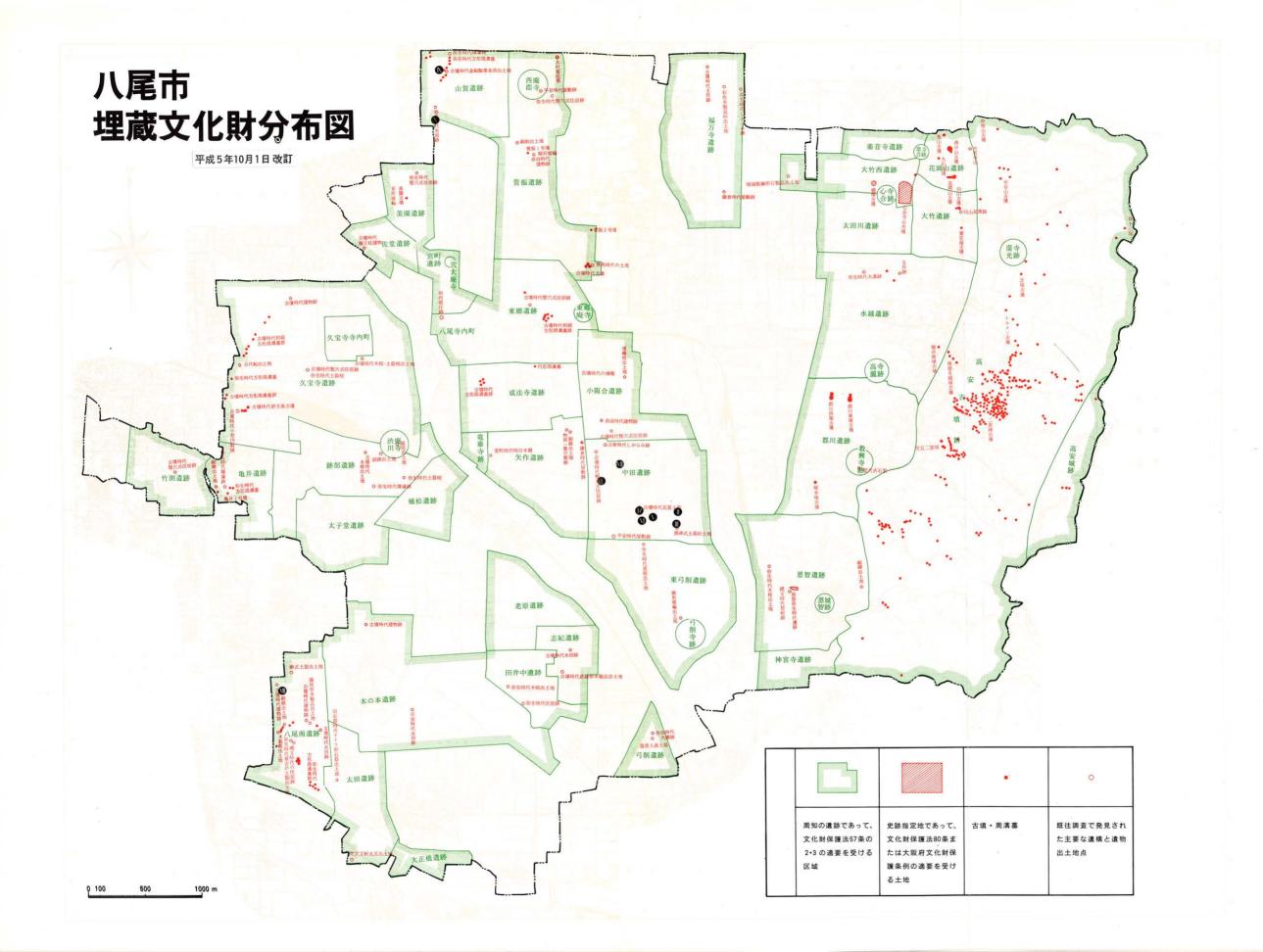
目 次

はしがき

序

J	尾	市埋	咸又	11	匕欺	15.	テオ	万	义	
---	---	----	----	----	----	-----	----	---	---	--

1	中	田遺跡	第16次調査	(NT93-16)	••••••	1
${\rm I\hspace{1em}I}$	中	田遺跡	第17次調査	(NT93-17)		29
\coprod	中	田遺跡	第18次調査	(NT93-18)		63
IV	中	田遺跡	第20次調査	(NT93-20)		65
V	中	田遺跡	第21次調査	(NT93-21)		73
VI	中	田遺跡	第22次調査	(NT93-22)		81
VII	中	田遺跡	第23次調査	(NT93-23)		93
VIII	八尾	南遺跡	第19次調査	(YS93-19)		101
IX	Ш	賀遺跡	第1次調査	(YMG93-1)	117
Χ	Ш	賀遺跡	第2次調査	(YMG93-2)	123
	報告	書抄録				



I 中田遺跡第16次調査 (NT93-16)

例 言

- 1. 本書は、八尾市八尾木北1丁目33・34で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
- 1. 本書で報告する中田遺跡第16次調査 (NT93-16) の発掘調査業務は、八尾市教育委員会 の指示書 (八教社文第13号 平成5年4月22日) に基づき、財団法人八尾市文化財調査研 究会が松本友治氏から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成5年5月17日~5月27日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。 調査面積は170㎡である。なお、調査においては八田雅美・西岡千恵子・島野鋼一・大西 謙太郎・松岡章雄が参加した。
- 1. 本書に関わる業務は、遺物実測-西岡、図面レイアウト・トレース-市森千恵子・川上節子、遺物写真レイアウト-八田、本文の執筆-高萩が担当した。

本文目次

1.		H	t じめに	1
]查概要······	
4		17/14	1.且似女	2
	1)	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
	2)	基本層序	2
	3	1	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
	4)	遺構に伴わない出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
	5)	出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
3		+	とめ	20

I 中田遺跡第16次調査 (NT93-16)

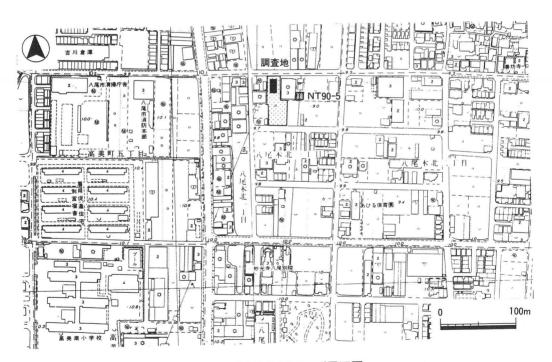
1. はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田 $1 \sim 6$ 丁目、刑部 $1 \sim 4$ 丁目、八尾木北 $1 \sim 6$ 丁目にあたる。

地理的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡の周辺には南に東弓削遺跡、西に矢作遺跡、北西に成法寺遺跡、北に小阪合遺跡がある。

当遺跡では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・中田遺跡調査会・当調査研究会により 数次の発掘調査が実施され、弥生時代前期から近世にかけての複合遺跡であることが確認され ている。特に古墳時代初頭~前期にかけての集落遺構が遺跡全般に存在していることが今まで の調査で確認されている。

今回実施した発掘調査は、中田遺跡の中央部付近にあたる八尾木北6丁目で行われる倉庫付



第1図 調査地位置図及び周辺図

き共同住宅建設に伴うものである。調査地 の近接では平成2年に当調査研究会が実施 した第8次調査地(NT90-8)、平成2年~ 4年度に市教育委員会が実施した遺構確認 調査が行われており、古墳時代前期を中心 とした遺構・遺物が検出されている。

2. 調査の概要

1)調査の方法と経過

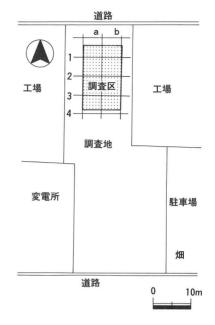
今回の発掘調査は建設の基礎工事により 遺跡が破壊される部分を対象にして調査区 を設定した。調査区は縦17m×横10mの長 方形で、面積170㎡を測る。調査期間は、 平成5年5月17日~5月27日までである。

調査区割は調査区部分にカバーできる範囲で5m四方の方限を設定した。区名は東西線が北からアルファベット (a~b)、南北線が西から数字 (1~4)を付け、南西角より北西を優先し、1a区~4b区とした。

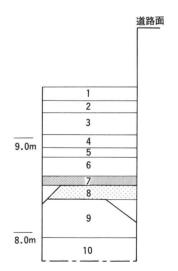
調査では、現地表下1 m前後を機械で掘削し、以下0.4 mの土層について人力掘削及び精査を実施した。さらに下層の状況を確認するため、機械でとどく範囲まで掘削し、土層状況の確認を行った。調査の結果、古墳時代前期から近世に至る遺構・遺物を検出した。遺物は遺構および包含層内からコンテナにして10箱分程度出土した。

2) 基本層序

第1層:耕土 (層厚15~20cm)。現在ま



第2回 調査区設定図及び区割図



- 1 耕土
- 2 床土
- 3 淡灰茶色粘質土
- 4 灰褐色粘土
- 5 乳灰茶色シルト混じり細砂
- 6 乳灰褐色粘土
- 7 褐灰色砂礫混粘質土
- 8 淡灰褐色細砂混粘質土
- 9 淡灰褐色~青灰色シルト
- 10 青灰色粘質シルト

第3図 基本層序柱状図

で水田として耕作していた土層である。上面で標高9.5mを測る。

第2層:床土(層厚15~20cm)。水田の床土である。

第3層:淡灰茶色粘質土 (層厚15~20cm)。近世の瓦片がごく少量含まれている。

第4層: 灰褐色粘土 (層厚15~20cm)。中世の水田耕作土と考えられるが、上面 (水田面) は近世 (第3層) により削平されている。

第5層:乳灰茶色シルト混じり細砂(層厚5~10cm)。一時的に堆積した洪水層と考えられる。

第6層:乳灰褐色粘土(層厚5~10cm)。古墳時代後期以降の水田耕作土と考えられる。上面には足跡状のくぼみに砂が入り込んでいるのが観察でき、洪水層(第5層)により埋まったものと考えられる。層内の低位から古墳時代後期の遺物が少量含まれていた。

第7層: 褐灰色砂礫混粘質土 (層厚5~10cm)。古墳時代前期後半 (布留式新相) から中期の 遺物包含層である。

第8層:淡灰褐色細砂混粘質土(層厚15~20cm)。古墳時代前期前半(布留式古相)の遺物包含層で、古墳時代前期(布留式新相)の遺構が切り込まれている。標高は8.6mを測る。

第9層:淡灰褐色~青灰色シルト (層厚30cm)。古墳時代前期前半 (布留式古相) の遺構面 である。標高は8.3 m を測る。

第10層:青灰色粘質シルト (層厚20cm以上)。

3) 検出遺構と出土遺物

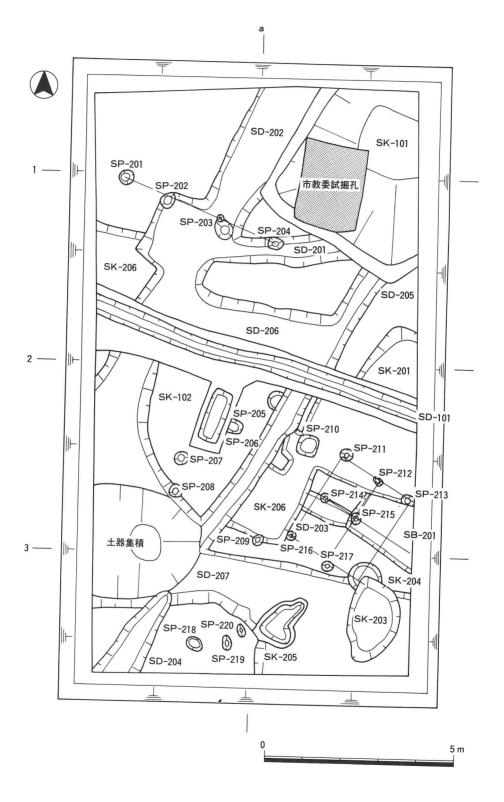
調査の結果、第1調査面は第8層上面(標高8.6m)で、古墳時代前期(布留式新相)から中期の土坑2基(SK-101~102)・溝1条(SD-101)を検出した。第2調査面は第9層上面(標高8.3m)で、古墳時代前期(布留式古相)の掘立柱建物1棟(SB-201)・土坑6基(SK-201~206)・小穴20個(SP-201~220)・溝7条(SD201~207)・小穴列1箇所を検出した。以下、各調査面の主な遺構・遺物について記す。

第1調查面

土坑 (SK)

SK - 101

調査区北東部 (1b・2b区) で検出した。南西部は市教委の試掘孔により削平され、一部は東壁・北壁に至り全容は不明であるが、検出部分での平面形状は方形を呈している。規模は東西幅0.4m、南北幅1.5m、深さ約0.15mを測る。堆積土は上層から暗灰褐色粘質土・黒灰褐色土・灰黒色粘質土 (炭を多量に含む) である。遺物は下層から古墳時代前期前半 (布留式古相)に比定される壺・小型丸底壺・布留甕などの破片が少量出土しているが、時期は古墳時代前期



第4図 遺構平面図

後半以降に比定される。これはベース層が古墳時代前期前半の包含層(第8層)であり、混入 したものと考えられる。

SK - 102

調査区北東部 (3a区) で検出した。平面形状は南北に長い方形を呈する。規模は長径1.5m、短径0.4m、深さ約0.15mを測る。堆積土は暗褐灰色粘質シルトで、少量の炭が含まれている。 遺物は下層から古墳時代前期(布留式古相~新相)に比定される土器片がごく少量出土している。

溝 (SD)

SD-101

調査区中央北部(2a~2b区)で検出した。南東-北西方向に伸びるもので、検出長10.7m、幅0.4m、深さ0.2mを測る。堆積土は灰色粘質シルトである。遺物は古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片が少量出土しているが、第8層の混入遺物と考えられる。

第2調查面

掘立柱建物 (SB)

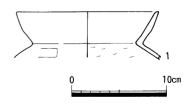
SB - 201

調査区の南東部(3b区)で検出した。主軸はほぼ南西-北東を示し、規模は2間×2間の総柱の建物跡と思われる。柱穴の並びは9個のうち7個を検出した。間隔は北西-南東方向が北西から $1.2m \cdot 1.0m$ 、南西-北東方向が南西から $1.2m \cdot 1.2m$ である。復元床面積は約 $5.28m^2$ (1.6坪)を測る。柱穴の形状は円形で、径 $0.2\sim0.4m$ 、深さ $8\sim26cm$ を測る。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は内部から布留式に比定される土器片がごく少量出土している。

土坑 (SK)

SK - 201

調査区中央東(2b・3b区)で検出した。SD-101に切られ、SK-202を切り、SK-207は切り合う関係にある。東部は調査区外に至り、全容は不明である。検出部分の規模は、東西幅2.9m以上、南北幅4.4m、深さ0.15m前後を測る。堆積土は灰茶色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期(布留式古相)に比定される布留甕(1)などの土器片が少量出土している。



第5図 SK-201出土遺物実測図

SK - 202

調査区北南部(3b区)で検出した。SD-201を切り、SK-201に切られる。東部は調査区外に至り、全容は不明である。平面形状は検出部で、直角のコーナーをもっており、方形の竪穴住居の可能性が考えられる遺構である。規模は東西幅2.5m、南北幅1.5m、深さ約0.07m前後を測る。堆積土は淡茶色シルトである。遺物は内部から古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片がごく少量出土している。

SK - 203

調査区北南部(4b区)で検出した。平面形状は南北に長い楕円形を呈し、SD-207・SK-204を切っている。規模は長径2.3m、短径1.3m、深さ約0.4mを測る。堆積土は暗灰茶色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片が少量出土している。

SK - 204

調査区北南部(4b区)で検出した。平面形状は円形と思われるが、SK-203に切られており、全容は不明である。規模は径0.9m、深さ約0.19mを測る。堆積土は暗灰茶色粘質土である。遺物は内部から古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片がごく少量出土している。

SK - 205

調査区南部(4b区)で検出した。平面形状は不定形で、SD-207を切っている。規模は長径1.3m、短径0.84m、深さ約0.13mを測る。堆積土は暗灰茶色粘質土である。遺物は内部から古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片が少量出土している。

SK - 206

調査区中央西部(2a区)で検出した。東部はSD-202に切られ、西部は調査区外に至り、不明である。規模は検出部で、東西幅2.0m、南北幅1.6m、深さ約0.07mを測る。堆積土は淡灰茶色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片がごく少量出土している。

溝 (SD)

SD - 201

調査区中央北(2a・2b区)で検出した。方向は東西方向に伸び、西部はSD-202と合流する。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、幅0.62~0.8m、深さ0.1mを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は灰茶色粘質シルトである。遺物は、内部から古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片がごく少量出土している。

SD - 202

調査区西部($1a\sim3a$ 区)で検出した。方向は南北方向に伸び、SK-206を切り、SD-201・SD-206・SD-207と合流する。北部は調査区外に至る。規模は検出部で、幅 $1.3\sim1.6\,\mathrm{m}$ 、

深さ0.18m前後を測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は灰茶色粘質シルトである。遺物は、内部から古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片がごく少量出土している。

SD - 203

調査区南東部 (3b区) で検出した。東西方向に伸びるもので、規模は検出長1.25m、幅0.56 m、深さ0.09mを測る。堆積土は灰色粘質土である。遺物は古墳時代前期(布留式古相)に比定される甕・高坏等の小片がごく少量出土している。

SD - 204

調査区南西部(4a区)で検出した。南西-北東方向に伸びるもので、北部はSD-207を切り、途切れている。南西部は調査区外に至る。規模は検出長2.9m、幅0.88m、深さ0.22mを測る。堆積土は炭が含まれる暗灰褐色粘質土である。遺物は古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片がごく少量出土している。

SD - 205

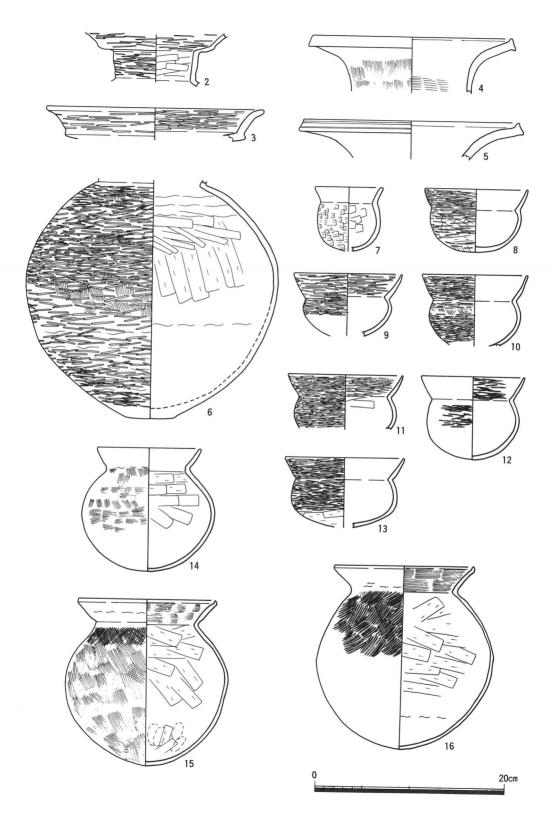
調査区中央部($2b\sim3a$ 区)で検出した。南西一北東方向に伸びるもので、 $SK-207\cdot SP-205$ を切り、 $SD-206\cdot SD-207$ と合流する。北部はSK-101底部により切られる。規模は検出長約9.0 m、幅0.6~0.7 m、深さ0.12 m 前後を測る。堆積土は灰茶色粘質シルトである。遺物は古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片がごく少量出土している。

SD - 206

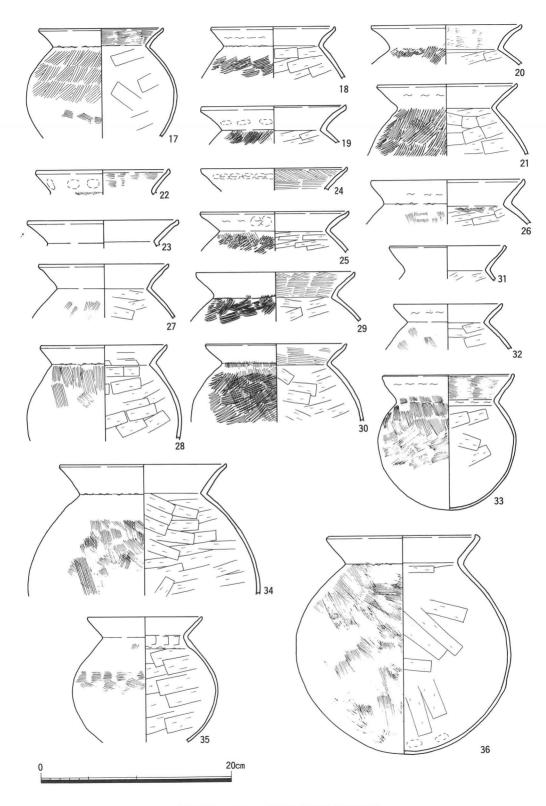
調査区中央部(2a~2b区)で検出した。東西方向に伸びるもので、東部はSD-205、西部はSD-202と合流する。規模は検出部で、検出長3.6m、幅1.0m、深さ0.14m前後を測る。 堆積土は灰茶色粘質シルトである。遺物は古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片がごく少量出土している。

SD - 207

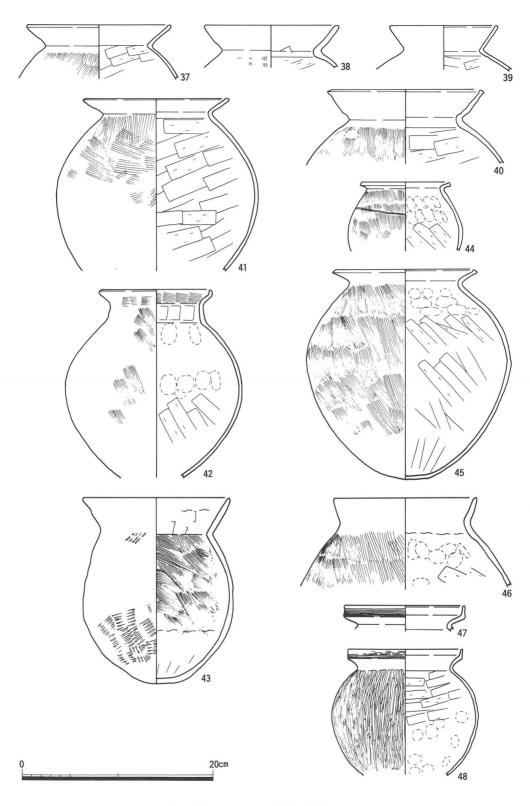
調査区南部(3a~4b区)で検出した。東西方向に伸びるもので、SK-203~SK-205・SD-204・SP-208に切られ、西部はSD-202と合流する。東部は南部に広がりながら調査区外に至る。規模は検出長10.0m、幅1.4~3.0mで、深さは浅い部分が0.15m、SD-202と合流した接点部で土坑状に深くなっている部分が0.7mを測る。堆積土は上層が灰茶色粘質シルトで、下層(土坑状部分)が暗灰色粘質土で、底面付近に自然木・植物遺体がある。遺物は土坑状部分から古墳時代前期(布留式古相)に比定される壺・甕・高坏等の土器片がコンテナ箱にして3箱分出土した。また焼けた木片とともに不明木製品が出土している。図示できたものは53点である。2~13は壺である。2は二重口縁壺の口縁部、3は複合口縁壺の口縁部、4・6はラッパ状に開く壺、7~13は小型壺である。14~48は甕で、14~36は庄内甕、37~41は布留甕、42は摂津系の甕、43は系の甕、44・45は瀬戸内東部系の甕、46・47は吉備系の甕である。49~51は鉢である。52~54は器台である。



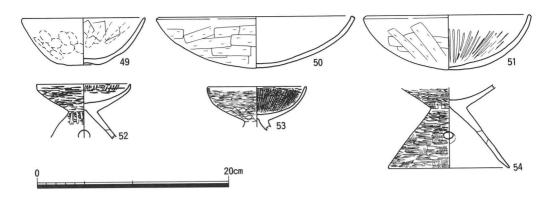
第6図 SD-207出土遺物実測図1



第7図 SD-207出土遺物実測図2



第8図 SD-207出土遺物実測図3



第9回 SD-207出土遺物実測図4

小穴 (SP)

SP-101~SP120

調査区($2a \cdot 3a$ 区)で20個を検出した(第1表)。そのうち南東部で検出した7個($SP-211 \sim SP-217$)は掘立柱建物(SB-201)を構成する柱穴である。北部で検出した4個($SP-201 \sim SP-204$)は東南東-西北西の方向に並ぶ小穴列である。その他の小穴は規則性のないもので、性格は不明ある。小穴の時期については検出面及び周辺の遺構の状況からみて、古墳時代前期(布留式古相)に比定されるものと思われる。

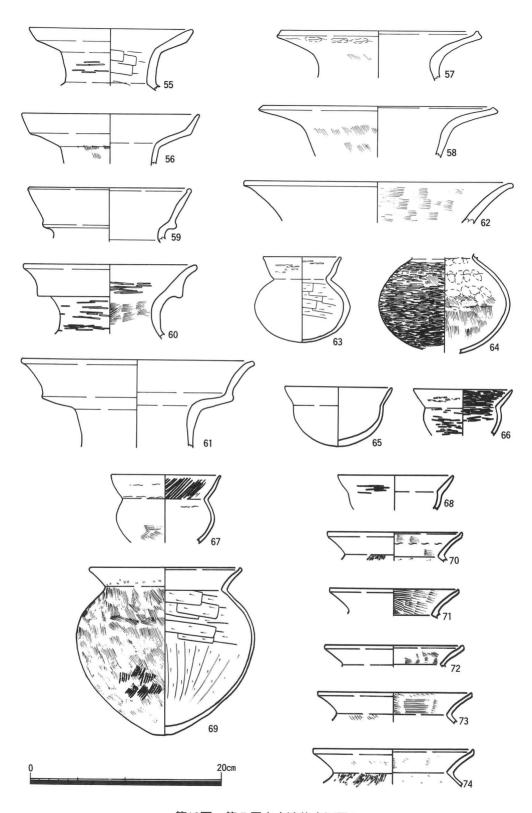
第1表 小穴(SP)一覧表

※単位はcm

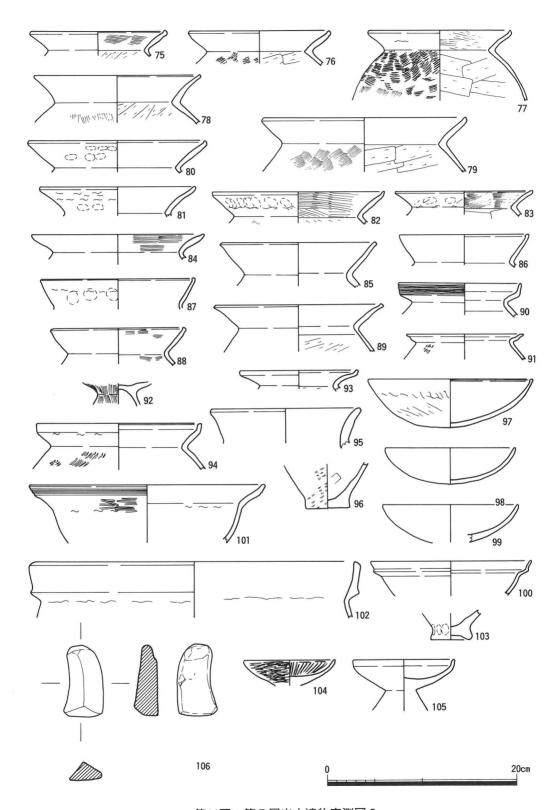
	10 101						
遺構番号	区名	平面形	断面形	径	深さ	堆 積 土	備考
SP-201	2a区	円形	半円形	36~41	6.5	灰褐色粘質シルト	小穴列
SP-202	2a区	楕円形	半円形	32~44	20	灰褐色粘質シルト	小穴列
S P -203	2a区	方 形	半円形	45~65	8	灰褐色粘質シルト	小穴列
SP-204	2b区	楕円形	半円形	30~40	16.5	灰褐色粘質シルト	小穴列
SP-205	2b区	_	半円形	52	10	灰褐色粘質シルト	
SP-206	3a⊠	_	半円形	38	9	灰褐色粘質シルト	
SP-207	3a⊠	円形	半円形	35	11	灰褐色粘質シルト	SB-201
SP-208	3a⊠	円形	半円形	36	17	灰褐色粘質シルト	SB-201
SP-209	3b⊠	円形	半円形	24~30	9	灰褐色粘質シルト	SB-201
S P -210	3b区	楕円形	逆台形	56~58	23	淡灰色砂礫混細砂	SB-201
S P -211	3b⊠	円形	半円形	32	8	灰褐色粘質シルト	SB-201
S P -212	3b⊠	楕円形	半円形	35	14	灰褐色粘質シルト	SB-201
S P -213	3b区	楕円形	半円形	24~30	9	灰褐色粘質シルト	SB-201
S P -214	3b⊠	円形	半円形	24~26	26	灰褐色粘質シルト	
S P -215	3b区	円形	半円形	20~30	9	灰褐色粘質シルト	
SP-216	3b⊠	円形	半円形	20~26	13	灰褐色粘質シルト	
SP-217	4b区	円形	半円形	30	14	灰褐色粘質シルト	
S P -218	3a⊠	楕円形	半円形	25	12	灰褐色粘質シルト	
SP-219	4a⊠	楕円形	半円形	27~30	14	灰褐色粘質シルト	
SP-220	4a⊠	楕円形	半円形	34~47	5	灰褐色粘質シルト	

4) 遺構に伴わない出土遺物

第6層~第7層内から古墳時代前期から古墳時代後期に至る遺物を出土した。調査区内での

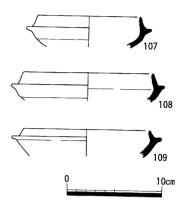


第10図 第7層出土遺物実測図1



第11回 第7層出土遺物実測図2

出土量はコンテナ箱にして約2箱分である。特に第8層から出土した古墳時代前期前半(布留式古相)の土器が大半を占めていた。図示できたものについて記す。第7層から出土した土器は55~67の壺である。55・56・60・61は複合口縁壺、57・58は広口壺、65~67は小型丸底壺、69~96は甕である。69~85は庄内式甕、86~89は布留式甕、90は吉備系の甕、91・92は東海系のS字口縁甕である。97~103は鉢である。104・105は器台、106は砥石である。第6層から出土した古墳時代後期に比定される須恵器の坏身(107~109)である。



第12図 第6層出土遺物実測図

5) 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器 種 遺構番号	法量 (cm)	口径 器高	形態と技法と特徴	色 調	胎土	焼成	備考
1	甕 (土師器) S K - 201	口径	14.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部ナデ、 内面ヘラケズリ	淡黄灰色	3 mm 以下の砂粒 (長石・雲母)を少 量含む	良好	
2	壷 (土師器) S D−207			口縁外面ヘラミガキ、内面ヘラミガ キ・ヘラナデ	明茶灰色	4 mm以下の砂粒 (長石・石英・雲 母)を微量に含む	良好	
3	同上 S D-207	口径	22.8	口縁部外面ヘラミガキ	淡灰黄茶色	3 mm以下の砂粒 (長石・雲母)を微 量に含む	良好	
4	同上	口径	20.8	口縁部内外面ハケナデ後ヨコナデ	外 淡灰黄茶色 内 淡灰橙茶色	3 mm以下の砂粒 (長石・雲母・石 英)を少量含む	良好	
図版四 5	SD-207 同上	口径	22.7	口縁部内外面ヨコナデ	外 淡灰茶色~ 暗赤灰茶色 内 暗灰褐色	8 mm以下の砂粒 (長石・赤褐色酸 化粒・雲母)を少	良好	
図版四	S D -207				,, ,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	量含む		
6 図版四	同上 S D -207	体部径 底径	26. 2 5. 2	体部外面ハケナデ後ヘラミガキ、内 面ヘラケズリ後ヘラナデ・接合痕	乳灰橙色	5 mm以下の砂粒 (長石・石英)を多 量に含む	良好	黒斑有り
7	小型丸底壺 (土師器) SD-207	口径	7.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面へ ラケズリ、内面ヘラナデ	淡明茶灰色	4 mm以下の砂粒 (長石・雲母)を微量に含む	良好	
8 図版四	同上 S D -207	口径 器高	10. 7 6. 7	口縁部外面へラミガキ、内面ヨコナ デ、体部外面へラケズリ後へラミガ キ、内面ナデ	明茶灰色	3 mm以下の砂粒 (長石・雲母)を少 量含む	良好	
9	同上	口径	11.2	口縁部内外面へラミガキ、体部外面、 体部外面へラミガキ、内面ナデ	外 淡灰茶褐色 内 明橙茶色	1 mm以下の砂粒 (長石・石英・雲	良好	
図版四 10	SD-207 同上	口径	11, 2	口縁部内外面ヘラミガキ、体部外面 タタキ後ヘラミガキ、内面ナデ	淡灰茶褐色	母)を微量に含む 3 mm以下の砂粒 (長石・石英・石	良好	
図版四 11	SD-207 同上	口径	12.0	口縁部内外面へラミガキ、体部外面 ヘラミガキ、内面ヘラナデ	淡灰茶色	英)を少量含む 3 mm以下の砂粒 (長石・雲母・石	良好	
12	SD-207 同上	口径器高	10. 8 8. 8	口縁部内外面へラナデ、体部外面内 面へラミガキ、内面ナデ	乳灰茶色~明茶 灰色	英)を少量含む 2 mm以下の砂粒 (長石・雲母・チャー	良好	
図版四	S D - 207 同上	口径	12. 4	口縁部内外面へラミガキ、内面放射 状へラミガキ、体部外面上位へラミ	淡茶灰色	ト)を微量に含む 1 mm 以下の砂粒 (長石・石英)を微	良好	
図版四	SD-207 甕 (土師器)	口径器高	10. 8 13. 1	ガキ・下位ヘラケズリ、内面ナデ 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ ケナデ、内面ヘラケズリ	淡茶灰色	量に含む 1.5mm以下の砂粒 (雲母) を少量含	良好	
図版四 15	SD-207 同上	最大径 口径	14. 4	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、 体部外面タタキ後ハケナデ、内面へ	淡灰茶色	む 3 mm以下の砂粒 (長石・雲母)を少	良好	煤付着
図版四	S D -207	器高 最大径	17. 7 17. 1	ラケズリ・底面指頭圧痕		量含む		
16 図版五	同上 SD-207	口径 器高 最大径	14.5 19.5 18.6	□縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、 体部外面タタキ後ハケナデ、内面へ ラケズリ	淡灰茶色	1 mm 以下の砂粒 (雲母)を少量含む	良好	煤付着
17 図版五	同上	口径	12.8		淡灰茶色~淡橙 灰色	3 mm以下の砂粒 (長石・雲母)を含む	良好	
18	SD-207 同上	口径	12.8		茶灰色	2.5mm以下の砂粒 (長石・石英・雲	良好	
図版五	SD-207 同上	口径	15, 0	口縁部内外面ヨコナデ・指押さえ、 体部外面タタキ後ハケナデ、内面へ	淡灰茶色	母)を多量に含む 0.5mm以下の砂粒 (雲母)を微量に含	良好	
20	SD-207 同上	口径	15. 6	ラケズリ 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、 体部外面タタキ、内面ヘラケズリ	茶灰色	t 1.5mm以下の砂粒 (石英・雲母)を多	良好	
21	S D-207 同上	口径	14.6		暗茶灰色	量に含む 3 mm以下の砂粒 (長石・角閃石・	良好	
図版五 22	S D-207	口径	13.8	ケズリ 剝離のため口縁部外面ヨコナデ・指	茶灰色	雲母)を少量含む 0.5mm以下の砂粒	良好	
	S D -207			ナデ、内面ハケナデ		(角閃石・雲母)を 少量含む		

図版番号 遺構番号 23		法量	口径	亚红 首先 九 十十 九 九 4十 400	/* =m			
(土師器 S D - 20) 24			器高	形態と技法と特徴	色 調	胎土	焼成	備考
SD-207 24		口径	15.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面へ ラケズリ	灰色	2 mm以下の砂粒(長 石・赤褐色酸化粒	良好	
24 同上 SD-20 25 同上 SD-20 26 同上 SD-20 27 同上 SD-20 28 同上 図版五 SD-20 30 同上 SD-20 30 31 同上 SD-20 32 国上 SD-20 33 同上 図版五 SD-20 34 同上 図版五 SD-20 35 同上 図版五 SD-20 36 同上 図版六 SD-20 37 同上 図版六 SD-20 39 同上 SD-20 39 39 同上 SD-20 40 41 同上 図版六 SD-20 41 同上 図版六 SD-20 42 同上						・角閃石)を少量		
SD-201 SD-201		口径	15. 2	口縁外面ヨコナデ・指押さえ・接合	灰茶色	含む 2 N T 0 7 h 性 (F	d 47	Mt () W
SD-20° 26		н д	10. 2	痕、内面ハケナデ	灰条巴	2 mm以下の砂粒(長 石)を微量に含む	良好	煤付着
26 同上 SD-20 27 同上 SD-20 28 29 同上 図版五 SD-20 30 同上 SD-20 31 31 同上 SD-20 32 32 同上 図版五 SD-20 34 同上 図版五 SD-20 35 同上 図版五 SD-20 36 同上 図版六 SD-20 37 同上 図版六 SD-20 38 同上 SD-20 39 40 同上 SD-20 41 国版六 SD-20 41 同上 図版六 SD-20 42 同上	司上「	口径 :	15. 4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タ タキ後ハケナデ、内面へラナデ	外 黒色 内 灰茶色	2 mm以下の砂粒 (雲 母) を微量に含む	良好	
SD-20** 27 同上 SD-20** 28 同上 図版五 SD-20** 30 同上 30 同上 31 同上 32 同上 34 同上 図版五 SD-20** 34 同上 図版五 SD-20** 35 同上 図版五 SD-20** 36 同上 図版五 SD-20** 37 同上 図版六 SD-20** 38 同上 図版六 SD-20** 39 同上 SD-20** 40 同上 SD-20** 41 同上 図版六 SD-20** 41 同上 図版六 SD-20** 42 同上 図版六 SD-20**	-207							
27 同上 8 月上 1 月上 図版五 S D - 200 29 同上 図版五 S D - 200 30 同上 31 同上 S D - 200 32 32 同上 図版五 S D - 200 34 同上 図版五 S D - 207 36 同上 図版六 S D - 207 37 同上 図版六 S D - 207 38 同上 S D - 207 40 同上 S D - 207 41 同上 図版六 S D - 207 41 同上 図版六 S D - 207 42 同上		口径	16.0	口縁部内外面ヨコナデ・接合痕、体 部外面ハケナデ、内面ハケナデ・ヘ ラケズリ・接合痕	乳灰茶色	1 mm以下の砂粒(長石・雲母)を少量含む	良好	Í
28 同上 図版五 SD-202 29 同上 図版五 SD-203 30 同上 30 同上 SD-203 31 同上 SD-203 32 同上 図版五 SD-207 34 同上 図版五 SD-207 35 同上 図版五 SD-207 36 同上 図版五 SD-207 37 同上 図版六 SD-207 38 同上 図版六 SD-207 38 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上		口径]	13. 6	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ	茶灰色	4 mm以下の砂粒(長	良好	煤付着
28 同上 図版五 S D - 207 30 同上 S D - 207 31 同上 S D - 207 32 同上 図版五 S D - 207 34 同上 図版五 S D - 207 36 同上 図版六 S D - 207 38 同上 S D - 207 38 同上 S D - 207 39 同上 S D - 207 40 同上 S D - 207 41 同上 S D - 207 41 同上 S D - 207 42 同上 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区	-207			ケナデ、内面ヘラケズリ	31.31	石・角閃石・雲母)	1621	M II / II
図版五 SD-202 29 同上 図版五 SD-203 30 同上 31 同上 SD-203 31 同上 SD-203 32 同上 図版五 SD-207 34 同上 図版五 SD-207 35 同上 図版五 SD-207 36 同上 図版六 SD-207 37 同上 図版六 SD-207 38 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上		口径 :	13. 3	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ	灰茶色	を多量に含む 2 mm以下の砂粒 (雲	良好	黒斑有り
29 同上 図版五 SD-207 30 同上 30 同上 SD-207 31 同上 SD-207 32 同上 SD-207 33 同上 図版五 SD-207 36 同上 図版五 SD-207 37 同上 図版六 SD-207 38 同上 図版六 SD-207 39 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 41 同上				ケナデ、内面ヘラケズリ・ナデ	八米已	母・角閃石)を多量	及灯	赤斑有り
図版五 SD-207 30 同上 SD-207 31 同上 SD-207 32 同上 SD-207 33 同上 図版五 SD-207 36 同上 図版五 SD-207 37 同上 図版六 SD-207 38 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 41 同上		口径 1	16.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、	茶灰色	に含む	H 57	144 / 1 34
30 同上 SD-207 31 同上 SD-207 32 同上 図版五 SD-207 34 同上 図版五 SD-207 35 同上 図版五 SD-207 37 同上 図版六 SD-207 38 同上 SD-207 39 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上		HUE 1	10.0	体部外面タタキ、内面ヘラケズリ	条灰色	3 mm以下の砂粒 (雲 母) を少量含む	良好	煤付着
SD-207 31 同上 SD-207 32 同上 図版五 SD-207 34 同上 図版五 SD-207 36 同上 図版六 SD-207 37 同上 図版六 SD-207 38 同上 SD-207 39 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上		m 42 +	10.0	ロ標準中科ズラ・・) **。 ひかよて				
31 同上 SD-207 32 同上 SD-207 33 同上 図版五 SD-207 34 同上 図版五 SD-207 35 同上 図版五 SD-207 36 同上 図版六 SD-207 37 同上 図版六 SD-207 39 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 41 同上		口径 1	12.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面へラケズリ	暗灰茶色	2 mm以下の砂粒(角 閃石・雲母)を多量 に含む	良好	煤付着
32 同上 32 同上 30 同上 図版五 S D - 207 34 同上 図版五 S D - 207 35 同上 図版六 S D - 207 37 同上 図版六 S D - 207 38 同上 S D - 207 39 40 同上 S D - 207 41 同上 図版六 S D - 207 42 同上		口径 1	11.2	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面へ	吹にせな	2 117.0754 / F		
SD-207 33 同上 図版五 SD-207 34 同上 図版五 SD-207 36 同上 図版六 SD-207 37 同上 図版六 SD-207 38 同上 SD-207 39 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上 図版六 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上 □上 □上 □上 □上 □上 □上 □上		HIE I	11.2	ラケズリ	暗灰茶色	3 mm以下の砂粒(長石・雲母)を微量に 含む	良好	
図版五 S D - 207 34 同上 図版五 S D - 207 35 同上 図版五 S D - 207 36 同上 図版六 S D - 207 38 同上 S D - 207 40 同上 S D - 207 41 同上 図版六 S D - 207 42 同上		口径 1	11.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タ タキ後ハケナデ、内面ヘラケズリ	暗灰茶色	2 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	煤付着
34 同上 図版五 S D - 207 35 同上 図版五 S D - 207 37 同上 図版六 S D - 207 38 同上 S D - 207 39 同上 S D - 207 40 同上 S D - 207 41 同上 図版六 S D - 207 42 同上		 口径 1	3. 4	口縁部内外面ヨコナデ・接合痕、内	淡茶灰色	1.5mm以下の砂粒	良好	煤付着
34 同上 図版五 S D - 207 35 同上 図版五 S D - 207 37 同上 図版六 S D - 207 38 同上 S D - 207 39 同上 S D - 207 40 同上 S D - 207 41 同上 図版六 S D - 207 42 同上		器高 1 最大径 1	4.4	面ハケナデ、体部外面ハケナデ、内 面ヘラケズリ・接合痕	NAME OF THE PERSON OF THE PERS	(赤褐色酸化粒・雲	16×1	外门相
図版五 SD-207 35 同上 図版五 SD-207 36 同上 図版六 SD-207 37 同上 図版六 SD-207 38 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上				口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ	灰茶色	母)を少量含む 5.5mm以下の砂粒	良好	黒斑有り
図版五 S D - 207 36 同上 図版六 S D - 207 37 同上 図版六 S D - 207 38 同上 S D - 207 39 同上 S D - 207 40 同上 S D - 207 41 同上 図版六 S D - 207 42 同上	-207			ケナデ、内面ヘラケズリ、頚部接合 痕	· // / / / / / / / / / / / / / / / / /	(長石・雲母・角閃石)を微量に含む	1631	
図版六 SD-207 37 同上 図版六 SD-207 38 同上 SD-207 39 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上		J径 1	2.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ ケナデ、内面ヘラケズリ	淡灰橙色	2 mm以下の砂粒(長 石)を多量に含む	良好	煤付着
同上 図版六 SD-207 38 同上 SD-207 39 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上		器高 2	2.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケオが大の面のラケズリ・指押さえ、	淡茶灰色	1 mm以下の砂粒 (雲 母・石英) を少量含	良好	煤付着
図版六 SD-207 38 同上 SD-207 39 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上				頚部接合痕 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ	10分尺 女 女	to black the	± 1-7	May 2 1 - 34-
SD-207 39 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上		IE 1	4.0	ケナデ、内面ヘラケズリ	暗灰茶色	1.5mm以下の砂粒 (長石・角閃石・雲 母)を少量含む	良好	煤付着
39 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上		J径 1	3. 6	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ	黒灰色~暗灰茶	2 mm以下の砂粒(長	良好	
39 同上 SD-207 40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上	-207			ケナデ、内面ヘラケズリ・指押さえ	色	石)を多量に含む		
40 同上 SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上		J径 1		口縁部内外面ヨコナデ、体部外面摩	淡灰橙色	2 mm以下の砂粒 (長	良好	
SD-207 41 同上 図版六 SD-207 42 同上	-207			耗のため調整不明、内面ヘラケズリ		石)を多量に含む		
41 同上 図版六 S D - 207 42 同上	1上 口	□径 1	5. 6	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ ケナデ・指押さえ、内面へラケズリ	外 淡灰茶色 内 淡橙灰色	1 mm以下の砂粒(長 石・赤褐色酸化粒・	良好	黒斑有り
図版六 S D - 207 42 同上		□ □ □	4 0	口侵郊内风声 1 - 2 - 2 - 4 - 4 - 4	* = 4	雲母)を多量に含む	1.7=	
	乖			口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ ケナデ、内面ヘラケズリ	茶灰色	3 mm以下の砂粒(長石・雲母)を多量に含む	良好	
図版六 S D - 207	IL [7径 1	5. 6	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、	茶灰色	1.5mm以下の砂粒	良好	-
	-207			体部外面タタキ、内面ヘラケズリ		(石英・雲母) を多 量に含む		
43 同上	2	景高 19	9. 7	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ、 体部外面タタキ、内面ハケナデ・ヘ	外 淡灰茶色~	2 mm以下の砂粒 (長 石・石英・雲母・赤	良好	黒斑有り
図版六 S D-207		最大径 1:	J. 0	ラナデ・接合痕	内 淡茶灰色	褐色酸化粒)を少量 含む		
44 同上 図版六 SD-207		J径 1;		剝離のため口縁部外面ヨコナデ・指 ナデ、内面ハケナデ	茶灰色		良好	

遺物番号	器 種	法量	口径					415
週初番号 図版番号	器 種 遺構番号	伝里 (cm)	器高	形態と技法と特徴	色 調	胎 土	焼成	備考
45	甕 (土師器)	口径 器高 最大径	14. 4 22. 3 21. 4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ ケナデ、内面指ナデ・ヘラケズリ	外 淡褐灰色 内 淡灰茶色	5 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を少量含 む	良好	煤付着
図版六 46 図版六	SD-207 同上 SD-207	口径	12. 6	口縁内外面ヨコナデ、端面櫛描文、 体部外面ハケナデ、内面ヘラケズリ	暗灰茶色	0.5mm以下の砂粒(雲 母)を少量含む	良好	
47 図版六	同上 S D - 207	口径	15.4	□縁部内外面ヨコナデ、体部外面タ タキ後ハケナデ、内面へラナデ	外 黒色 内 灰茶色	2 mm以下の砂粒(雲母)を微量に含む	良好	-
48	同上	口径	11.8	口縁部内外面ヨコナデ、端面櫛描文、 体部外面ヘラミガキ、内面ハケナデ	灰褐色	1.5mm以下の砂粒(雲母)を含む	良	煤付着
10	S D -207		10.5	・ヘラケズリ	外 暗灰茶褐色	3 mm以下の砂粒(長	良好	煤付着・
49 図版七	鉢 (土師器) S D - 207	口径 器高	12. 7 5. 0	外面ナデ・指頭圧痕、内面ヘラナデ	内乳灰茶色	石・石英・雲母)を 多量に含む	1641	完形
50	同上	口径 器高	20. 2 5. 6	外面へラケズリ・ヨコナデ、内面ナ デ	外 淡灰茶褐色 内 明茶灰色	3 mm以下の砂粒(雲 母・長石)を多量に	良好	完形
図版七	S D -207				LI WELLER	含む	rh 47	
51 図版七	同上 S D - 207	口径 器高	16. 9 5. 8	外面ヘラケズリ・ヨコナデ、内面放 射状ヘラミガキ・ヨコナデ	外 淡灰褐色 内 淡灰茶色	5 mm以下の砂粒(雲 母・長石)を少量含 む	良好	
52	器台	口径	9.8	坏部内外面ヘラミガキ脚部外面ヘラ	外 淡灰茶色	1 mm以下の砂粒(長	良好	
図版七	(土師器) S D - 207			ミガキ、内面ナデ・四方孔有り	内 淡橙茶色~ 淡灰茶色	石・雲母)を微量に 含む		
53	同上 S D -207	口径	10. 2	坏部外面ヘラナデ後ヘラミガキ内面 ヘラミガキ後放射状ヘラミガキ	明茶灰色	4 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を微量に 含む	良好	
54	同上.	脚部径	12.5	 坏部外面ヘラミガキ、内面摩耗のた	淡茶灰色	3 mm以下の砂粒(長	良好	
図版七	S D - 207	四印生	12. 5	め調整不明、脚部外面ハケナデ後へ ラミガキ、内面ナデ	· 灰东八巳	石・石英・雲母)を微量に含む	LA.	
55	同上	口径	17.0	口縁部外面ヘラミガキ、内面ナデ・	外 明灰赤茶褐	7 mm以下の砂粒(赤	良好	
	第7層			ヘラナデ	色 内 乳灰茶色~ 淡茶褐色	褐色酸化粒・長石・ 石英)を少量含む		
56	同上	口径	18. 4	口縁部外面ヨコナデ・ハケナデ、内	外 淡橙茶灰褐色	3 mm以下の砂粒(長	良好	
図版七	第7層			面摩耗のため調整不明	内 暗褐色~淡 橙茶色	石・雲母・石英)を 多量に含む		
57	同上 第 7 層	口径	20. 4	口縁部外面ヨコナデ・ハケナデ・指 頭圧痕・接合痕、内面ヨコナデ	明黄茶褐色	1 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を含む	良好	
58	同上 第7層	口径	24.0	口縁部外面ヨコナデ・ハケナデ、内 面剝離のため調整不明	外 乳灰茶色 内 暗灰橙茶褐 色	3 mm以下の砂粒(長 石・石英・赤褐色酸化 粒)を少量含む	良好	
59	同上	口径	16.8	口縁部内外面ヨコナデ、内面ヘラケ	外 淡灰褐色	1 mm以下の砂粒(長	良	
00	第7層		10.0	χ̈́υ,	内 淡灰茶色	石・赤褐色酸化粒) を少量含む		
60	同上	口径	18.0	口縁部外面ヘラミガキ、内面ヘラミ	外。淡灰赤茶色	5 mm以下の砂粒(長	良好	
図版七	第7層			ガキ・ハケナデ	一 心淡黑赤茶色 内 暗灰茶褐色	石・角閃石・雲母) を少量含む		
61	同上	口径	24.0	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ	淡灰茶色	3 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を少量含	良好	
図版七	第7層			HAMBER IN THE	V/ -10 -10 -10 -10 -10 -10 -10 -10 -10 -10	むり下の砂粒/巨	± 4.7	
62	第7層	口径	27.4	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ	淡茶灰茶褐色	4 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	
63	第 / 層 同上	口径	8.0	口縁部内外面ヘラミガキ、体部外面	淡茶灰色	2 mm以下の砂粒(長	良好	
		器高	9. 1			石・雲母・石英)を		
図版七 64	第7層	-		体部外面ハケナデ後ヘラミガキ、内	明茶灰色	3 mm以下の砂粒(石	良好	1
04	第7層			面ハケナデ・指ナデ・接合痕	77.77.6	英・赤褐色酸化粒・	1	
65	同上	口径	11. 2			4 mm以下の砂粒(長	良好	
図版七	第7層	器高	6.3	摩耗のため調整不明	内 乳茶灰色~ 淡灰色	石・石英・雲母) を 少量含む		
66	同上	口径	10.2		淡茶灰色	1 mm以下の砂粒(石		
	第7層			ハケナデ後ヘラミガキ		英・長石・赤褐色酸 化粒・雲母)を微量 に含む		
67	同上	口径	11. 2	キ、体部外面ハケナデ、内面ナデ・	淡橙茶色	4 mm以下の砂粒(長 石・赤褐色酸化粒・	良好	
	第 7 層			接合痕		雲母)を微量に含む		1

遺物番号 図版番号	器 種 遺構番号	法量	口径	形態と技法と特徴	色 調	胎土	焼成	備考
68	題 傳 省 ケ	(cm) 口径	器高 12.0	内外面へラミガキ				加亏
	(土師器) 第7層	- inc	12.0	(11) Гш. () () 4	淡橙茶灰色	3 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を少量含 む		
69 図版七	同上 第 7 層	口径 器高 最大径	15. 7 17. 7 18. 6	│□縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、 体部外面タタキ後ハケナデ、内面へ ラケズリ	外 淡灰茶色 内 暗灰褐黄色	3 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を少量含 む	良好	
70	同上 第7層	口径	14.0	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ ・接合痕、体部外面タタキ、内面へ ラケズリ	暗灰茶色	1 mm以下の砂粒 (雲 母・長石) を少量含	良好	
71	同上 第7層	口径	13. 4	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、 体部内面ヘラケズリ	淡灰茶褐色	1 mm以下の砂粒 (雲 母・角閃石・雲母)	良好	
72	拳 (土師器)	口径器高	12. 7 5. 0	外面ナデ・指頭圧痕、内面ヘラナデ	外 暗灰茶褐色 内 乳灰茶色	を少量含む 3 mm以下の砂粒(長 石・石英・雲母)を	良好	煤付着・ 完形
73	第 7 層 同上	口径	16.0	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、	外 暗灰茶褐色	多量に含む 3 mm以下の砂粒 (雲	良好	JENZ
74	第7層	口径	16.6	体部内外面へラケズリ	内 茶灰褐色~ 灰黄褐色	母・長石・角閃石)を微量に含む		
	第7層			口縁部内外面ハケナデ、体部外面タ タキ、内面ヘラケズリ	外 淡灰褐色 内 暗灰黄色~ 明茶灰色	2 mm以下の砂粒 (雲 母・長石・角閃石) を微量に含む	良好	
75	同上 第7層	口径	14.2	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、 体部内面ヘラケズリ	乳灰色	3 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を微量に含む	良好	
76	同上 第7層	口径	14.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タ タキ、内面ヘラケズリ	淡灰茶褐色	4 mm以下の砂粒(長石・雲母・角閃石) を少量含む	良好	
77	同上 第7層	口径	14.8	口縁部外面ヨコナデ・接合痕、内面ハケナデ、体部外面タタキ後ハケナ	外 明褐灰色 内 暗灰褐色	3 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母)	良好	
78	同上	口径	17.4	デ、内面へラケズリ 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ ケナデ、内面へラケズリ	淡橙茶灰色	を少量含む 3 mm以下の砂粒(長 石・石英・雲母)を	良好	煤付着
79	第7層 同上	口径	21. 2	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ ケナデ、内面ヘラケズリ	外 淡橙灰茶色	多量に含む 3 mm以下の砂粒 (長	良好	
80	第7層 同上	口径	18, 6	口縁部外面ヨコナデ・指頭圧痕、内	内 暗灰褐色 淡茶灰色	石・雲母・石英)を 多量に含む 2 mm以下の砂粒(長	良好	44
81	第 7 層 同上	口径		面ヨコナデ 口縁部外面ヨコナデ・指押さえ・接	暗茶灰色	石・雲母)を含む 2 mm以下の砂粒(長	良好	
82	第7層	口径	18, 0	合痕、内面ヨコナデ 口縁部外面ヨコナデ・指頭圧痕、内	淡灰白色	石・雲母)を含む	ula 17	
	第 7 層			面ハケナデ、体部外面ハケナデ、内 面ヘラケズリ	(人)八日已	6 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を微量に 含む	良好	
83	同上 第7層	口径		口縁部外面ナデ・指押さえ・接合痕、 内面ハケナデ	淡橙灰色	1 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を含む	良	
84	同上 第7層	口径	19. 2	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ	乳灰茶色	3 mm以下の砂粒(長 石・雲母・赤褐色酸 化粒)を微量に含む	良好	
85	同上 第7層	口径	16.0	口縁部内外ヨコナデ	外 乳茶灰色 内 乳灰茶色	3 mm以下の砂粒を多量に含む	良	
86	同上	口径		口縁部内外面ヨコナデ、体部内面へ ラケズリ	淡灰褐色	2 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を少量含	良好	黒斑有り
87	第7層 同上	口径		口縁部外面ヨコナデ・指頭圧痕・接 合痕、内面ヨコナデ	乳灰橙色	む 1 mm以下の砂粒 (長 石・雲母) を少量含	良好	
88	第7層	口径		口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	淡橙灰色	む 2 mm以下の砂粒 (長	良好	
89	第7層	口径 1	17.4	・ハケナデ、体部ハケナデ □縁部内外面ヨコナデ、体部外面摩	外 淡茶灰色	石・雲母)を少量含む 2mm以下の砂粒(長	白紅	
90	第7層			耗のため調整不明、内面へラケズリ 	内 淡橙灰色	石・雲母) を多量に 含む	良好	
90	同上 第7層	口径 1	İ	□縁部外面ヨコナデ、内面へラミガ キ、体部外面ハケナデ、内面ナデ・ 接合痕	淡橙茶色	4 mm以下の砂粒 (長石・赤褐色酸化粒・ 雲母) を微量に含む	良好	

遺物番号 図版番号	器 種 遺構番号	法量 (cm)	口径 器高	形態と技法と特徴	色 調	胎土	焼成	備考
89	甕	口径	15.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面へ	灰色	2㎜以下の砂粒(長	良好	
	(土師器)			ラケズリ		石・赤褐色酸化粒・角閃石)を少量		
	第7層					含む		
90	同上 第7層	口径	11.8	口縁内外面ヨコナデ、端面櫛描文、 体部内面ヘラケズリ	茶灰色~暗灰茶 色	1.5mm以下の砂粒 (長石・雲母)を含 fc	良好	
91	同上	口径	12, 2		淡灰茶色	1 mm以下の砂粒 (雲	良好	
91	第7層	H1±	12, 2	タキ、内面ナデ	次从来已	母・長石)を微量に含む	1531	
92	同上			底部外面ハケナデ、内面ナデ	乳茶灰色	1 mm以下の砂粒(長	良	
	第7層					石・雲母)を多量に 含む		
93	同上	口径	12.4	口縁部内外面ヨコナデ、内面ヘラケ	淡灰色	1,5mm以下の砂粒	良好	
	第7層			ズリ		(雲母) を含む		
94	同上	口径	17.2	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ タタキ、内面ナデ	外 灰褐色 内 褐灰色	1.5mm以下の砂粒 (雲母・長石・赤褐	良好	黒斑有り
	第7層			/ / つく [1回 / /	F1 NOVE	色酸化粒)を含む		
95	同上	口径	15.6	口縁部内外面摩耗のため調整不明	灰褐色	4.5mm以下の砂粒	良	
						(長石・赤褐色酸化 粒・雲母)を多量に		
	第7層			w		含む		
96	同上	底径	4.6	底部外面タタキ・ナデ、内面ヘラナ デ	外 赤褐色 内 茶灰色	4 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を多量に	良好	
	第7層			,	17 条灰色	含む		
97	同上	口径	17. 2	外面ヘラケズリ・接合痕、内面ナデ	外 淡茶橙色	5 mm以下の砂粒 (長	良好	
		器高	5. 2		内 明茶橙色	石・赤褐色酸化粒 ・雲母)を少量含		
	第7層					t		
98	同上	口径	13.6	内外面剝離のため調整不明	乳茶灰色	3 mm以下の砂粒(長	良好	
	第7層	器高	3.9			石・雲母)を多量に 含む		
99	同上	口径	14.2	内外面摩耗のため調整不明	乳茶灰色	2 ㎜以下の砂粒(赤	良好	
						褐色酸化粒・長石 ・雲母) を多量に		
	第7層					含む		
100	同上	口径	16.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面	外淡茶橙色	1 mm以下の砂粒(長	良好	
				ヘラミガキ	内 明茶橙色	石・雲母・赤褐色 酸化粒) を微量に		
	第7層					含む		
101	同上 第7層	口径	12.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハ ケナデ、内面ヘラケズリ	淡灰橙色	2 mm以下の砂粒(長石)を多量に含む	良好	煤付着
102	大型鉢 (土師器)	口径	33.6	口縁部内外面剝離のため調整不明	外 淡茶橙色 内 明灰褐色~	7 mm以下の砂粒(長 石・石英)を多量に	良好	
	第7層				淡茶橙色	含む		
103	同上	底径	4.0		明赤褐色	4 mm以下の砂粒(長	良好	
				のため調整不明		│石・赤褐色酸化粒 ・雲母)を多量に		
	第7層					含む		
104	器台 (土師器)	受部径	9.6	「坏部外面ヘラミガキ、内面放射状へ ラミガキ	淡橙灰色	3.5 mm 以下の砂粒 (長石・雲母)を少	良好	
105	第7層	TO THE SA	10.0	受如中国をコッナラ	次支压在	量含む 1 mm以下の砂粒(雲	良好	
105	同上 第7層	受部径	10.6	受部内外面ヨコナデ	淡茶灰色	日 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日 一	良灯	
106	砥石 (不知口)	長径	7.6	研磨面4面	乳灰橙色		_	
	(石製品) 第7層	短径	2.0 ~ 4.0					
107	坏身	口径	10.8		淡灰青色~赤褐	密	良好	
	(須恵器) 第6層	受部径	13. 2	ケズリ	色			
108	同上	口径	13. 2	内外面回転ナデ	茶灰色~暗黒灰	密	良好	
100	第6層	受部径	15. 8	14/1MP44//	色	ш	2001	
109	同上	口径	15. 2		淡灰青色	密	良好	
	第6層	受部径	16. 2	ケズリ	L			J

3. まとめ

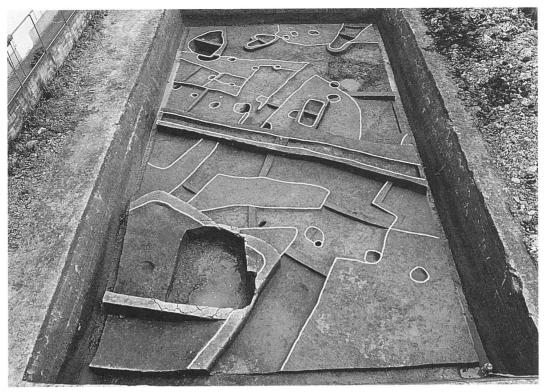
今回の発掘調査は、小面積な調査区であったが、古墳時代前期(布留式古相~新相)に比定される遺構面が2面確認された。検出遺構は第8層上面が布留式新相の時期に比定されるのもの、第9層上面が布留式古相の時期に比定されるのものである。

検出した布留式古相の遺構は乱雑に切り合っており、時期幅がみられたが遺構内から出土した遺物ではあまり時期差はみられなかった。

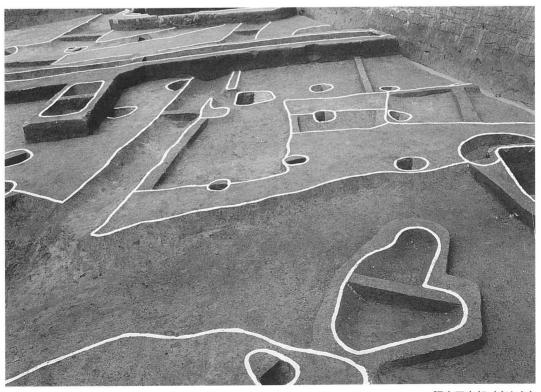
中田遺跡では、古墳時代前期の遺構・遺物が遺跡全体に点在していることが既往調査で確認されており、八尾市内の遺跡の中でも中心的な集落があったものと思われる。その証明として出土する遺物内には他地域から持ち込まれたものが数多く含まれており、中田遺跡の集落集団が活発な経済社会の情勢下にあったものと考えられ、重要な位置を占めていたものと思われる。今回の調査では中田遺跡の西側に存在する集落構成の一端が明らかになった。

参考文献

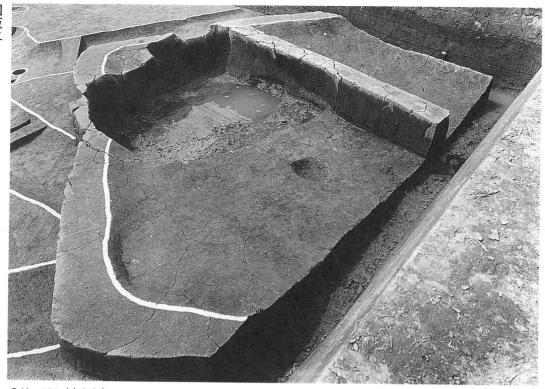
- 〇(財)八尾市文化財調査研究会『5. 中田遺跡第7次調査(NT91-7)』「平成3年度事業報告」1991
- ○(財)八尾市文化財調査研究会『WI 中田遺跡(第12次調査)』「八尾市埋蔵文化財調査報告」八尾市文化財 調査研究会報告39 1993



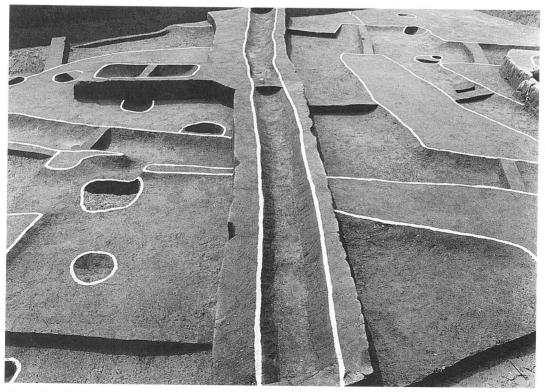
調査区全景(北から)



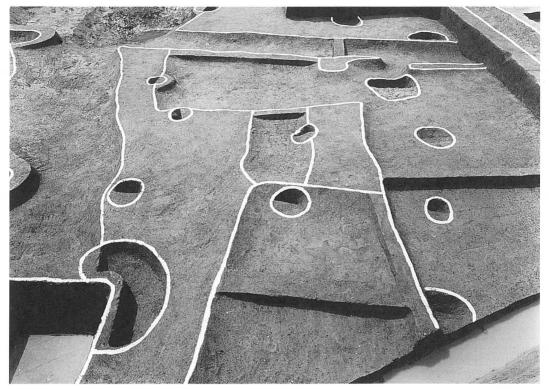
調査区南部(南から)



SK-101(南から)



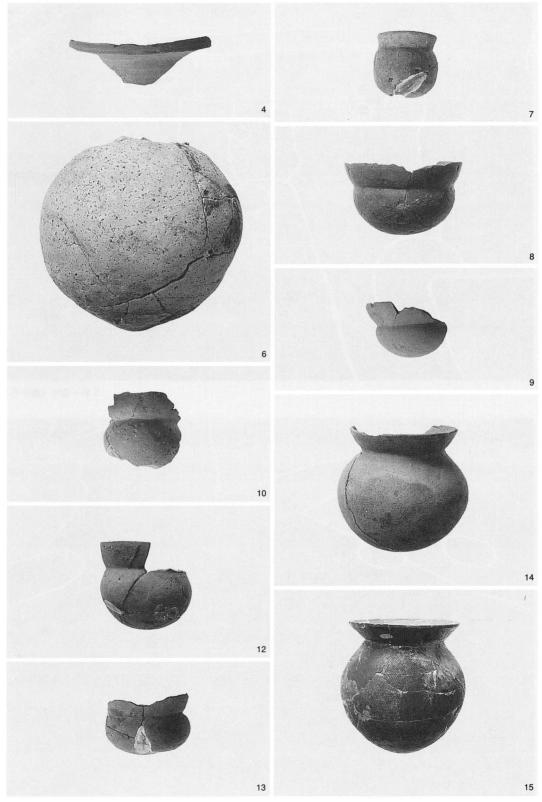
SD-101 (南東から)



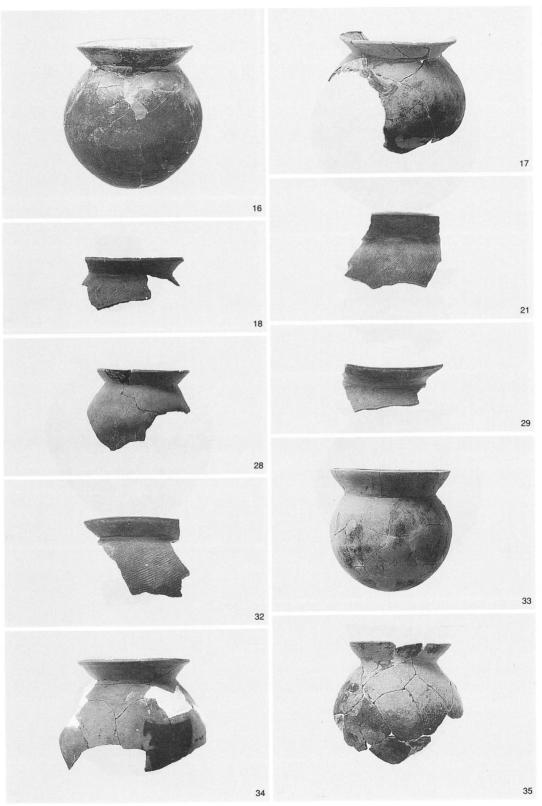
SB-201(南から)



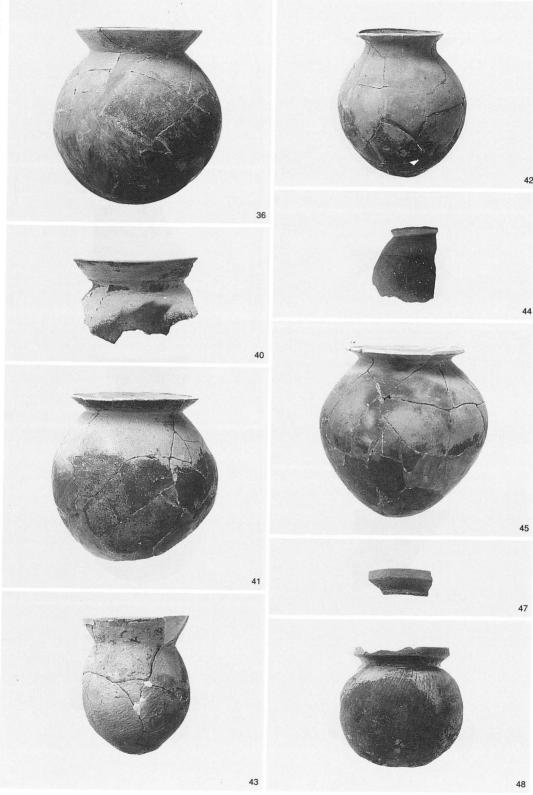
SD-207 (西から)



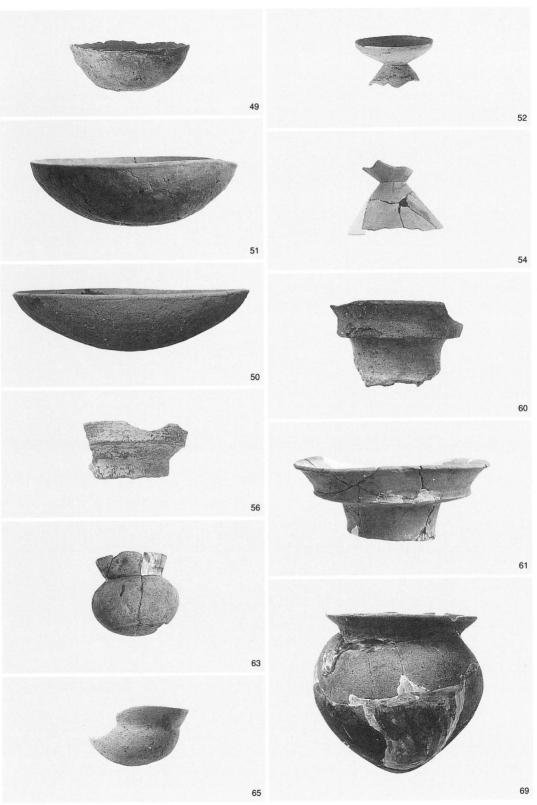
S D -207



SD-207



S D -207



S D −207 49~52·54 第7層 56·60·61·63·65·69



Ⅱ 中田遺跡第17次調査 (NT93-17)

例 言

- 1. 本書は、八尾市刑部3丁目82-2で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
- 1. 本書で報告する中田遺跡第17次調査 (NT93-17) の発掘調査業務は、八尾市教育委員会 の指示書 (八教社文第21号 平成5年4月30日) に基づき、財団法人八尾市文化財調査研 究会が山田定雄氏から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成5年7月28日~8月11日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。 調査面積は150㎡である。調査においては八田雅美・島野鋼一・松岡章雄・大西謙太郎が 参加した。
- 1. 本書に関わる業務は、遺物実測-西岡千恵子、図面レイアウト・トレース-市森千恵子・川上節子、遺物写真・本文の執筆-高萩が担当した。なお、追記では、八尾市立曙川小学校、奥田尚教諭に大型器台の胎土分析およびその結果を「大型器台の砂粒構成」と題して執筆していただいた。

本文目次

1		は	tじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
			査概要
			調査の方法と経過
			基本層序
			検出遺構と出土遺物······32
			遺構に伴わない出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
			出土遺物観察表
			とめ······50
			記)
	(17)		

Ⅱ 中田遺跡第17次(N T 93-17)

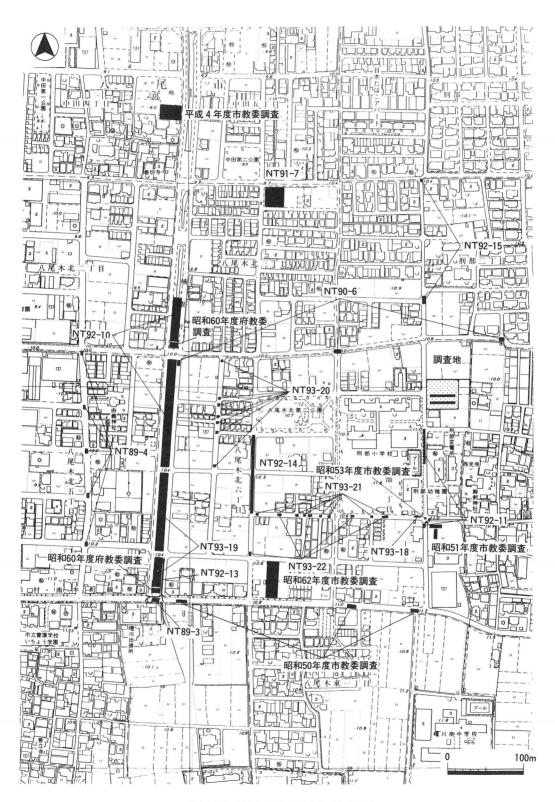
1. はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田1~6丁目、刑部 1~4丁目、八尾木北1~6丁目にあたる。

地理的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡 の周辺には南に東弓削遺跡、西に矢作遺跡、北西に成法寺遺跡、北に小阪合遺跡がある。

当遺跡では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・中田遺跡調査会・当調査研究会により 数次の発掘調査が実施され、弥生時代前期から近世にかけての複合遺跡であることが確認され ている。特に古墳時代初頭~前期にかけての遺構・遺物が全般に存在していることが調査で確 認されている。

今回実施した発掘調査は、中田遺跡の東部付近にあたる刑部 3 丁目82-2で行われる共同住宅建設に伴うものである。調査地の近接では南東部へ100mのところに御剣神社・浄土真宗本願寺派西光寺、北東部へ300mのところに石棺の蓋で作った六ヶ地蔵が位置する。また、刑部という地名の由来は古代の刑部氏の居所であったという。『日本書記』持統天皇8年条に「刑部造」の名がみえ、「新撰姓氏録」河内諸蕃に「刑部造、呉国人季牟意弥之後也」とあり、刑部はその支配下にある部氏が居住していたようで、その名が地名として伝えられたと言われている。近接地での調査では平成4年度に当調査研究会が実施した第11次調査地(NT92-11)や昭和51年以降、市教育委員会によって断続的な遺構確認調査が行われ、古墳時代前期を中心とした遺構・遺物が検出されている。



第1図 調査地位置図及び周辺図

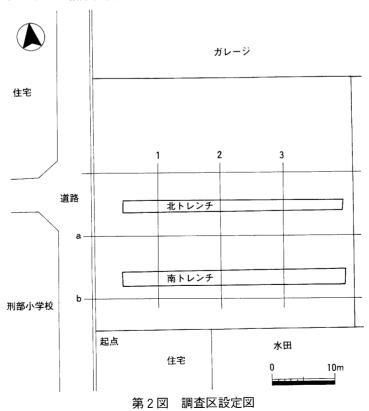
2. 調査概要

1)調査の方法と経過

今回の発掘調査は建設の基礎工事により遺跡が破壊される部分を対象にして調査区を設定した。調査区は幅 $2 \text{ m} \times$ 長さ35 m の東西トレンチ 2 本 で、面積 140 m^2 を測る(*調査区について各トレンチの長さは調査指示で37 m であったが、トレンチが隣接地と接しており、安全面などの諸事情により控え目に設定した)。調査期間は、平成 5 年 7 月28日~8 月11日までである。

調査区割は調査区の土地境界杭を利用した。南西部の境界杭を起点にし、方向は土地境界の西辺を合わせ、南北軸にした。そのラインから調査区部分をカバーできる範囲で $10\,\mathrm{m}$ 四方の方眼を設定した。区名は東西線(起点より北 $15\,\mathrm{m}$)が北から南へアルファベット($a\sim b$)、南北線(起点より東 $10\,\mathrm{m}$)が西から東へ数字($1\sim 4$)を付け、南西角より北西を優先し、1a区~4b区とした。

調査では、現地表下 1 m前後を機械で掘削し、以下0.3~0.4 mの土層について人力掘削及び精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。さらに下層の状況を確認するため、2 ヶ所を設定したが、湧き水が著しく激増したため、調査面より約70cm程度の土層状況の確認をとどまった。調査の結果、弥生時代後期から近代に至る遺構・遺物を検出した。遺物は遺構および包含層内からコンテナにして5箱分程度出土した。



- 31 -

2) 基本層序

北トレンチ・南トレンチで検出した土層から普遍的に見られる10層を摘出し、基本層序とし た。以下、土層について記す。

第1層:盛土 (層厚20cm)。現在の整地層である。

第2層:耕土(層厚15~20cm)。現在の水田耕作層である。上面で標高10.1mを測る。

第3層:旧耕土 (層厚15~20cm)。水田の床土である。

第4層:灰褐色粘砂 (層厚10~20cm)。

第5層:灰色砂礫混粘質土(層厚10~20cm)。中世の遺物を含む。

第6層:暗褐灰色粘質土 (層厚20~40cm)。古墳時代前期の包含層と考えられる。北トレン チの北西部では古墳時代後期の遺物を含む褐灰色細砂混粘質土がみられた。これら の上面より中世ごろの溝が切り込んでいるのを断面観察で確認している。

第7層:淡褐灰色粘質シルト

(層厚30~40cm)。弥生 時代後期から奈良時代 の遺構面である。

第8層:乳灰青色細砂混シルト (層厚20~30cm)。

第9層:褐灰色砂礫 (層厚10cm)。 主に1~3cmの大きさ

の礫を含む。

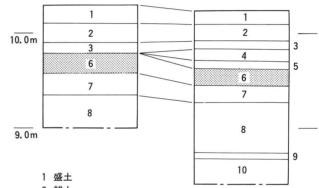
第10層:淡灰茶色微砂(層厚30

cm以上)。無遺物層。

第9層・第10層は南トレンチ西

部の下層調査で確認した土層であ

る。



2 耕土

3 旧耕土

4 灰褐色粘砂

5 灰色砂礫混粘質土

6 暗褐灰色粘質土

7 淡褐灰色粘質土

8 乳灰青色細砂混シルト

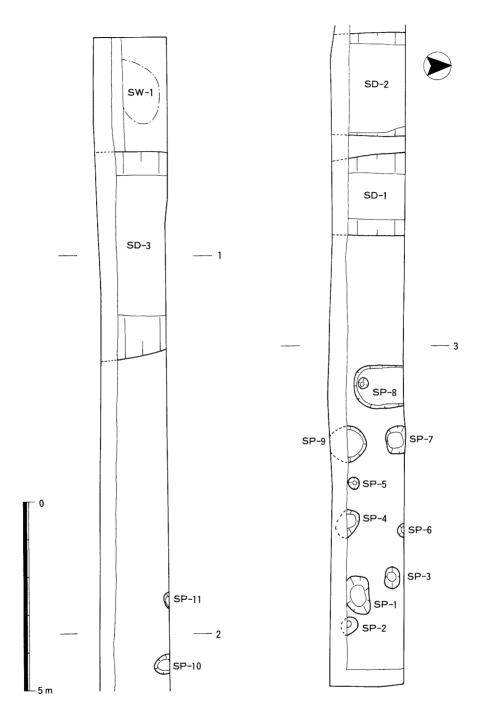
9 褐灰色砂礫

10 淡灰茶色微砂

第3図 基本層序柱状図

3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、第7層上面(標高9.4~9.6m) で弥生時代後期から奈良時代の遺構・遺物を検 出した。遺構は、北トレンチで弥生時代後期の土器集積1箇所(SW-1)、古墳時代前期 (布留式新相)~後期の溝3条(SD-1~SD-3)・古墳時代後期から奈良時代の小穴10 個(SP-1~SP-11)、南トレンチで古墳時代前期(布留式古相)の土坑2基(SK-1・ SK-2)を検出した。以下、遺構・遺物について記す。



第4図 北トレンチ遺構平面図

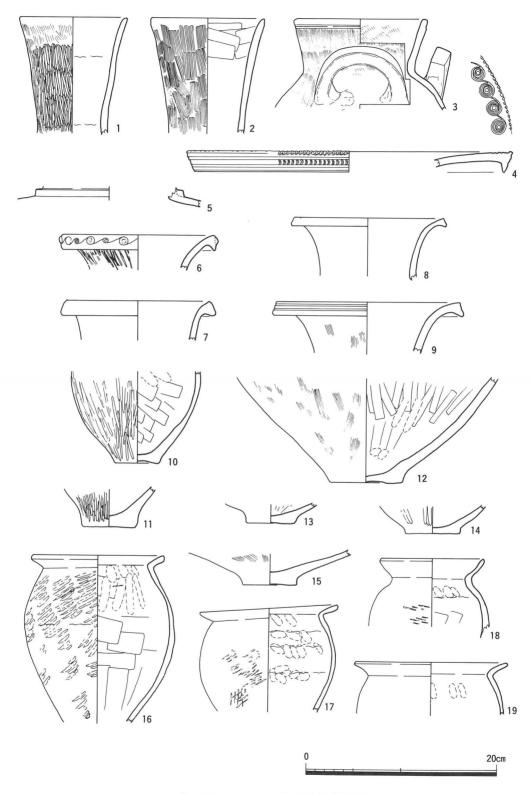
北トレンチ

土器集積 (SW)

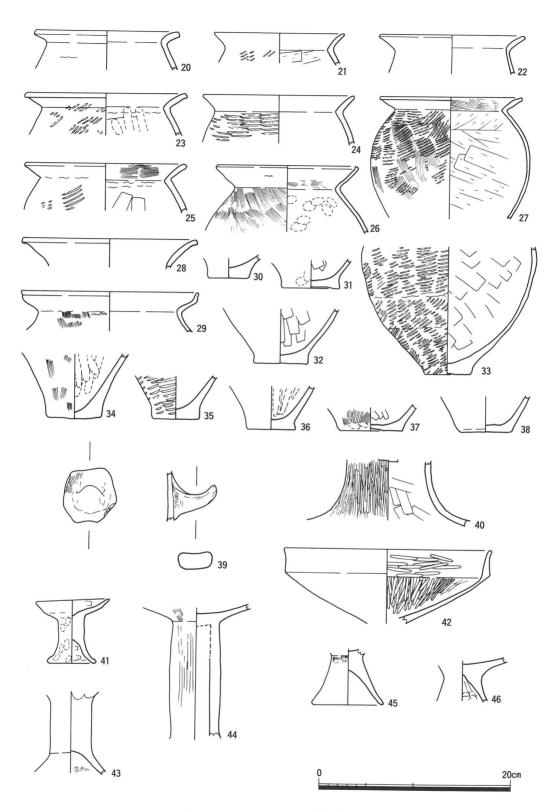
SW-1

西部(1a区)で検出した。東西幅1.2m、南北幅1.0mの範囲に盛り上がった状態で土器片の 集積を確認した。上部(第6層)は古墳時代後期の土層によって削平されている。調査中では 掘り形の輪郭やくぼみを確認することが出来なかったが、土器を取り上げると、最終的に深さ 約20cmを測った。内部の土器は破片化したもので、不用になったものを破棄したような状況で あった。量はコンテナ箱にして3箱を数える。器種でみると、壺・長頸壺・甕・高杯・特殊な 大型器台などがあった。これらの土器は弥生時代後期から古墳時代初頭(庄内式古相)に比定 されるものである。図示できたものは長頸壺(1・2)・取手付き壺(3)・壺(4~15)・甕 (16~25・28~38) ・庄内甕 (26・27) ・取手付き鉢 (39) ・器台 (40) ・ミニチュア土器 (41) ・高坏(42~53)・大型器台(54~56)である。このうち、大型器台は埴輪のルーツないし はその祖型の土器といわれている「特殊器台」を思わせる大きな器形を呈している。54は口縁 部と胴部上位部分の残存で、下位は欠損している。口径54.6cmを測り、大きく外反する。端部 は大きく垂れ下がり、端面には沈刻文及び円形浮文が施されている。胴部上位は四方の円形透 かしがあり、ハケナデ後、櫛状による直線文・波状文がある。55は器高60.0cm、口径50.6cm、 脚径46.8cmを測る。口縁部は54と同様、大きく外反し、端部は大きく垂れ下がる。端部内面に 波状文、外面に沈刻文及び棒状浮文が施されている。筒状の胴部は上位に二段の円形透かし、 中位に長方形の透かしと千鳥に斜格子の文様、その上下に2条の凸帯、綾杉文が施されている。 56は器高75.5cm、口径44.0cm、脚径45.0cmを測る。口縁部と底部は外反しているが54・55に比 ベ小さい。胴部は長い筒状で2条一対になった凸帯が四段あり、その間に透かしがある。中央 が長方形、上下は円形で五方向に開けられている。下部2段の透かしの間には2条一対になっ た凸帯が付き、その中には綾杉文が施されている。また、4は口縁部の一部のみの破片であり、 詳細なことは不明であるが、口縁端部には連続S字状文・刺突文・きざみ目文で飾られており、 大型器台の上に載せる壺形土器ではないかと考えられる。

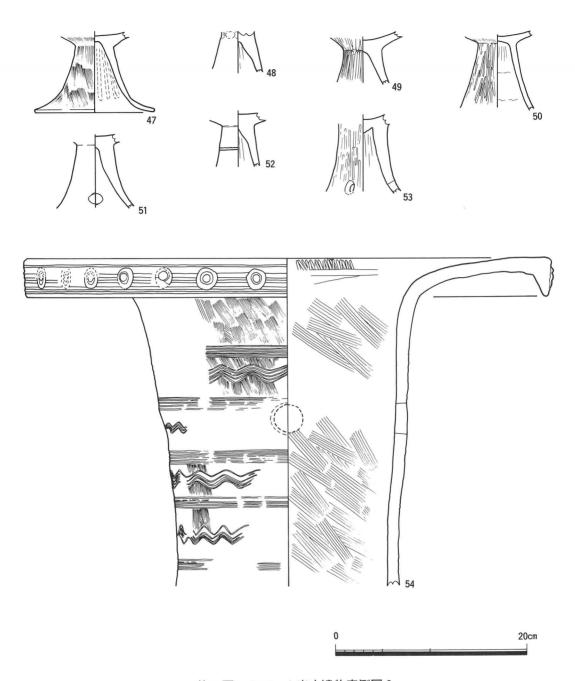
出土した遺物から判断すると、土器の大半は弥生時代後期前半のもので、ごくわずかに庄内 期のものから含まれることから、廃棄されたのは、古墳時代初頭であることがわかる。



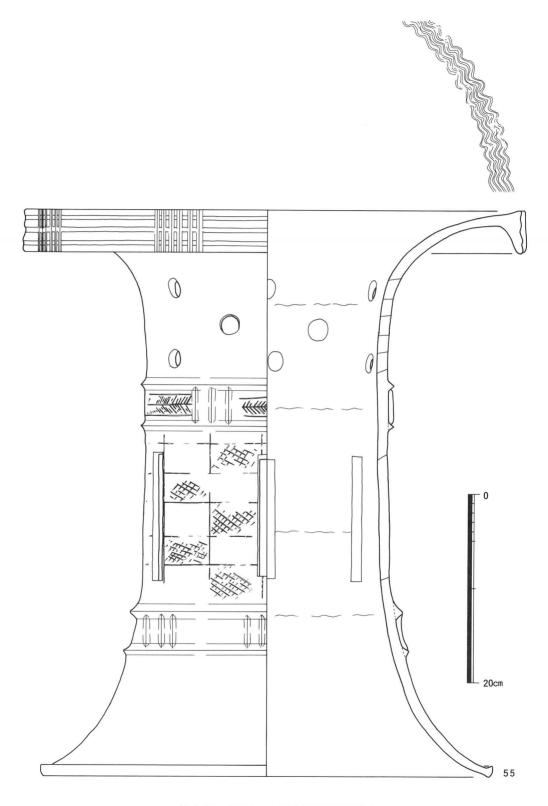
第5図 SW-1出土遺物実測図



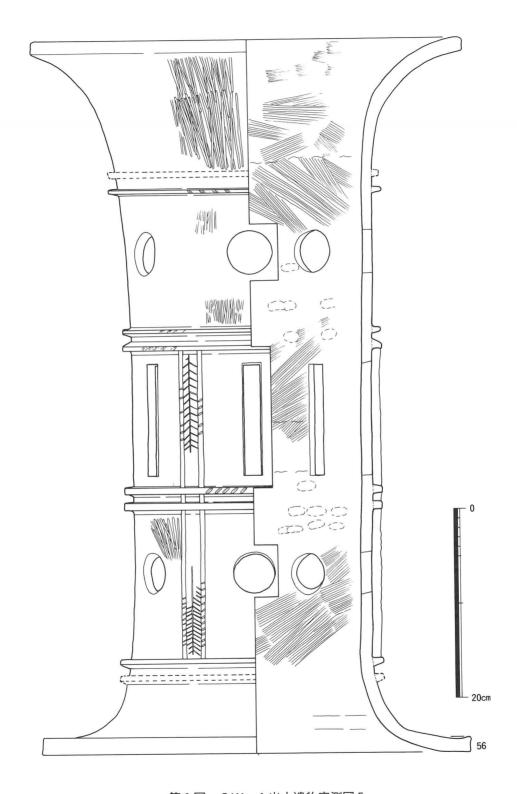
第6図 SW-1出土遺物実測図2



第7図 SW-1出土遺物実測図3



第8図 SW-1出土遺物実測図4

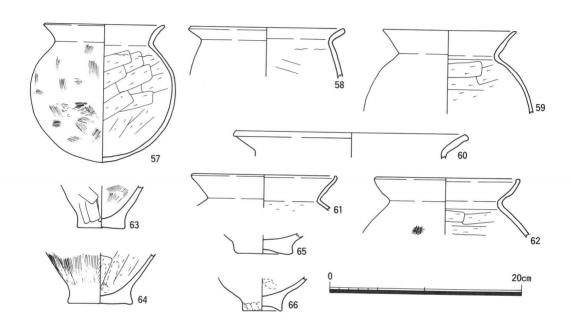


第9図 SW-1出土遺物実測図5

溝 (SD)

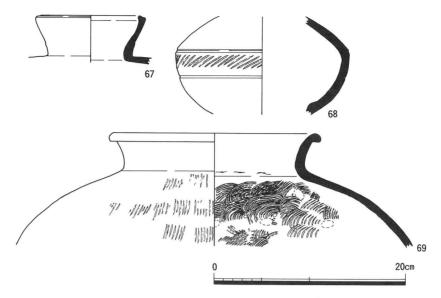
SD-1

調査区中央(3a区)で検出した。南一北方向に伸びるもので、検出長2.0m、幅2.24m、深さ0.46mを測る。南トレンチでは確認されなかった。断面は半円形を呈する。堆積土は乳灰褐色粘土・暗灰色粗砂混じり粘土の2層に分けれる。遺物は古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片が少量出土している。図示できたものは庄内甕(57・61)・甕(58~60・63~65)・布留甕(62)・鉢(66)である。



第10図 SD-1出土遺物実測図

SD-2



第11図 SD-2出土遺物実測図

SD-3

調査区西部(1・2a区)で検出した。南一北方向に伸びるもので、検出長2.0m、幅0.4m、深さ0.2mを測る。断面は浅い皿状形を呈する。堆積土は淡茶灰色砂礫混粘質土である。遺物は古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片が少量出土している。図示できたものは1点で、土師器の甕(70)である。

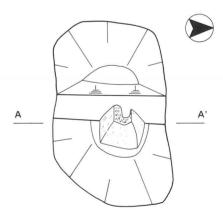
小穴(SP)

$SP-1\sim SP-11$

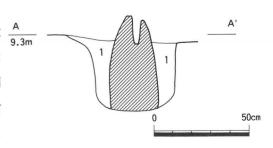
調査区 (2a・4a区) で11個を検出した (第1表)。 そのうち東部で検出した 7個 (SP-1~SP-7) は建物を関連する柱穴である。SP-1には柱根(71) が残存していた。その柱根は方形で一辺20cmを測る大 きなものである。その柱穴と規則性がみられるものは 小面積な調査区内では確認できなかった。小穴の時期 については検出面及び周辺の遺構の状況からみて、古 墳時代後期から奈良時代に比定されるものと思われる が、詳細なことは不明である。



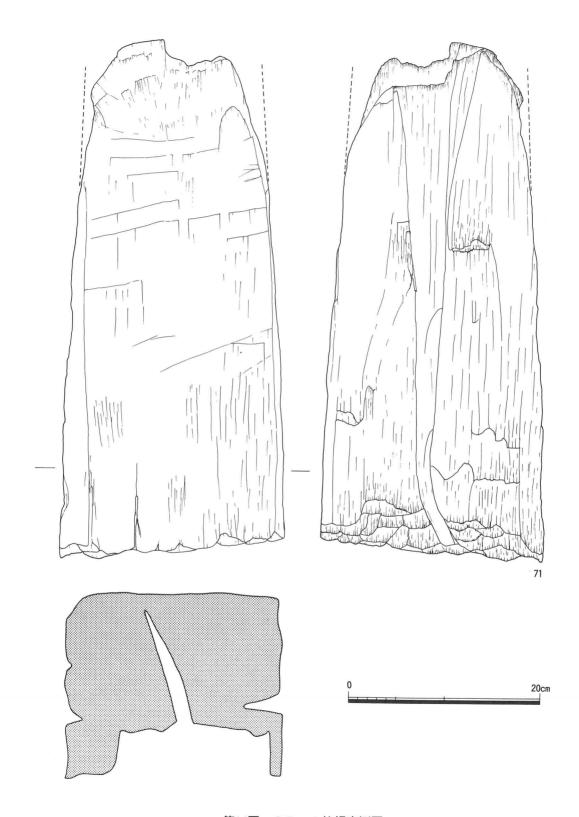
第12図 SD-3出土遺物実測図



1 暗灰色粘質シルト



第13図 SP-1平断面図



第14図 SP-1柱根実測図

第1表 小穴(SP)一覧表

*単位はcm

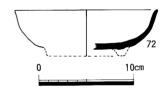
遺構番号	区名	平面形	断面形	径	深さ	堆 積 土	備考
SP-1	4a⊠	円形	U字形	61~99	26	暗灰色粘質土	柱痕あり
SP-2	4a⊠	円形	半円形	28~47	11	褐灰色粘質シルト	
SP-3	4a⊠	円形	半円形	36~58	14	暗灰褐色シルト	
SP-4	4a⊠	円形	U字形	33~75	27	褐灰色砂礫混じりシルト	
SP-5	4a区	円形	半円形	30	11	褐灰色粘質シルト	
SP-6	4a⊠	円形	半円形	16~36	5	褐灰色砂礫混じりシルト	
SP-7	4a⊠	円形	半円形	42~72	10	暗灰褐色シルト	
SP-8	4a⊠	円形	半円形	116~126	5	褐灰色粘質シルト	
SP-9	4a⊠	円形	半円形	50~98	12	暗灰褐色シルト	
S P -10	3a⊠	円形	半円形	40~42	12	褐灰色粘質シルト	
S P -11	2a区	円形	半円形	14~42	13	褐灰色粘質シルト	

南トレンチ

土坑 (SK)

SK-1

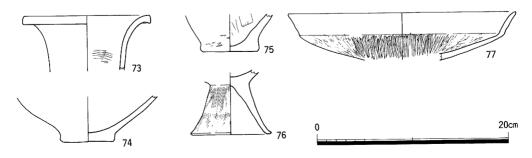
調査区西部(1 b区)で検出した。北西部は調査区外に至り、全容は不明である。規模は東西幅2.87m、南北幅0.93m、深さ約0.17m前後を測る。堆積土は淡茶色シルトである。遺物は内部から古墳時代後期に比定される土器片がごく少量出土した。図示できたものは1点で、須恵器の坏(72)である。陶邑(中村)編年ではIV型式1~2段階に類似するものである。



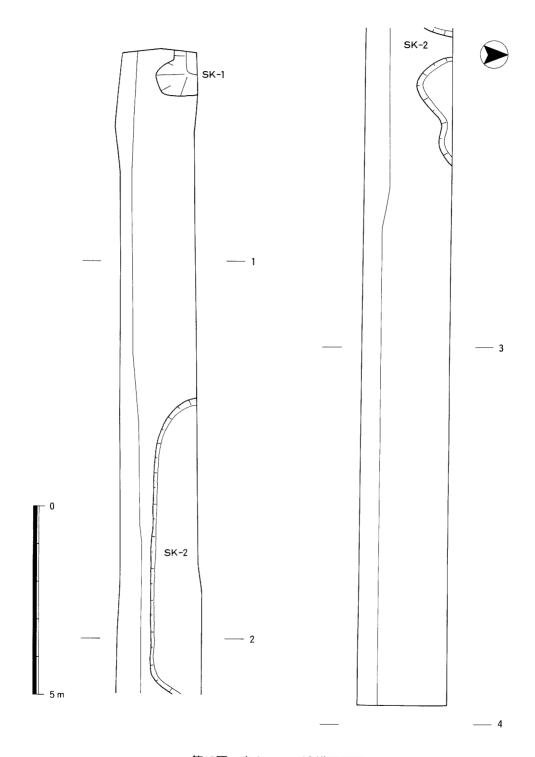
第15図 SK-1出土遺物実測図

SK-2

調査区西部(2・3 b区)で検出した。北西部は調査区外に至り、全容は不明である。規模は東西幅2.87m、南北幅0.93m、深さ約0.17m前後を測る。堆積土は淡茶色シルトである。遺物は内部から弥生時代後期~古墳時代前期(布留式古相)に比定される土器片がごく少量出土している。図示できたものは4点で、壺(73・74)・甕(75)・高坏(76・77)である。



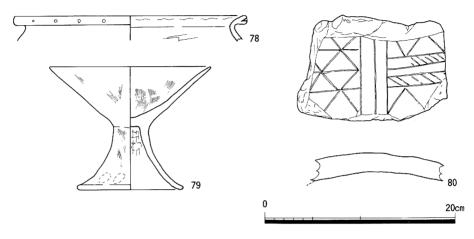
第16図 SK-2出土遺物実測図



第17図 南トレンチ遺構平面図

4) 遺構に伴わない出土遺物

北トレンチ・南トレンチの第5層~第6層内からコンテナにして約1箱分が出土した。時期 は第6層が弥生時代後期から奈良時代、第5層が中世の遺物である。図示できたものは3点で、 弥生時代後期に比定される甕 (78) ・高坏 (79)、古墳時代中期に比定される形象(楯形)埴 輪 (80) である。



第18図 第6層出土遺物実測図

遺物番号 図版番号	器 種 遺構番号		口径器高	形態と技法と特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	長頚壺 (弥生土器)	口径	11.0	口縁外面ハケナデ後ヘラミガキ、内 面ナデ・接合痕有り	淡灰茶褐色	3 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)	良好	797 S. O'C. Lan. L. C. L
2 2	SW-1 同上 SW-1	口径	11. 6	口縁外面ハケナデ、内面ヘラナデ	乳灰茶色	を多量に含む 1mm以下の砂粒(長 石・チャート・雲母)	良好	
図版一		F147 .	10.0		No. 100 Marie 100 Au	を多量に含む	.1. 1-4	
3 図版一	取手付壺 (弥生土器) SW-1	口径 1	13. 6	口縁端部ヨコナデ、口縁内外面ハケ ナデ、体部外面ハケナデ、内面ナデ、 取手部ナデ	淡灰茶褐色	4 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母 ・石英)を多量に 含む	良好	
4 図版一	壺 (弥生土器) SW-1	口径 3	33. 6	口縁部内外面ヘラミガキ、端面凹線 4条・きざみ目、内面連続渦文	淡灰茶色	2 mm以下の砂粒(長石・雲母・石英)を 微量に含む	良好	
5	同上 SW-1			頚部内外面ヨコナデ	明茶橙色	5 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	*
6	同上	口径]	15. 6	口縁部外面ヘラミガキ・内面摩耗の たす調整不明、端面円形	淡灰茶褐色	2 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母)	良好	
図版一 7	SW-1 同上	口径 1	14.8	口縁端部内外面ヨコナデ・ナデ	外 淡灰橙茶色	を多量に含む 3 mm以下の砂粒(長	良好	
図版一	SW-1				内 乳灰茶色	る 一	15.41	
8	同上 SW-1	口径 1	15.4	内外面摩耗のため調整不明	淡橙茶灰色	3mm以下の砂粒(長石・石英・赤褐色酸化粒)を多量に含む	良好	
9 図版一	同上 SW-1	口径]	19.0	□縁外面ハケナデ、内面ナデ、端面 2条の凹線	外 暗灰茶褐色 内 暗褐色~暗 茶灰色	3 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	
10	同上	底径	4.4	体部底面ヘラナデ、外面ヘラミガキ、 底面ナデ	外 乳灰茶橙色 内 黒灰色	2 mm以下の砂粒(長 石・赤褐色酸化粒	良好	
	S W - 1					・石英) を少量含 む		
11	同上 SW-1	底径	5.4	体部外面ヘラミガキ、内面摩耗のため調整不明、底面ナデ	乳灰茶色	5 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を多量に 含む	良	
12	同上 SW-1	底径	7.4	体部外面ハケナデ、内面指ナデ後へ ラナデ、底面ナデ	淡灰茶褐色	2 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	
13	同上 SW-1	底径	5.4	外面ヘラミガキ、内面・底面ナデ	外 乳灰茶色 内 淡灰褐色	4 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	10 - 1000000000000000000000000000000000
14	同上 SW-1	底径	5.4	外面ヘラミガキ、内面ナデ、底面ナ デ	淡灰茶色	6 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母) を少量含む	良好	
15	同上 SW-1	口径	5.4	外面ハケナデ、内面ヘラナデ	外 暗茶灰褐色 内 淡灰茶褐色	6 mm以下の砂粒(長石・雲母・角閃石) を多量に含む	良好	
16 図版一	甕 (弥生土器) SW-1	口径 1	13. 6	口縁内外面ヨコナデ、体部外面タタ キ、内面ヘラナデ・上位に指ナデ	外 淡灰茶色~ 暗茶褐色 内 淡灰茶色	6 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	煤付着
17 図版一	同上 SW-1	口径 1	14.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タ タキ、内面ヘラナデ・上位指押さえ	暗茶褐色	7 mm以下の砂粒(長 石・雲母・角閃石)	良好	
18	同上	口径 1	0.6	口縁部内外ヨコ面ナデ、体部外面タタキ、内へラナデ、内面へラナデ、	内 淡灰茶褐色	を含む 3mm以下の砂粒(長	良好	
図版一	SW-1			タキ、内へラナデ。内面へラナデ・ 上位に指圧痕・接合痕	外 黒茶褐色	石・石英・雲母)を 多量に含む		
19 図版一	同上 SW-1	口径 1	5. 6	口縁部内外面ヨコナデ、大部は剝離 のため調整不明	内 黒茶褐色~ 淡灰茶色	5 mm以下の砂粒(長石・石英・雲母)を	良	
20	同上	口径 1	4.8	剝離のため調整不明	明茶褐色	多量に含む 4 mm以下の砂粒(長	良好	
図版一	SW-1				-	石・角閃石・雲母) を多量に含む		
21	同上 SW-1	口径 1	3. 4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タ タキ、内面ヘラケズリ	淡灰褐色	2 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を少量含む	良好	
22	同上	口径 1	4.8	剝離のため調整不明	黒茶褐色	5 mm以下の砂粒を (長石・石英・雲母)	良好	
	SW-1					を多量に含む		

遺物番号 図版番号	器 種 遺構番号	法量 (cm)	口径 器高	形態と技法と特徴	色 調	胎土	焼成	備考
23 図版二	甕 (弥生土器) SW-1	口径	16.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タ タキ、内面ヘラナデ・指ナデ	淡橙茶色	2 mm以下の砂粒 (長 石・チャート・雲母) を少量含む	良好	
24	同上	口径	15. 6	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タ タキ、内面ヘラナデ	乳灰茶色	2 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を多量に含む	良好	
図版二 25	SW-1 同上	口径	16.6	口縁端部ヨコナデ、口縁内外面ハケ ナデ、体部外面タタキ、内面へラナ	淡茶灰色	3mm以下の砂粒(長 石・赤褐色酸化粒	良好	
	S W - 1	/7		デ	VC F로 남자 선	・雲母) を多量に 含む 3 mm以下の砂粒(長	占 4.7	
26 図版二	同上 SW-1	口径	14.4	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、 体部外面ハケナデ、内面ナデ・指頭 圧痕	淡灰茶褐色	る mm以下の砂粒(投 石・雲母・角閃石) を少量含む	良好	
27 図版二	同上 SW-1	口径	14.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、 体部外面タタキ後ハケナデ、内面へ ラケズリ	淡灰茶橙色	3 mm以下の砂粒(長 石・チャート)を微 量に含む	良好	
28	同上	口径	18. 0	剝離のため調整不明	外 明茶灰色 内 淡灰茶色	4 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	Early Co.
29	SW-1 同上	口径	18. 4	底口縁部内外面ヨコナデ、体部外面 ハケナデ、内面剝離のため調整不明	淡茶黄褐色	5 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母)	良好	
30	SW-1 同上	底径	4.0	底部外面ナデ、内面剝離のため調整 不明	外 明茶灰色~ 灰黒褐色	を多量に含む 4 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母)	良好	
31	SW-1 同上	底径	5.8	底部外面ナデ、内面ヨコナデ	内 淡灰茶褐色 淡灰茶褐色	を多量に含む 2 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母)	良好	煤付着
32	SW-1 同上	底径	5.3	底部外面ナデ、内面ヘラナデ	暗茶灰褐色	を多量に含む 5 mm以下の砂粒(長	良好	
	SW-1	1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-			Ы по-могунда	石・角閃石・雲母) を多量に含む	± 47	
33	同上 SW-1	底径	5.4	底部外面ハケナデ・ナデ、内面ヘラナデ	外 暗茶灰褐色 内 淡灰茶褐色	6 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	
34	同上 SW-1	底径	5.4	体部外面ハケナデ・ナデ、内面ヘラ ナデ・指ナデ、底面ナデ	外 淡灰茶赤褐 色 内 淡灰茶色	5 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を少量含む	良好	
35	同上 SW-1	底径	4.7	体部外面タタキ、内面ナデ、底面ナ デ	外 褐茶灰色 内 淡灰褐茶色	5 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	
36	同上	底径	4.8	体部外面ナデ、内面指ナデ	淡灰茶色	6 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母) を少量含む	良好	
37	SW-1 同上	底径	6.4	体部外面ハケナデ、内面ヘラナデ、 底面ナデ	明茶灰褐色	4 mm以下の砂粒(長 石・雲母・角閃石)	良好	
38	SW-1 同上	底径	5.0	体部外面ナデ・接合痕、内面剝離の ため調整不明、底面ナデ	外 淡灰茶色 内 淡灰褐色~	を少量含む 4 mm以下の砂粒(長 石・石英・雲母)を	良好	
39	SW−1 取手付鉢 (弥生土器)			外面ハケナデ・ナデ、内面ナデ	灰色 灰明茶褐色	多量に含む 3 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母)	良好	
40	SW-1 器台			脚部外面へラミガキ、内面へラナデ、 加古孔右的	淡灰赤茶褐色	を多量に含む 5 mm以下の砂粒(長 石・石英・雲母)を	良好	
図版二	(弥生土器) SW-1 ミニチュア高坏		7.6	内外面指ナデ	淡灰茶色	少量含む 2 mm以下の砂粒(長	良好	
図版二	(弥生土器) SW-1	器高 底径	6. 7 4. 6			石・赤褐色酸化粒) を少量含む 5 mm以下の砂粒(長	良好	
42 図版二	高坏 (弥生土器) SW-1	口径	21.6	底部口縁部外面ヨコナデ、坏部外面 剝離のため調整、内面ヘラミガキ 	外 褐灰茶色 内 明橙茶褐色 ~褐灰茶色	5 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母・ 赤褐色酸化粒)を多量に含む	及灯	
43	同上 SW-1			脚部外面剝離のため調整不明、内面 ハケナデ	淡灰茶色~明茶 橙色	7 mm以下の砂粒(長 石・石英)を多量に 含む	良好	
44	同上			脚部外面ヘラミガキ、内面ヘラによるくりぬき坏部外面ヘラミガキ、内	乳灰橙茶色	4 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を多量に	良好	
45	SW-1 同上	底径	7. 2	面ナデ 脚部外面ハケナデ、内面ナデ	暗灰茶色	含む 4 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母)	良好	煤付着
図版二	SW-1					を少量含む		L

电栅平口	B.0 20E-	A+ =	7		T		
遺物番号 図版番号	器 種 遺構番号	法量 口((cm) 器		色 調	胎土	焼成	備考
46	高坏 (弥生土器) SW-1		脚部内面指ナデ・接合痕、他は剝離 のため調整不明	灰茶褐色	6 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を多量に含む	良	
47	同上	底径 12.	2 脚部ハケナデ、内面しぼり	淡灰茶色	3 mm以下の砂粒 (長	良好	
図版三	SW-1				石・赤褐色酸化粒・ 雲母) を含む		
48	同上 SW-1		脚部外面ナデ、内面しぽり目・接合 痕	淡茶灰色	2 mm以下の砂粒(長 石・雲母)を少量含 む	良好	
49	同上		脚部外面ヘラミガキ、内面ナデ、坏	淡茶灰色	4 mm以下の砂粒(長	良好	
	SW-1		部外面ヘラミガキ、内面ナデ		石・角閃石・雲母) を少量含む		
50	同上 SW-1		脚部外面へラミガキ、内面しぼり目。 接合痕、坏部外面ハケナデ、内面ナ デ	暗茶褐色	4 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母)	良好	
51	同上		脚部内外面剝離のため調整不明、内	淡灰茶褐色	を少量含む 4 mm以下の砂粒(長	良好	
	SW-1		面しほり目、四方孔有り	DOO OK 19/2	石・角閃石・雲母)を少量含む	IXXI	
52	同上		脚部外面剝離のため調整不明・凹線	乳茶灰色	4 mm以下の砂粒 (長	良好	
	SW-1		2条巡る、内面しぼり目、坏部内面 ナデ		石・角閃石・雲母) を多量に含む		
53	同上 SW-1		脚部外面ヘラミガキ、内面しぼり目、 坏部内面ナデ	乳灰茶色	3 mm以下の砂粒(長石・石英・雲母)を 多量に含む	良好	
54	大型器台	口径 54.		茶灰色~褐灰色	多量にBで 5 mm以下の砂粒(長	良好	
図版四	(弥生土器) SW-1		・波状文(5条)、内面へラナデ・ へラミガキ・ハケナデ、端面沈線 (5条)・円形浮文、円形スカシ		石・角閃石・雲母) を多量に含む		
55	同上	口径 50. 器高 60. 底径 46.	端面沈線 (3条)・棒状浮文、胴部	淡茶灰色	1 mm以下の砂粒 (長 石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	
図版五	SW-1		帯間に綾杉文・上位に円形スカシ				
図版六	同上 SW-1	口径 44.0 器高 45.0 底径 45.0) デ、胴部外面ヘラミガキ・2条突帯	茶灰色~褐灰色	3.5mm以下の砂粒 (長石・角閃石・雲 母)を少量含む	良好	黒斑有り
57	甕	口径 12.4		淡灰茶色	4 mm以下の砂粒 (長	良好	
図版七	(弥生土器) S D - 1	器高 14.7		20,011	石・赤褐色酸化粒・ 雲母)を多量に含む	12.71	
58	同上 S D - 1	口径 16.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナ デ、内面ヘラナデ・接合痕	淡灰茶褐色	2 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	
59 図版八	同上 S D - 1	口径 14.4	口縁部外面ヨコナデ	淡灰茶褐色	3 mm以下の砂粒(長石・雲母・角閃石) を少量含む	良好	
60	同上 S D - 1	口径 24.0	口縁部内外面ヨコナデ	外 淡橙茶色 内 淡灰褐色~ 淡橙茶灰色	4 mm以下の砂粒(長 石・石英)を微量に 含む	良好	
61	同上 S D - 1	口径 14.8	口縁部内外ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ	外 乳茶灰色 内 灰白茶色	3 mm以下の砂粒(長石・石英・雲母)を 少量含む	良好	1000
62	同上	口径 14.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タ タキ後ハケナデ、内面ヘラケズリ	淡乳茶灰色	少重含む 1mm以下の砂粒(長 石・石英・雲母)を	良好	
図版八 63	S D - 1 同上	底径 4.8	底部外面ヘラナデ、内面ナデ	沙类匠在	多量に含む	H 1.7	
	S D – 1	公正 4.6	AS DD7F四・トノナア、円田です	淡黄灰色	7 mm以下の砂粒(長 石・角閃石)を多量 に含む	良好	
64 図版八	同上 S D-1	底径 6.5	底部外面ハケナデ、内面ヘラケズリ	外 暗茶褐色 内 淡灰褐色	3 mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)	良好	煤付着
65	同上	底径 3.8	底部内外面ナデ	明茶赤褐色	を多量に含む 7 mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母)	良好	
66	SD-1 鉢 (土師器) SD-1	底径 3.8	底部外面ナデ、内面指ナデ	淡灰黄褐色	を多量に含む 2mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を多量に含む	良好	

遺物番号	器 種	法量	□ 4¥				1	
図版番号	遺構番号	広里 (cm)	口径 器高	形態と技法と特徴	色 調	胎土	焼成	備考
67	壺 (須恵器)	口径	10.0	口縁部内外面回転ナデ	白灰色	精良	良好	
図版九	S D - 2							ł
68	甑 (須恵器)	体部径	18.0	体部内外面回転ナデ・外面凹線・櫛 描文	明紫灰色	2 mm以下の砂粒を少	良好	
図版九	SD-2			祖义		量含む		
69	甕 (須恵器)	口径	21.4	口縁部内外面回転ナデ、体部外面タ	淡青灰色	精良	良好	自然釉
図版九	(須思器) SD-2			タキ、内面同心円タタキ				
70	蹇 (土師器)	口径	18.0	口縁部内外面ヨコナデ	黒灰色~淡灰茶	3 mm以下の砂粒 (長	良好	煤付着
	SD-3				色	石・雲母・角閃石) を微量に含む		
72	坏 (須恵器)	口径	14.8	口縁部内外面回転ナデ	淡灰茶色	2 mm以下の砂粒を微	良好	
	S K - 2					量に含む		
73	壺 (土師器)	口径	13.0	口縁部内外面摩耗のため調整不明	外明橙茶色	3 mm以下の砂粒(長	良好	***************************************
	S K - 2				内 淡灰茶色~ 暗灰黄色	石・石英)を微量に 含む		
74	同上	底径	5. 2	底部内外面ナデ、体部内面摩耗のた め調整不明	外 乳灰茶色	3 mm以下の砂粒(長	良	黒斑有り
	SK-2			の調整小明	内 暗灰色	石・石英・雲母)を 多量に含む		
75	蹇 (弥生土器)	底径	5. 6	底部外面タタキ・ナデ、内面ヘラナデ	暗灰茶褐色	3 mm以下の砂粒 (長	良	
	S K - 2			7		石・角閃石・雲母) を多量に含む		
76	高坏 (弥生土器)	脚部径	8.0	脚部外面ヘラミガキ、内面ナデ、坏	淡灰茶褐色	5mm以下の砂粒(長	良好	
	S K — 2			部内面ヘラミガキ		石・角閃石・雲母) を多量に含む		
図版九	同上	坏部径	23. 6	口縁内外面ヨコナデ、坏体部内外面	淡灰茶褐色	3 mm以下の砂粒(長	良好	
77	S K - 2			ヘラミガキ		石・角閃石・雲母) を多量に含む		
78	甕 (弥生土器)	口径	24.0	口縁部内外面ヨコナデ、端面刺突文	暗茶灰褐色	3 mm以下の砂粒(長	良好	
	第6層					石・角閃石・雲母) を多量に含む		
79	高坏	坏部径	31.8	坏部内外面ハケナデ、脚部外面ハケ	乳灰茶色	2 mm以下の砂粒 (長	良好	
図版九	(弥生土器) 第 6 層	器高 脚部径	13. 1 10. 6	ナデ・ヨコナデ、内面しぽり目・ナ デ・接合痕		石・石英・雲母)を 微量に含む		
80	楯形埴輪	厚み2.1-	~2.4	外面ハケナデ・ヘラによる綾杉文な	外 乳灰茶色	5 mm以下の砂粒 (長	良好	
図版九	第6層			ど幾何学文様	内 淡橙茶色	石・雲母) を多量に 含む		

3. まとめ

今回の発掘調査では弥生時代後期から中世に比定される遺構及び遺物を確認したが、細長いトレンチであり、遺構の性格など不明である。検出した遺構・遺物のなかで特筆できるものは、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器集積に含まれていた大型の器台、奈良時代に比定される柱穴内に残存していた大きな柱根の2点である。

まず、第1に大型器台である。この器台の外面にはヘラミガキを施し、透孔・突帯を巡らせ、 ヘラ書きによる斜格子・綾杉の文様で飾ったものがみられる。器が他の土器に比べて非常に大 きいこと・円筒形の埴輪によく似た器形などから、使用目的としての用途は日常的なものとは 異なる祭祀用などの特殊なものに使われたものではないかと思われる。さらに類似するものと してもっとも近いのが埴輪の祖型といわれている「特殊器台」で、「筒型土器」ともいわれる ものである。この「特殊器台」は吉備地方が起源といわれ、各地域から出土する「特殊器台」 は吉備地方から持ち運ばれたものともいわれている。その立証として胎土分析がある。土器に 含まれる砂粒と一致する地質の地域がその粘土の採集地であることが想定でき、その土器の製 作地がわかる。その成果は八尾市曙川小学校教諭 奥田尚氏他によって「畿内で出土している 特殊器台は岡山県の足守川流域周辺で制作された」と発表されている。現在までにこの「特殊 器台」は第2表に掲載している各地域で出土している。多くは墳墓などに供献したものとして 出土している。八尾市内では東郷遺跡で出土している。が、河川に流された状態であり、使用 目的などは不明である。さて当遺跡で出土した大型器台であるが、上記で述べた「特殊器台」 とはやや異なるものと考えられる。当遺跡で出土したものと類似するものは確認されなかった が、少し似たものがある。54・55の大型器台は兵庫県原田中遺跡出土の大型器台、56の大型器 台は徳島県釜の口遺跡出土の大型器台に似ている。これらの似ている土器は「特殊器台」とい われているものよりも少し古い段階のものと報告されている。当遺跡出土の大型器台も同一時 期に位置づけられるものと考えられる。胎土分析の結果では当遺跡の東方、高安山の山麗付近 で製作されたものであった。このことは当遺跡の集落集団を考察する上で貴重な資料になるも のである。

また、奈良時代の柱穴に残存していた柱根は方形で一辺約20cmを測る大きなものである。この時代のものとしては大きな建物に使用されていたと考えられ、一般の住居とは異なる建物である。考えられることは、「弓削道鏡が称徳天皇の信任をえ、その郷里に設けられた行宮で、のちにこれを『由義宮』となし、神護景雲3年(769)天皇再度行幸にあって、ここを西京とし造由義大宮司や造由義寺司をおいた。」とあり、その推定地が当調査地の南部500mから1km内にあると想定されており、今回の調査で検出した柱穴跡がそれに深く関わりのあるものと思われる。が、調査区が小面積であり、周辺地域での調査があまり行われてないことからその詳

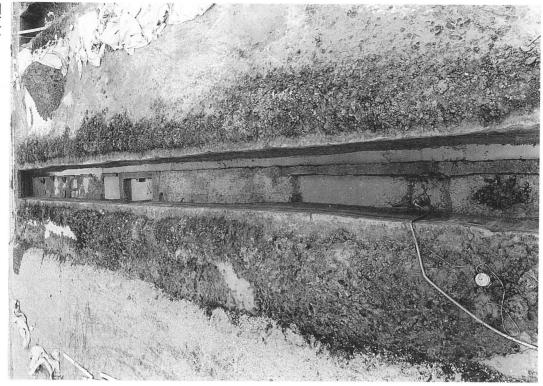
細については今後の課題である。

参考文献

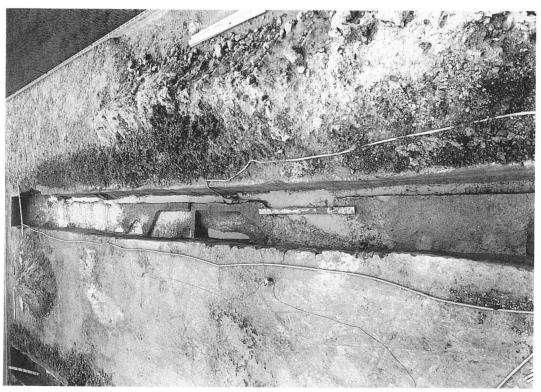
- 八尾市教育委員会「中田遺跡」『昭和53・54年度埋蔵文化財調査概要』 1981年
- (財)八尾市文化財調査研究会「WI 中田遺跡(第11次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1993
- (財)八尾市文化財調査研究会『平成5年事業報告』 1994
- 大阪府教育委員会『東郷遺跡発掘調査概要・I-八尾市桜ヶ丘・旭ヶ丘所存-』1989.3
- 近藤義郎・春成秀「埴輪の起源」 『考古学研究』 第12巻第3号1967年
- 狐塚省蔵「吉備型器台論上・下」『異貌4・5』1976年
- 宇垣匡雅「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第27巻第4号 1980年
- 宇垣国雅「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号 1983年
- 田中秀夫・奥田尚「奈良県中山大塚古墳の特殊形土器」『古代学研究』第109号 1985年

第2表 特殊器台出土地一覧表

都道府県	市	町	村	遺	跡	名	時期	遺	構	高さ	П	底	型	式	個体数	その他遺物
岡山県	総	社	市	宮山	墳.	丘墓	弥生末	墳	墓	_	_		宮L	山型		
岡山県	岡	Ш	市	矢		藤	弥生末	墳	墓	_	_	_	筒	型	-	
岡山県	岡	Ш	市	矢礻	泰 治	àШ	弥生末	古	墳	_	_	_	筒	型		
奈良県	橿	原	市	弁	天	塚	弥生末			_	_				1	
奈良県	天	理	市	西殿	塚	古墳	弥生末	前方	後円墳	200	70	_	特殊	器台		
兵庫県	赤	穂	市	原	田	中	弥生末	墳	丘 墓	40	44	44	吉负	龍 型	1	特殊壺
島根県	出	雲	市	矢		野	弥生末			_	_	_	特殊	器台	1	壺
佐賀県	三養	基郡	中原	原古	賀三	本谷	弥生末			35	14.5	-	瀬戸	内式	1	船載の鏡片
愛媛県	大	西	町	妙	見	山	弥生末	古	墳	_	_	_			1	特殊壺
徳島県	松	Ш	市	釜	の	П	弥生末			-	_	_	筒	型		
滋賀県	大	津	市	壺	笠	Ш	弥生末			_	_	_	筒	型	_	
大阪府	八	尾	市	東		郷		河	Щ	_		_	筒	型		



北トレンチ (西から)



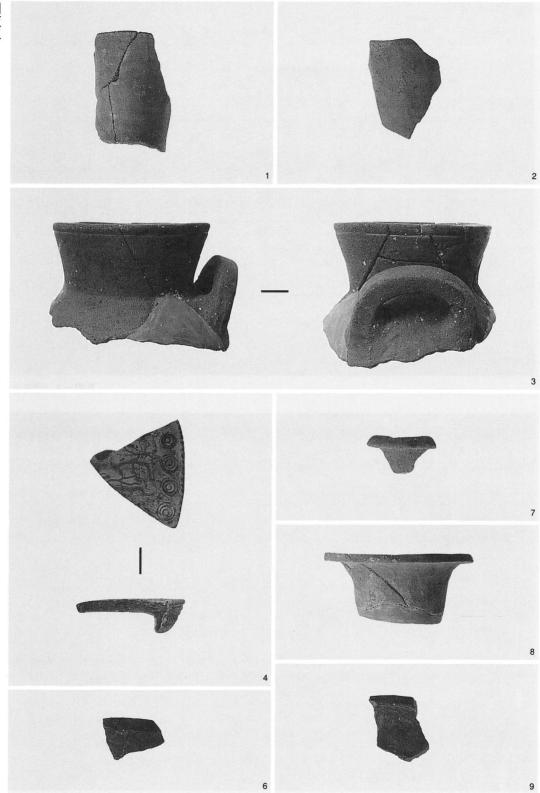
南トレンチ(西から)



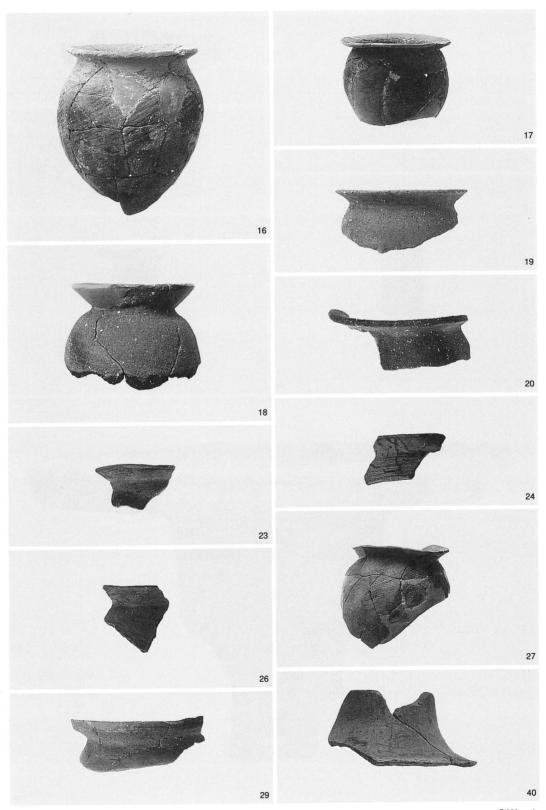
SW-1(南から)



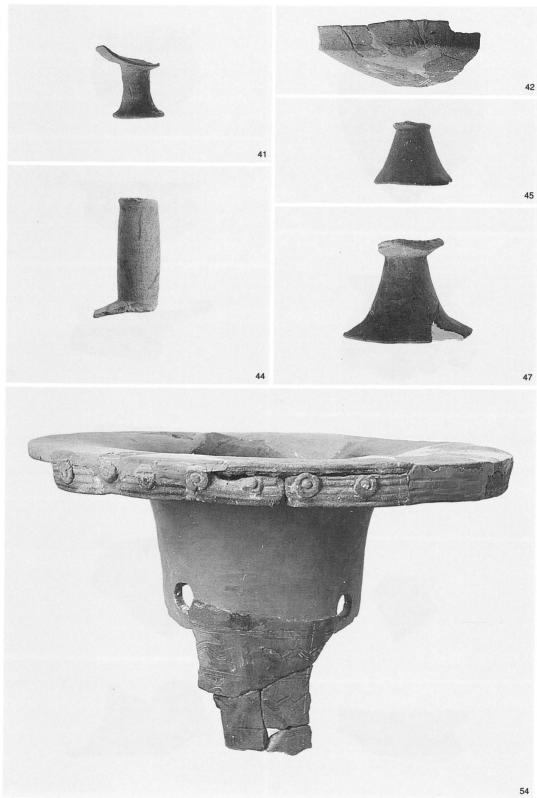
北トレンチ東部(西から)



SW-1



SW-1



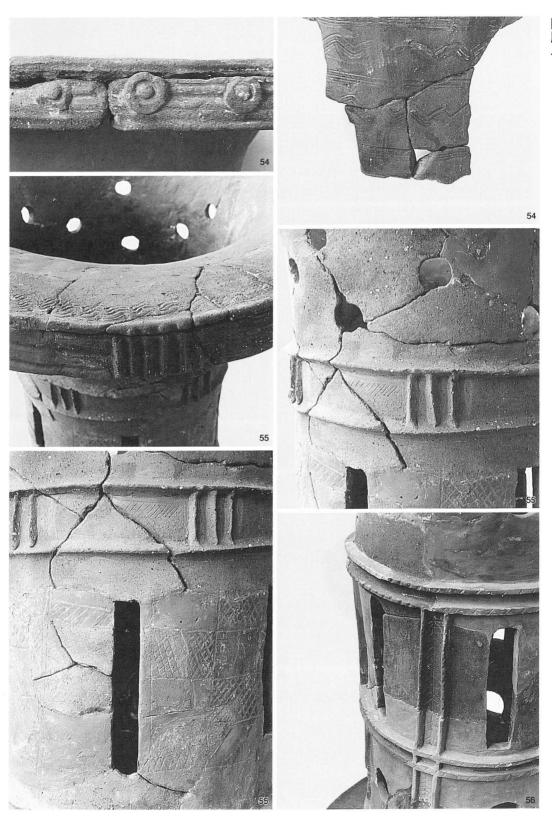
SW-1



SW-1



SW-1



SW-1



SP-1

(追記)

大型器台の砂粒構成

奥 田 尚

中田遺跡内にあたる刑部3丁目から出土したV様式期の大形器台の砂粒を肉眼で観察した。 器台は約1mにも及び大きなものである。資料は報告番号54・55・56の3点である。全体を肉 眼で観察し、次に観察良好な部分を倍率30倍の実体鏡で観察した。各々の観察結果について述 べる。

54 (第7図) 構成砂粒種は石英・長石・黒雲母・角閃石である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.1~0.3mm、量がごくごく僅かである。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.1~5 mm、量は僅かである。黒雲母は金色板状で、粒径が0.1~0.5mm、量はごく僅かである。角閃石は黒色粒状で、粒形が角、粒径0.1~0.7mm、量は非常に多い。(Ⅱ 2 類型)

55 (第8図) 構成砂粒種は花崗岩・石英・長石・黒雲母・角閃石である。花崗岩は灰白色、粒形が角、粒径が0.5~1 mm、量がごくごく僅かである。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明で、粒形が角、粒径が0.1~1 mm、量が僅かである。長石は灰白色、灰白色透明、無色透明で、粒形が角、粒径が0.1~1 mm、量が多い、黒雲母は黒色板状で、粒径が0.1~1 mm、量はごくごく僅かである。角閃石は黒色粒状で、粒径が角、粒径が0.1~1 mm、量は中である。(Ⅱ a 型)

56 (第9図) 構成砂粒は閃緑岩・長石・黒雲母・角閃石である。閃緑岩は暗灰色、粒形が角、粒径が $0.2 \sim 3 \,\mathrm{mm}$ 、量がごく僅かである。長石と角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、無色透明で、粒形が角、粒径が $0.1 \sim 2 \,\mathrm{mm}$ 、量は中である。黒雲母は金色板状で、粒径が $0.4 \sim 1 \,\mathrm{mm}$ 量がごくごく僅かである。角閃石は黒色、粒形が角・亜角、粒径が $0.1 \sim 1.5 \,\mathrm{mm}$ 、量が非常に多い。(Π a 型)

以上のように含まれる砂粒には角閃石が多く、石英がごく僅かな閃緑岩質岩起源の砂礫を主とする。中田遺跡付近は大和川が運んできた花崗岩質岩起源の砂礫からなることから明らかに中田遺跡の砂礫では製作できない器台である。中田遺跡の東方、高安山の山麓に縄文時代から弥生時代まで続く恩智遺跡がある。恩智遺跡の土器には多くの角閃石が含まれるが、砂礫粒の形は表面が水等で磨かれたような角~亜角を示し、今回観察できた器台のような鋭い角をもつ河内型庄内甕があげられる。中田遺跡では閃緑岩の媒乱砂を使用したような土器として河内型庄内甕が制作されている。この器台は制作技法的に閃緑岩質岩の媒乱砂を混ぜていることから、河内型庄内甕の制作技法に先行するものであるといえる。

Ⅲ 中田遺跡第18次調査 (NT93-18)

例 言

- 1. 本書は、八尾市刑部 3 丁目地内で実施した、関西電力株式会社の電気管路新設工事に伴う 発掘調査の報告である。
- 1. 本書で報告する中田遺跡第18次調査 (NT93-18) の発掘調査業務は、財団法人八尾市文 化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書 (八教社文第28号 平成5年5月25日付) に基づき、関西電力株式会社から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は、平成5年10月4日から10月9日にかけて成海佳子を担当者として実施した。 調査面積は約10㎡を測る。現地調査には、澤井 幹・西田 寿が参加した。

本文目次

1	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	63
2	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	63
3	調査概要・・・・・・	···63
4	まとめ	63

Ⅲ 中田遺跡第18次調査 (NT93-18)

1 はじめに

中田遺跡は、八尾市中央部の中田・刑部・八尾木北一帯に位置しており、地理的には、旧大和側の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地している。同一の沖積地上には、 西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡、北に小阪合遺跡があり、それぞれが、当遺跡と接している。

当遺跡は、昭和45年 (1970年)の区画整理に伴って発見された遺跡で、以後、中田遺跡調査会・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会によって調査が行われており、弥生時代前期~中世に至る遺構・遺物が検出されているが、なかでも弥生時代後期~古墳時代前期を主とする遺跡であることが明らかにされている。

今回の調査地の西側では、吉備系の土器を多量に含む古墳時代前期初頭の一括遺物が出土しており (八尾市教委昭和53年調査)、平成4年度には、公共下水道工事に伴う発掘調査 (NT92-11)も行われている。

2 調査の方法と経過

今回の調査は、地下ケーブル埋設に伴う発掘調査で、当調査研究会が中田遺跡で行った発掘調査の第18次調査 (NT93-18)にあたる。調査においては、昨年度の調査結果 (NT92-11)を参考に、人力掘削・機械掘削を併用し、工事による掘削が終了するまで立ち会った。

3 調査概要

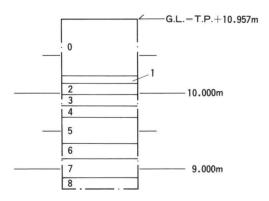
現地表のレベル高はおよそT.P.+11.0mで、盛土は $0.6\sim0.1m$ 程度なされており、この間に、水道管やガス管などが埋設されている。また、北側の半分は擁壁工事のため、1.2m程度が攪乱されている。以下には、耕土・床土にあたる第1層暗褐色シルトが0.1mの厚さで堆積している。それ以下には、昨年度の調査地(NT92-11 1 $E\sim3E$)で確認されていた中世〜近世の河川内堆積土である第2層〜第8層までが堆積している。古墳時代の遺構面は認められなかったが、第3層からは、古墳時代前期の土器片が若干出土している。

4 まとめ

調査の結果、昨年度の調査地 (NT92-11)と同様、中世頃の河川内堆積土を検出した。このことから、過去の調査で検出した古墳時代前期の遺構面は、この河川の氾濫などで損なわれており、ごく狭い範囲でしか遺存していない可能性が高いものと考えられる。



第1図 調査地周辺図(S=1:5000)・調査区設定図(S=1:500)



層名

- 0 盛土
- 1 暗褐色粗砂~礫混じり砂質シルト
- 2 灰褐色粗砂混じり粘質シルト
- 3 暗灰褐色礫混じり砂質シルト
- 4 灰褐色砂質シルトに白灰色粗砂の互層
- 5 白灰色粗砂に灰褐色砂質シルトの互層
- 6 暗青灰色シルト〜微砂と黄灰色粗砂の互層
- 7 暗灰色粘質シルト(粘性高い)
- 8 黄灰色粗砂(水量多い)

第2図 西側壁面図(S=1:50)



西側壁面写真

Ⅳ 中田遺跡第20次調査 (NT93-20)

例 言

- 1. 本書は、八尾市八尾木北6丁目地内で実施した公共下水道工事(平成5年度第36工区)に 伴う発掘調査の報告書である。
- 1. 本書で報告する中田遺跡第20次調査 (NT93-20) の発掘調査業務は、八尾市教育委員会 の指示書 (八教社文第77号 平成5年10月1日) に基づき、財団法人八尾市文化財調査研 究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成5年10月12日~10月15日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。 調査面積は約㎡である。なお、調査においては八田雅美・島野鋼一が参加した。
- 1. 本書に関わる業務は、遺物実測-西岡千恵子、図面レイアウト・トレース-市森千恵子、 遺物観察表-西岡、遺物写真・本文の執筆-高萩が担当した。

本文目次

1	1.4	t じめに	CE
1.	Vd	να Cαγγς	.65
2.	誹	¶査概要······	-66
]	.)	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	-66
9)	基本層序	CC
2	,	全个信力·	.00
3	3)	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	68
0	1		
3.	=	E & do	.71

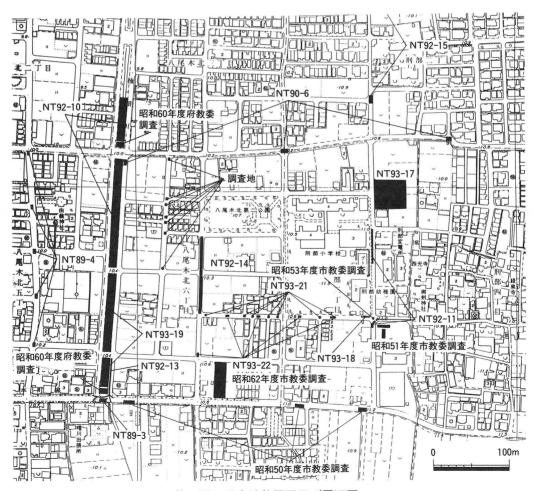
IV 中田遺跡第20次調査 (N T 93−20)

1. はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田1~6丁目、刑部 1~4丁目、八尾木北1~6丁目にあたる。

地理的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡 の周辺には南に東弓削遺跡、西に矢作遺跡、北西に成法寺遺跡、北に小阪合遺跡がある。

当遺跡では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・中田遺跡調査会・当調査研究会により 数次の発掘調査が実施され、弥生時代前期から近世にかけての複合遺跡であることが確認され ている。特に古墳時代初頭~前期にかけての遺構・遺物が全般に存在していることが調査で確 認されている。



第1図 調査地位置図及び周辺図

今回実施した発掘調査は、中田遺跡推定範囲内の南部中央にあたる八尾木6丁目地内で行われる公共下水道第36工区工事に伴うものである。調査地の近接では、平成4年度に当調査研究会が実施した第14次調査地(NT92-14)や昭和51年以降、市教育委員会によって断続的な遺構確認調査が行われている地域である。特に古墳時代前期を中心とした遺構・遺物が顕著に検出されている。

2. 調査概要

1)調査の方法と経過

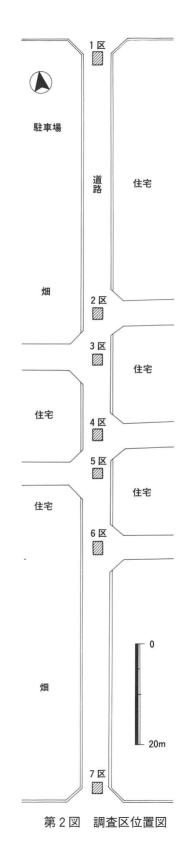
今回の発掘調査は下水道の人孔(マンホール)部分の工事部分を対象にした。人孔部分は7ヶ所で規模は一辺約2m×2mのグリットである。グリットは北から南へ1区~7区と区名を付けた。総面積約28㎡を測る。調査期間は平成5年10月12日~10月15日までである。 調査では、現地表下1.0~1.5mを機械で掘削し、以下0.1~0.4mの土層について人力掘削及び精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。

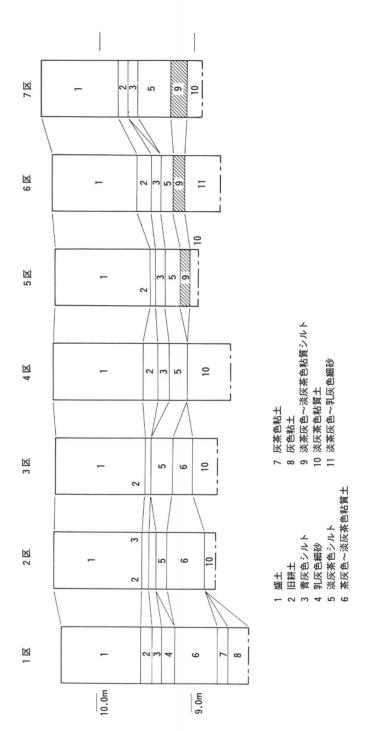
調査の結果、古墳時代前期~中世に至る遺構・遺物を検出した。遺物は遺構および包含層内から少量出土している。

2) 基本層序

第1層:盛土 (層厚100cm)。上部はアスファルト・バラス、下部は区画整理による整地土である。

第2層:旧耕土 (層厚5~20cm)。区画整理 により整地されるまでは農地とし





- 67 **-**

て耕作していた土層である。上面で標高9.5m前後を測る。

第3層:青灰色シルト (層厚 $15\sim20$ cm)。床土である。3区・7区ではみられなかった。

第4層:乳灰色細砂(層厚10~20cm)。中世以降の洪水などにより堆積した土層であろう。 1区と7区だけにみられた。

第5層:淡灰茶色シルト(層厚10~20cm)。中世の水田土層である。7区では人足・牛足等と思われる足跡が残る水田面が観察できた。その他の区では後世により削平された 状態で確認された。7区で検出した水田上面の高さは標高9.6mを測る。

第6層:茶灰色~淡灰茶色粘質土(層厚20~40cm)。古墳時代後期の包含層と考えられる。 7区ではこの上面より中世の時期のものと考えられる溝が切り込んでいる。

第7層:灰茶色粘土(層厚30~40cm)。1区にだけみられる土層である。

第8層:灰色粘土 (層厚20~30cm)。1区にだけみられる土層である。

第9層:淡茶灰色~淡灰茶色粘質シルト(層厚10cm)。5区~7区に堆積する土層で、古墳 時代後期の遺物が含まれる包含層である。

第10層:淡灰茶色粘質土 (層厚30cm)。古墳時代前期~後期の遺構面と思われる。上面は標高9.0~9.1mを測る。

第10層:淡茶灰色~乳灰色細砂 (層厚30cm以上)。古墳時代前期ないしはそれ以前の河川の 堆積土層と考えられる。

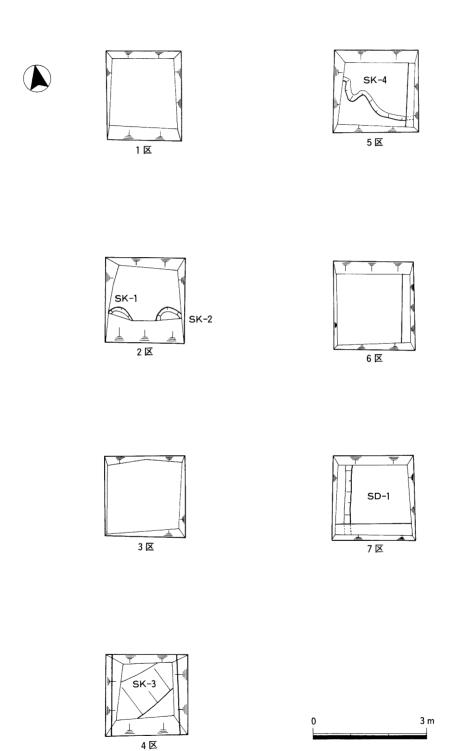
3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、第5層上面で中世以降の水田面、第9層上面で中世の溝1条、第10層及び第11層の上面(標高9.0~9.1m)で古墳時代前期から古墳時代後期の遺構・遺物を検出した。遺構は、1区で古墳時代後期の土坑2基(SK-1・SK-2)、4区で土坑1基(SK-3)、5区で土坑1基(SK-4)を検出した。中世は7区で溝1条(SD-1)、中世以降の水田面を検出した。以下、遺構・遺物について記す。

土坑 (SK)

SK-1

2区で検出した。南部は調査区外に至り、全容は不明である。規模は東西幅0.68m、南北幅0.25m以上、深さ約0.2mを測る。堆積土は灰茶色粘質シルトである。遺物は出土しなかったが、土層の状況から古墳時代後期(6世紀)ごろと思われる。



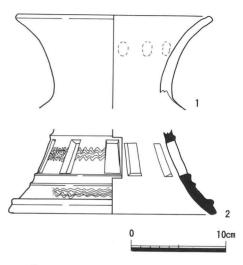
第4回 調査区遺構平面図

SK-2

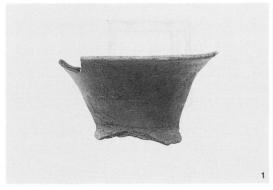
2区で検出した。南部は調査区外に至り、全容は不明である。規模は検出部で、東西幅0.7 m、南北幅0.3 m以上、深さ約0.14 mを測る。堆積土は灰茶色粘質シルトである。遺物は出土なかったが、SK-2と同時期ごろのものと思われる。

SK-3

4区で検出した。北東部は調査区外に至り、全容は不明である。規模は検出部で、東西幅1.5m以上、南北幅1.3m以上、深さ約0.46mを測る。堆積土は第1層淡灰色砂質土・第2層暗灰褐色粘質土でである。遺物は、第1層から古墳時代後期の須恵器・土師器、第2層から古墳時代前期(布留式古相)土器の小片がごく少量出土している。図示できたものは、古墳時代前期(布留式新相)に比定される口縁部片の壺(1)と古墳時代後期に比定される須恵器の器台(2)脚部片の2点である。この土坑は古墳時代前期の遺構の上に古墳時代後期の遺構を構築したものと思われる。



第5回 SK-3出土遺物実測図





SK-3

SK-4

5区で検出した。北東部は調査区外に至り、全容は不明である。規模は検出部で、東西幅1.7 m以上、南北幅1.5 m以上、深さ約0.26 m前後を測る。堆積土は淡灰茶色粘質シルトである。 遺物は内部から古墳時代後期に比定される土師器の甕・須恵器の蓋坏などの小片がごく少量出土している。

溝 (SD)

SD-1

7区で検出した。南一北方向に伸びるもので、検出長2.0m、幅0.68m以上、深さ0.4mを測る。西側の溝肩は調査区外に至り不明である。堆積土は灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

水田

 $2 \boxtimes \sim 7 \boxtimes r$ 検出した。水田面が良好な状態で確認されたのは $7 \boxtimes r$ だけである。水田面の高さは標高9.6 m 前後を測り、人足・牛足と思われる足跡がみられた。

3. まとめ

今回の発掘調査では古墳時代前期から中世に比定される遺構・遺物を確認したが、小面積な調査区であり、遺構の性格など不明な点が多かった。しかし、2区~7区の土層の観察状況では古墳時代前期から古墳時代後期に比定される遺構面の広がりが存在するものと思われる。周辺では東部へ50mの所で当調査研究会が実施した第14次調査(NT92-14)から古墳時代前期~中世の遺構・遺物が確認されている。西部へ50m所では第10次調査(NT92-10)でも古墳時代前期~中世に至る遺構・遺物が確認されており、今回の調査地はその中間部分にあたり、その間を埋める資料である。





5区(東から)



7区(東から)



2区(南から)



4区(南から)



6区(西から)

V 中田遺跡第21次調査 (NT93-21)

例 言

- 1. 本書は、八尾市刑部 3 丁目地内で実施した公共下水道工事(平成 5 年度第63工区)に伴う 発掘調査の報告書である。
- 1. 本書で報告する中田遺跡第21次調査 (NT93-21) の発掘調査業務は、八尾市教育委員会 の指示書 (八教社文第78号 平成5年10月1日) に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成5年10月20日~10月22日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。 調査面積は約28㎡である。なお、調査においては八田雅美・島野鋼一が参加した。
- 1. 本書に関わる業務は、遺物実測 西岡千恵子、図面レイアウト・トレース 市森千恵子、遺物観察表 西岡、遺物写真・本文の執筆 高萩が担当した。

本文目次

1		は	じめに73
2	•	調	查概要75
	1	1	調査の方法と経過・・・・・・
	1	/	<u> </u>
	2)	基本層序
	3)	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・77
3		ま	とめ

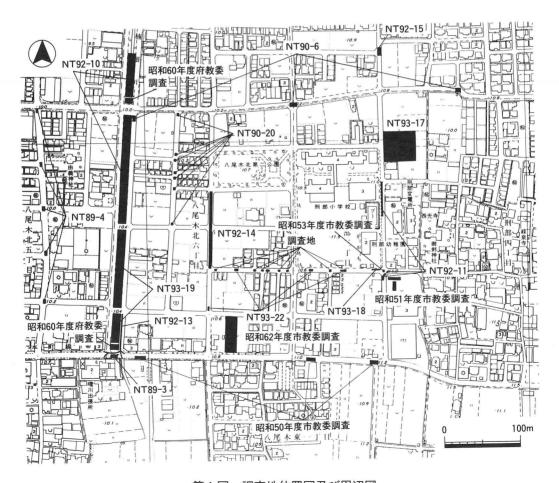
V 中田遺跡第21次調査 (NT93-21)

1. はじめに

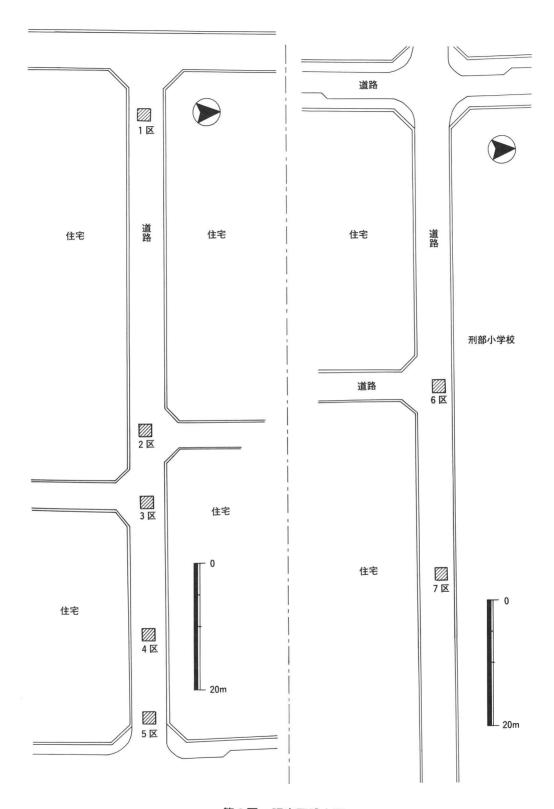
中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田1~6丁目、刑部 1~4丁目、八尾木北1~6丁目にあたる。

地形的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡の周辺には南に東弓削遺跡、西に矢作遺跡、北西に成法寺遺跡、北に小阪合遺跡がある。

当遺跡では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・中田遺跡調査会・当調査研究会により 数次の発掘調査が実施され、弥生時代前期から近世にかけての複合遺跡であることが確認され ている。特に古墳時代初頭~前期にかけての遺構・遺物が全般に存在していることが調査で確 認されている。



第1図 調査地位置図及び周辺図



第2図 調査区設定図

今回実施した発掘調査は、中田遺跡推定範囲内の南部中央にあたる刑部3丁目地内で行われる公共下水道第63工区工事に伴うものである。調査地の近接では平成4年度に当調査研究会が 実施した第14次調査地(NT92-14)や昭和51年以降、市教育委員会によって断続的な遺構確認 調査が行われている地域である。特に古墳時代前期を中心とした遺構・遺物が顕著に検出されている。

2. 調査概要

1)調査の方法と経過

今回の発掘調査は下水道の人孔(マンホール)部分の工事部分を対象にした。人孔部分は7 au所で規模は一辺約 $2 ext{ m} imes 2 ext{ m}$ のグリットである。グリットは西から東へ $1 ext{ Z} imes 7 ext{ 区と区名を付けた。総面積約}28㎡を測る。調査期間は平成<math>5 ext{ 5}$ 年10月20日 ~ 10 月22日までである。

調査では、現地表下1.1~2.0mを機械で掘削し、以下0.1~0.4mの土層について人力掘削及び精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、古墳時代後期~中世に至る遺構・遺物を検出した。遺物は遺構および包含層内から少量出土している。

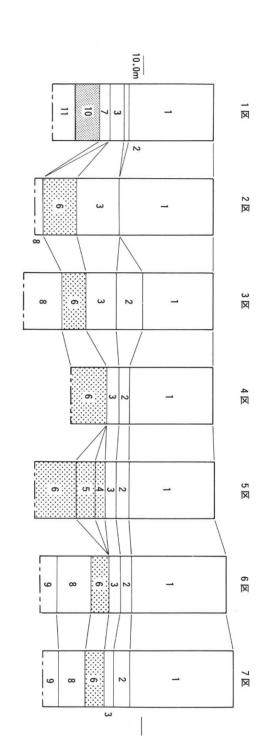
2) 基本層序

- 第1層:盛土(層厚100cm)。上部はアスファルト・バラス。下部は区画整理による整地土である。
- 第2層:旧耕土 (層厚5~20cm)。区画整理により整地されるまでは農地として耕作していた 土層である。上面は標高9.5m前後を測る。2区では水道管・ガス管等の埋設物に より削平されていた。
- 第3層:褐灰色~青灰色砂質土(層厚10~45cm)。床土である。
- 第4層:乳灰茶色微砂(層厚10~20cm)。中世以降の洪水などにより堆積した土層で、5区だけにみられた。
- 第5層:淡茶灰色微砂(層厚15~20cm)。中世以降の洪水などにより堆積した土層で、5区 だけにみられた。
- 第6層:乳灰色細砂 (層厚30cm以上)。中世以降の洪水などにより堆積した土層で、2~7 区でみられた。4・5区が中心で、その他はオーバーフローしたものと考えられる。
- 第7層: 茶灰色細砂混シルト(層厚10~20cm)。中世の土層である。1区にだけの堆積が観察できた。
- 第8層:青灰色~茶灰色粘土(層厚30~40cm)。3・6・7区で検出した。この層は中世以降の水田土層と考えられる。上面には若干の足跡状のくぼみがみられた。上部では

3 床土(褐灰色~灰青色砂質土)4 乳灰茶色微砂5 淡茶灰色微砂6 乳灰色細砂

7 茶灰色細砂混シルト 8 灰青色粘土 (礫を少量含み、酸化鉄の斑点がある) 9 青灰色粘土 10 暗灰褐色粘質シルト(古墳時代後期の包含層) 11 淡青茶色粘質シルト

田井十



にぎり拳大よりやや小さい河原石が少量含まれていた。河川によって流れてきたが 混入したものと思われる。

第9層: 青灰色粘土 (層厚20cm以上)。6・7区に堆積する土層である。

第10層:暗灰褐色粘質シルト (層厚20cm)。古墳時代後期の遺物が含まれる包含層と考えられる。

第11層:淡青茶色粘質シルト(層厚30cm以上)。1区にだけみられる土層である。古墳時代 後期の遺構面と思われる。上面は標高9.3mを測る。

3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、1区の第10層上面で中世の柱穴1個、2・3・6・7区の第5層上面で中世以降の水田面、5・6区の第3層下で中世の河川跡1条を検出した。以下、各区の遺構・遺物について記す。(*注 説明している土層番号は基本層序で便宜上につけた番号で、区によっては存在するところと存在しない土層がある。)

1 🗵

現地表(道路)下1.2 m(T.P.+9.55 m)で古墳時代後期の包含層(第10層)を検出した。 包含層上面では中世の時期のものと考えられる根石をもった柱穴1個を検出した。根石は縦30 cm、横20 cm、厚み7 cmの大きさで、上面が平らで水平に置かれた状態であった。柱穴の掘形は確認できなかった。

包含層は小片化した土器が多く含む層であった。その下のベース面と考えられる第11層上面で、遺構の検出に努めたが検出しなかった。しかし、この包含層は北西側の近接で行っているNT92-14で遺構を検出しており、調査区周辺には集落遺構の存在が考えられる。

$2 \times$

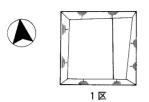
現地表下1.45 m (T. P. +9.3 m) で検出した第 6 層は中世ごろの洪水または氾濫で堆積した砂層で、この下の第 8 層上面 (T. P. +8.95 m) は水田面と考えられる。この堆積状況は $3\cdot6$ ・7 区でも同じ堆積状況で確認されている。

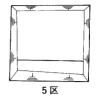
3区

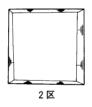
第3層以下は2区と同様の堆積状況がみられた。この区で検出した第8層上面のレベル高は、 2区より約15cm高い。

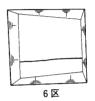
$4 \times$

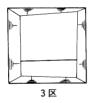
第6層が厚く堆積しており、2・3区で検出した第8層は確認されなかった。河川跡の中心 付近をあけたものと考えられる。



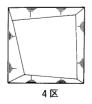














第4図 調査区平面図

5区

4区と同様の堆積がみられた。この区もまだ河川内にあたるものと思われる。

6区

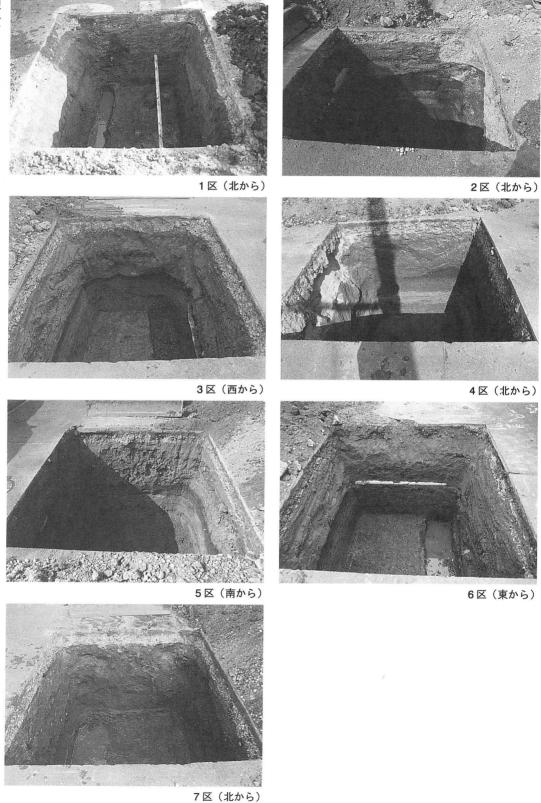
2・3区と同様の堆積がみられた。この区の水田面は2区より約55cm高い。

7区

6 区と同様の堆積であるが、この区では水田面が南と北と10cmの段差がみられた。北が高く、南が低い。

3. まとめ

今回の発掘調査では古墳時代後期から中世に比定される遺構・遺物を確認したが、小面積な調査区であり、遺構の性格など不明な点が多いが、1区で確認された古墳時代後期の包含層の状況から集落遺構が存在するものと思われる。近接では当調査研究会が行った第14次調査(NT92-14)で古墳時代前期~中世の遺構面を確認しており、その南西側に今回の調査地があることから、南西側への広がっていることがわかった。しかし、東側の2~7区では中世以降の洪水による砂層が堆積している。特に4・5区では砂層が厚く堆積しており、河道の中心であることが考えられる。その両側に位置する2・3区(西側)と6・7区(東側)では砂層により埋まった水田があることが確認された。



VI 中田遺跡第22次調査 (NT93-22)

例 言

- 1. 本書は八尾市刑部 3 丁目~八尾木北 6 丁目で実施した電気管路新設工事に伴う発掘調査である。
- 1. 本書で報告する中田遺跡第22次調査(NT93-22)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第90-1号 平成5年11月5日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が関西電力から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成6年1月18日から2月14日にかけて、西村公助を担当者として実施した。 調査面積は22.5㎡を測る。なお、調査においては能勢尚樹が参加した。
- 1. 内業整理は、現地調査終了後実施し平成6年8月31日に終了した。
- 1. 本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレースー能勢・西村(和)・西村(公)が行った。
- 1. 本書の執筆・編集は西村(公)が行った。

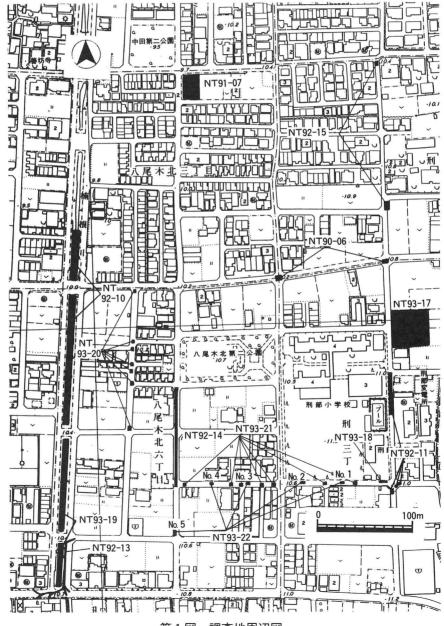
本文目次

1	はじめに	81
		82
		と経過 ····································
		· 出土遺物 ·········82
3		86

Ⅵ 中田遺跡第22次調査 (N T 93-22)

1 はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置する遺跡で、中田1~6丁目・八尾木北1~6丁目・刑部1~4丁目付近にあたる。地理的には河内平野のほぼ中央部を流れる長瀬川と玉串川に挟ま



第1図 調査地周辺図

れた沖積地にあたる。当遺跡の西には矢作遺跡が、南には東弓削遺跡が、北には小阪合遺跡がある。

当遺跡内では、当調査研究会が21件の調査を行っている他、大阪府教育委員会文化財保護課・ 八尾市教育委員会文化財室により調査が実施されており、弥生時代~近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回調査を行った場所は、八尾市刑部 3 丁目から八尾木北 6 丁目で、当調査研究会が行った 第11次調査地の西約50 m 地点にあたる。従来から当調査地近辺では発掘調査が行われており、 弥生時代から近世に至るまでの遺構及び遺物が出土している。このことから、今回の埋設工事 に伴い発掘調査を実施するに至ったもので、事業者と八尾市教育委員会文化財室・財団法人八 尾市文化財調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき財団法人八尾市文化財調査研究 会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。現地発掘調査の期間は平成 6 年 1 月 18 日から 2 月 14日で、調査面積は22.5 m²を測る。

2 調査概要

1)調査方法と経過

今回の調査では電気管路新設に伴うもので、当調査研究会が中田遺跡内で行った第22次調査である。調査は埋設部分を対象に約22.5㎡を行った。

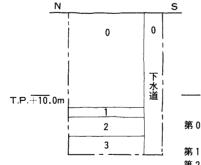
調査では調査地が5箇所に分かれているため、東からNo1・・・・No5と名付けた。

2) 検出遺構・出土遺物

$N \circ 1$

トレンチの南側に既設の下水道管が存在しており、管を入れる時の工事掘削により現表下1.5m以上の堆積土層は壊されている状況であった。

この様な状況下、



第0層 盛土(上面標高T.P.+10.874m) 下水道工事時埋土含む

第1層 暗灰色(N3/)粘土(旧耕土) 第2層 灰色(5Y4/1)細砂混粘土

第 2 層 灰色(5 Y 4/1) 細砂混粘土 第 3 層 灰色(10 Y 4/1) 粗砂混粘土

第2図 No1 東壁面図

堆積状況が確認できた部分は、北側の一部のみであった。この部分について調査(現地表下1.5 mまで)を行ったが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。この調査区では4層確認した。(第2図参照)

刑部小学校 No 1 10m 第3図 No1調査位置図 S $N \circ 2$ 0 0 0 トレンチの南 側に既設の下水 下水道 ガス管 T.P.+10.0m 第0層 盛土(上面標高T.P.+10.802m) 道管、北側に既 下水道工事時埋土含む 2 ガス管埋設工事時埋土含む 設のガス管が存 第1層 暗灰色(N3/)粘土(旧耕作土) 3 在しており、管 第2層 灰色(5Y4/1)細砂混粘土 第3層 灰色(10Y4/1)粗砂混粘土 を入れる時の工 第4図 No2東壁面図 事掘削により現 表下1.5m以上 の堆積土層は壊 刑部小学校 No 2 駐車場 ガレージ

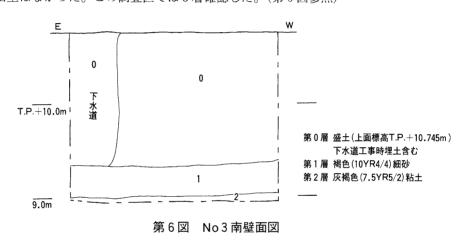
第5図 No2調査位置図

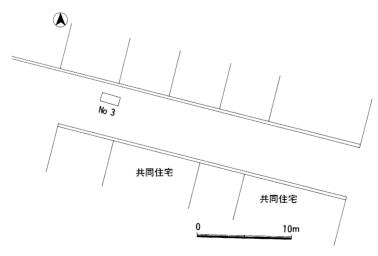
10m

されている状況であった。この様な状況下、堆積状況が確認できた部分は、中央の一部のみであった。この部分について調査(現地表下1.5mまで)を行ったが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。この調査区では4層確認した。(第4図参照)

$N \circ 3$

既設の下水道管が存在しており、管を入れる時の工事掘削により現表下1.4mまでの堆積土層は壊されている状況であった。この様な状況下、堆積状況が確認できた部分は、西側の一部のみであった。この部分について調査(現地表下1.8mまで)を行ったが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。この調査区では3層確認した。(第6図参照)

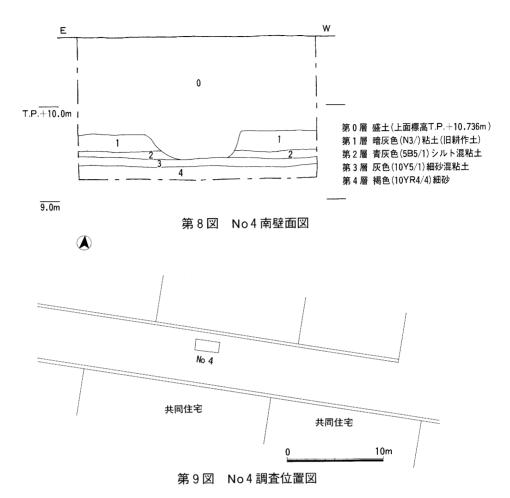




第7図 No3調査位置図

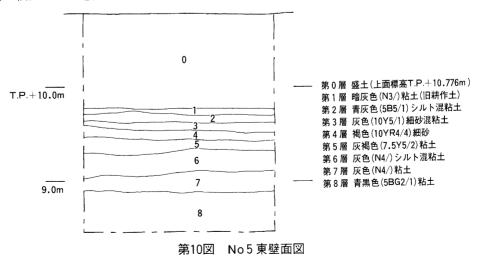
$N \circ 4$

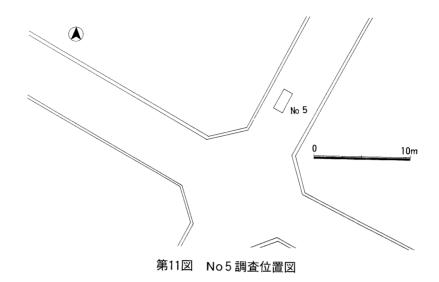
現地表下1.0mまでは盛土が堆積していた。以下は本来の堆積状況が確認できた。しかし、遺構の検出および遺物の出土はなかった。この調査区では5層確認した。(第8図参照)



$N \circ 5$

現地表下1.0mまでは盛土が堆積していた。以下は本来の堆積状況が確認できた。しかし、 遺構の検出および遺物の出土はなかった。この調査区では9層確認した。(第10図参照)





3 まとめ

中央のNo3で砂の堆積層を確認した。この砂は、No2やNo1の第2層および第3層に相当すると思われ、少なくとも東西約100mの範囲が河川による堆積もしくは河川による影響を受けた氾濫の堆積状況であったと言える。時期は遺物の出土がないため不明であるが、周辺の調査結果から、古墳時代以後のものと思われる。

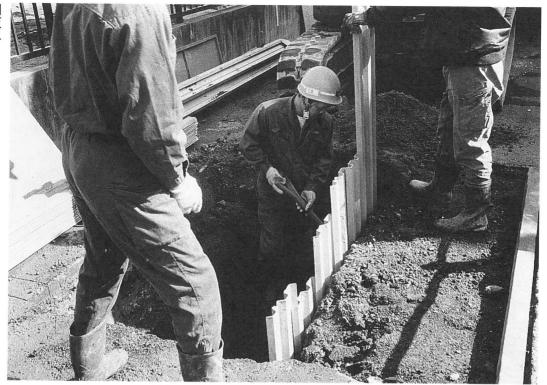
また、 $No.4 \cdot No.5$ では、本来の堆積状況が比較的良好に残っていた。No.4では第1層から第4層が、No.5では第1層から第8層までがほぼ水平に堆積しており、河川の氾濫による砂層の堆積はほとんど見られない状況で、比較的安定した地域であると言える。時期については出土遺物がないため不明であるが、周辺の調査結果から、第5層以下は古墳時代以前の堆積土層と思われる。



NO1 調査状況(南東から)



NO1 東壁面(西から)



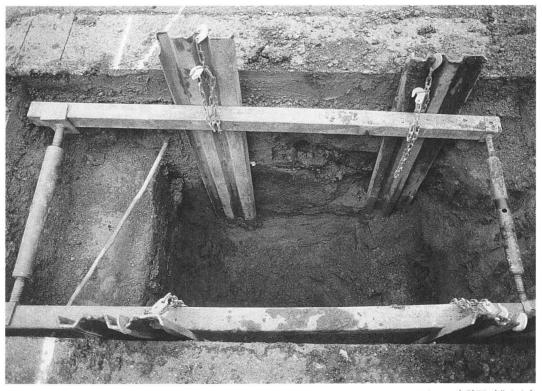
NO2 調査状況(南西から)



NO2 東壁面(西から)



NO3 全景(西から)



NO3 南壁面(北から)



NO4 全景(西から)



NO4 南壁面(北から)



NO5 調査状況(西から)



NO5 東壁面(西から)

W 中田遺跡第23次調査 (N T 93 - 23)

例 言

- 1. 本書は、八尾市中田 4 丁目118で実施した防火水槽設置工事に伴う発掘調査の報告書である。
- 1. 本書で報告する中田遺跡第23次調査 (NT93-23) の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書 (八教社文第47号平成5年7月30日) に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は平成6年3月1日から平成6年3月4日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。面積は約25㎡を測る。なお、調査においては西田寿・村井俊子・與儀徳保が参加した。
- 1. 本書に関わる業務は、岡田が担当した。

本文目次

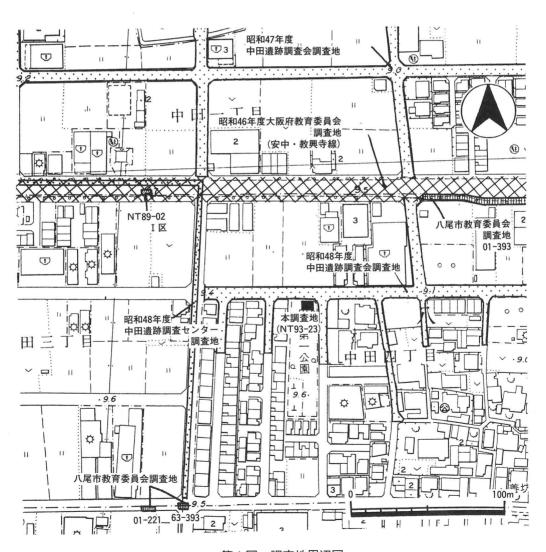
1	ı	はじめに・・・・・・93	0
2.	Ĩ	調査概要94	1
	1)) 調査方法と経過	1
			_
	2)	基本層序94	1
	3)	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・95	5
3.		まとめ·······98	3

W 中田遺跡第23次調査 (N T 93 − 23)

1 はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田 $1\sim5$ 丁目、刑部 $1\sim4$ 丁目、八尾木北 $1\sim6$ 丁目付近がその範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地に位置する。当調査地周辺には、西に矢作遺跡、北に小阪合遺跡、南に東弓削遺跡が隣接する。

当遺跡内では、1971 (昭和46) 年の区画整理事業に伴う調査に端を発し、現在までに大阪府



第1図 調査地周辺図

教育委員会・八尾市教育委員会・中田遺跡調査会(昭和47~49年)・当調査研究会によって多数の調査が実施されている。それらの調査の結果、弥生時代前期からの遺構・遺物をはじめ古墳時代前期の掘立柱建物や土坑・溝・井戸、平安~鎌倉時代においては集落跡とともに青磁・白磁、土師器では墨書土器が出土している。最近の当調査研究会が実施した調査では、刑部4丁目の共同住宅建設に伴う調査において、弥生時代後期の土器集積内から古墳時代の埴輪の原型ともみられる大型器台が出土している(NT93-17)。さらに八尾木北6丁目の楠根川改修工事に伴う調査では、古墳の周濠内から家形・船形・朝顔形・円筒形の埴輪が完形に近い状態で出土し、なかでも船形埴輪は全国で最も小型のものであることが判明している(NT93-19)。

2 調査概要

1)調査方法と経過

今回の調査は、中田第1公園内に於ける防火水槽設置工事に伴うもので、当調査研究会が当 遺跡内で実施した第23次調査にあたる。調査区は、当初工事箇所に沿って公園北端部の市道寄

第2図 調査区位置図

りに5×5mの25㎡の規模で設定した。しかし、 掘削上の安全面から協議の結果、上面の掘削範囲を7×7mに変更し、現地表から1m前後の機械 掘削については、周囲壁面に法(のり)面および テラス状部分を設ける手段を講じた。それより以 下1m前後に及んで人力による掘削・精査を実施 し、遺構・遺物の検出に努めた。また、調査終了 後は調査区のやや中央部分において1×2mの規 模で、最終遺構検出面よりさらに深さ1m前後の 下層確認を実施した。

2) 基本層序

第1層:公園造成時の盛土及び排水管埋設工事等の攪乱層(層厚1m前後)。現地盤の標高(T.P.) は10.0m前後を測る。

第2層:暗紫灰色砂礫混砂質土(層厚10cm前後)。 近世〜近代までの遺物を含む。

第3層: 茶灰色砂礫混砂質土 (層厚20~40cm)。 中世の遺物片が含まれるが、土質及び 遺物の破片状況からみて住居建築にともなった整地層ではないかとおもわれる。

第4層: 黄灰色粘質土 (層厚10~30cm)。

第5層:暗茶褐色砂礫混砂質土 (層厚30cm前後)。古墳時代中期の遺物を含む。

第6層:暗褐色シルト (層厚15cm前後)。古墳時代前期 (布留式期) の遺物を含む。この層の上面 (標高8.4~8.5m) が古墳時代中期末 (5世紀後葉) に比定される遺構面になる。

第7層: 灰褐色シルト (層厚20cm前後)。この層の上面 (標高8.2m前後) が古墳時代前期 (布留式期) に比定される遺構面になるが、北部へいくほど希薄になる。

第8層:茶灰色細砂混粘質土(層厚30cm前後)。

第9層:青灰色粘質十(層厚20cm前後)。

第10層:黄灰色粗砂(層厚50cm以上)。湧水が著しく、周辺の調査結果から弥生時代後期末 頃に比定される河川の堆積層とおもわれるが、遺物は含まれていなかった。

(※第8~10層は下層確認による。)

3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、古墳時代前期(布留式期)に比定される溝1条(SD-201)・小穴7個(SP-201~207)、古墳時代中期末(5世紀後葉)に比定される土坑1基(SK-101)・溝5条(SD-101~105)・小穴1個(SP-101)の2時期に及ぶ遺構面を検出した。

今回の出土した遺物は全て破片であり、図化できるものはなかった。

[古墳時代前期(布留式期)]

溝 (SD)

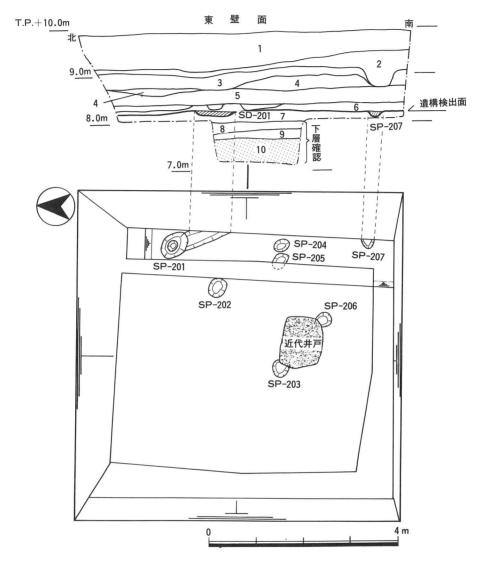
SD - 201

調査区の東部北寄りで検出した。北西-南東方向に伸びるとおもわれるが、南西部はSP-201によって削平を受ける。検出部での規模は幅45cm・深さ10cmをはかる。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は灰黒色粘質土で、内部から古式土師器の破片が出土した。

小穴(SP-201~207)

SP-201のみ柱痕跡が確認された。掘り形は楕円形を呈し、長径56cm・短径44cm・深さ29 cmを測る。柱痕は円形を呈し、径10cmをはかる。埋土は灰色粘土の単一層で、内部からは布留式甕の一部が出土した。他の小穴についての掘り形の形状及び規模は、円形または隅丸方形を呈し、径20~30cm・深さ5~10cmを測る。埋土はすべて灰色粘土の単一層で、SP-203からは庄内式甕の一部・SP-205,206からは古式土師器の破片がそれぞれ少量出土した。

SP-201にみられる柱痕と他の小穴の検出状況から掘立柱としての復原を試みたが、各小



第3図 古墳時代前期遺構平・断面図

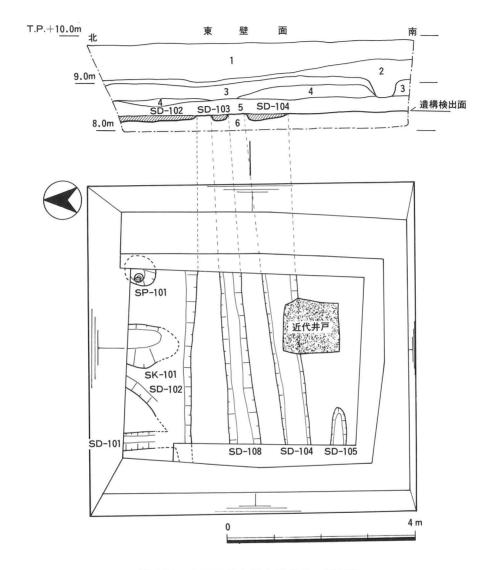
穴の配列からみて建造物となる可能性は少ない。

[古墳時代中期末]

土坑 (SK)

SK-101

調査区北部のSD-102内で検出した。掘り形の南部は調査上の側溝によって削平してしまったのと、北部が調査区外に至っていることもあり、全容は不明である。検出部分での規模は最大径1 m・深さ0.8mをはかる。北壁面にみられる断面の形状は逆台形を呈する。埋土は褐灰色粘質土で炭化物がブロック状に混入する。遺物は出土しなかった。



第4図 古墳時代中期末遺構平・断面図

溝 (SD)

SD - 101

調査区の南西部で検出した。南北方向に伸びると思われ、南部はSD-102と合流する。規模は幅45cm・深さ7cmを測る。断面は半円形を呈する。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は土師器の小破片が少量出土した。

SD - 102

調査区の北部で東西方向に伸びるが、SK-101付近から北東部へ向かって大きく広がる。 規模は検出部で幅 $0.4\sim1.0$ m以上・深さ0.12m前後を測る。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は土 師器の高杯(杯部)の破片のほかに須恵器の小破片が少量出土した。

SD - 103

調査区中央で、東西方向に伸びる。規模は幅45~65cm・深さ18cm前後を測る。断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰色粘質土である。遺物は土師器及び須恵器杯身(陶邑編年 I 型式第 4 段階)の小破片が出土したが、図化できるまでには至らなかった。

SD - 104

SD-103の南側で並行して伸び、一部近代の井戸によって削平される。規模は幅55~70cm・深さ4cm前後を測る。断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は土師器及び須恵器の破片が少量出土した。

SD - 105

調査区南西隅で、東西方向に短く伸びる。規模は幅35cm・深さ6cmを測る。断面は半円形を呈する。遺物は出土しなかった。

柱穴 (SP)

SP-101

調査区北東部で検出した。東部は側溝により削平してしまったが、掘り形の遺存部分から推定して径50cm前後のほぼ円形を呈するとおもわれる。検出できた部分でみると、全体の深さ25cmで、掘り形内西寄りに径15cm前後の柱痕をもつ。埋土は暗灰色粘質土で、内部からの遺物はなかった。

今回2時期に渡って検出した柱痕をもつ小穴SP-101・201については、双方とも検出地点が近く、明確に時期決定できる遺物もみられなかった為に同時期に建替えが行われたのではないかとおもわれた。しかし、北壁及び東壁の層位にみられる掘り込み状況を綿密に観察した結果、時期差のあることが判明した。ただこれらから言えることは、小穴の検出状況からみて本調査地の北部または東部において古墳時代前期~中期にかけての建造物が遺存していることは必至であり、今後の当地周辺の調査に際して注意を払う必要があろう。

3. まとめ

当地付近に於ける周知の調査では、北に約80m地点(第1図参照)で、昭和46年に大阪府教育委員会によって実施された「安中-教興寺道路工事に伴う調査」があり、本調査結果の時代様相とほぼ対応する内容がみられる。その調査資料のなかで古墳時代~奈良時代には、井戸・溝・ピット(柱穴)等から集落跡の存在が示されており、これは本調査にみる古墳時代前期~中期にかけて検出した集落跡の一部を示す遺構と関連するものと考えられ、古墳時代前半期に連綿と営まれつづける集落の構造及び広がりを知る上で貴重な成果と言える。

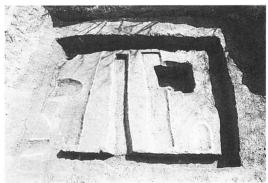
次に中世期では、鎌倉・室町期の堆積層内にみられる瓦片・汁器等と、この地域の字名に地蔵堂・薬師堂・善坊寺等の寺院に関する地名が残っていることとを関連付けて寺院跡の存在が示されている。これは本調査で確認した第3層の中世期の整地層と対応するものであり、遺構はみられなかったが前者との有機的な関係を示唆するものである。

<参考文献>

- ◎中田遺跡調査会『中田遺跡《北区》発掘調査概要』 昭和48年3月
- ◎中田遺跡調査センター『中田遺跡 ~日本電信電話公社大阪東地区管理部地下線埋設工事に伴う調査~』 中田遺跡調査報告Ⅰ 1974年5月
- ◎八尾市教育委員会『中田遺跡 ~昭和 年度国庫補助事業中田遺跡範囲確認調査~』中田遺跡調査報告 II 1975年 3 月
- ◎八尾市史編集委員会 增補版『八尾市史(前近代)本文編』 昭和63年10月



第2遺構面(古墳時代前期/西から)



第1遺構面(古墳時代中期末/西から)



北壁断面(南から)



調査風景(南東から)

		*.

Ⅲ 八尾南遺跡第19次調査 (YS93-19)

例 言

- 1. 本書は八尾市西木の本4丁目4番地で実施した宿舎建設事業に伴う発掘調査の報告である。
- 1. 本書で報告する八尾南遺跡第19次調査 (YS93-19) の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書 (八教社文第6号 平成5年4月19日) に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が防衛庁から委託を受けて実施したものである。
- 1. 内業整理は、現地調査終了後実施し平成6年8月31日に完了した。
- 1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-西村(公)・西村(和)、図面レイアウト・トレース-西村(公)・中西・西村(和)・森下玲子、遺物写真撮影-西村(公)が行った。
- 1. 本書の執筆および編集は西村(公)が行った。

本文目次

1	1	よじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	101
2	Ä	調査概要・・・・・・	101
	1)	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	101
	2)	基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	105
	3)	検出遺構・出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	105
3	50	まとめ	108

Ⅲ 八尾南遺跡第19次調査 (YS93-19)

1 はじめに

八尾南遺跡は八尾市の南西部の若林町・西木の本に所在し、南から北へ伸びる羽曳野丘陵の 先端から河内平野に接する部分に位置する旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。当遺跡 の西部には古墳群を主に検出している長原遺跡が、また東部には中世の集落が検出されている 太田遺跡と、弥生時代から中世の集落を検出している木の本遺跡がある。

今回の発掘調査は防衛庁宿舎建設に伴って実施したもので、当調査研究会が八尾南遺跡内で 実施した発掘調査の第19次調査にあたる。今回の調査地は、昭和56年度に八尾市教育委員会が 実施した調査地の南約50mにあたる。従来より当調査地周辺では発掘調査が行われており、旧 石器時代から近世に至るまでの遺構及び遺物が出土している。このことから、今回の建設工事 に伴い発掘調査を実施するに至ったもので、事業者と八尾市教育委員会文化財課・財団法人八 尾市文化財調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき財団法人八尾市文化財調査研究 会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。現地発掘調査の期間は平成5年10月21 日から平成5年12月13日で、調査面積は700㎡を測る。

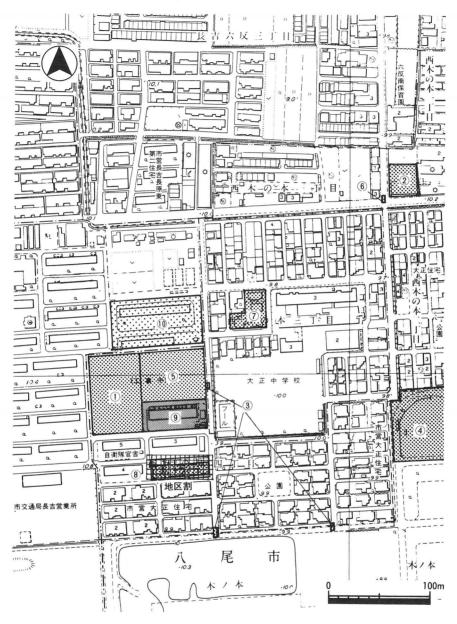
地図番号	調	査	機	関	略	号	調査年度	住 所	備	考
1)	(財)八	尾市文 (化財調	查研究会	YS8	4 - 03	昭和59年度	西木の本4丁目4		
2	(財)八	電市文 位	化財調	查研究会	YS8	4 - 04	昭和59年度	西木の本1丁目63		
3	(財)八	電市文 位	化財調	查研究会	YS8	6-06	昭和61年度	西木の本3丁目		
4	(財)八	電市文 位	化財調	查研究会	YS8	6-07	昭和61年度	木の本110		
(5)	(財)八	尾市文4	化財調3	查研究会	YS8	7 - 10	昭和62年度	西木の本4丁目4		
6	(財)八/	≅市文1	化財調?	查研究会	YS8	9-16	平成元年度	西木の本1丁目他		
7	(財)八	電市文 位	化財調?	查研究会	YS9	2 - 18	平成4年度	西木の本3丁目		
8	(財)八	≅市文1	化財調?	查研究会	YS9	3 - 19	平成5年度	西木の本4丁目4	今回の)調査
9	八尾市	教育委	員会文化	化財課			昭和56年度	西木の本4丁目11		
10	(財)大	阪市文/	化財協:	会	NG8	2-26	昭和57年度	長吉長原東3-14		

第1表 八尾南遺跡および長原遺跡発掘調査一覧表

2 調査概要

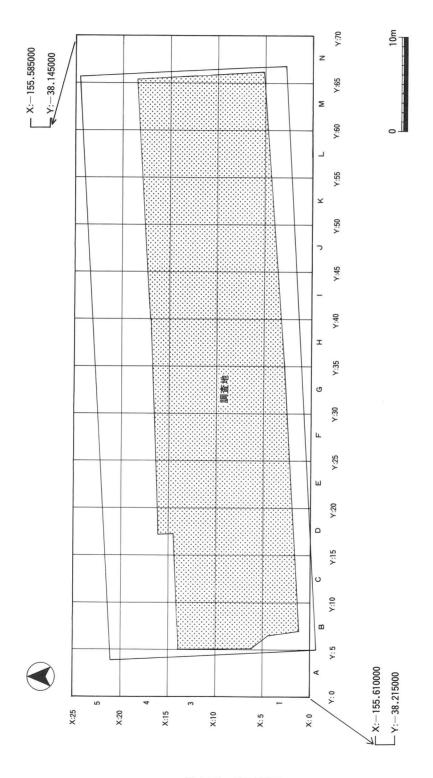
1)調査の方法と経過

調査に際しては、八尾市教育委員会が実施した昭和56年度調査の成果をもとに、現地表下1.8 mまでに存在する盛土・旧耕土を機械で掘削し、以下約0.8 mは人力掘削を行い、3面(第1面~第3面)にわたる調査を実施した。調査の結果、弥生時代から古墳時代後期の遺構の検出および遺物の出土があった。調査地での地区割は、国土座標の軸にあわせ、調査地の南西側に

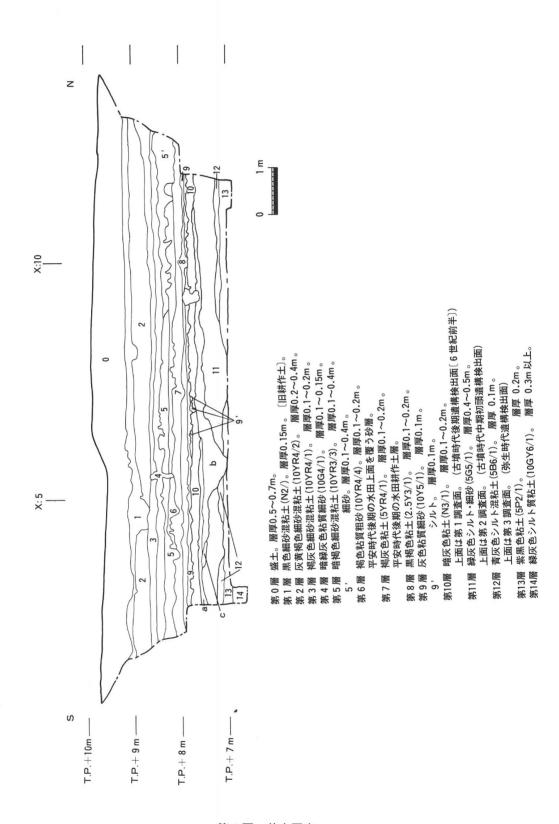


第1図 調査地周辺図

基準点(国土座標のX:-155.610000 Y:-38.215000)を置き、この基準点から東へ $70\,\mathrm{m}$ ・北へ $25\,\mathrm{m}$ 、にわたって設定した。一区画の単位は $5\,\mathrm{m}$ 四方で、基準点から東西方向はアルファベット(西から $A\sim N$)、南北方向は算用数字(南から $1\sim 5$)で示した。地区別の表示は、一区画の南東隅に交差する線を用い、 $1\,A\sim 5\,N$ 区、と呼称した。



第2図 地区割図



第3図 基本層序

2) 基本層序

今回の調査区では、弥生時代前期相当の層〈第14層〉から現代〈第0層〉までの堆積状況を確認した。現代及び近代の工事掘削により本来の堆積状況が壊されている部分が数箇所あったが、全面わたり比較的良好な形で堆積土は確認できた。確認した堆積土層のうち面的な調査を行ったのは、第10層上面【第1面】(古墳時代後期遺構検出面 [6世紀前半])、第11層上面【第2面】(古墳時代中期初頭遺構検出面)、第12層上面【第3面】(弥生時代遺構検出面)である。(第3図参照)

3) 検出遺構・出土遺物

第1面

現地表下2.0 m (標高7.8 m) に存在する第10層暗灰色粘土 (N3/1) 上面で、古墳時代後期の土坑2基 (SK $-101 \cdot$ SK-102)、小穴14個 (SP $-101 \sim$ SP-114)、溝2条 (SD $-101 \cdot$ SD-102) を検出した。

土坑 (SK)

SK-101

3・4 L地区で検出した。平面の形状は不定形で、土坑の北側は調査区外である。 東西幅2.65 m、深さ0.2 mを測る。埋土は暗灰色(N4/)粘土である。土坑内からの遺物の出土はなかった。

SK-102

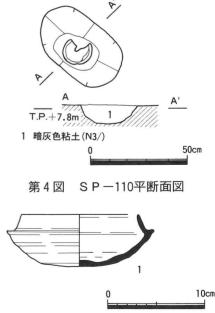
2 ・ 3 L・M地区で検出した。平面の形状は不定形で、土坑の南側は調査区外である。東西幅5.7 m、深さ0.35 mを測る。埋土は灰色(N6/)粘土である。

小穴(SP)

$SP-101 \sim SP-114$

土坑内からの遺物の出土はなかった。

調査地の全域にわたり検出した。しかし特に中央部分では2個検出したのみで、希薄である。径0.15~0.8m、深さ0.05~0.2mを測る。埋土は、SP-101~SP-109が灰色(N6/)シルト混粘土、SP-110~SP-114が暗灰色(N3/)粘土である。SP-110内からは須恵器の杯身(1)【陶邑編年Ⅱ-2形式】が1点出土している。杯身(1)は1/4欠損しており、口縁部を上にして出土した。口縁部内外面回転ナデ、体部内面回転ナデ、体部外面回転へラケズリである。また、SP-107・SP-108・SP-112からは土師器の破片が少量出土している。



第5図 SP-110出土遺物実測図

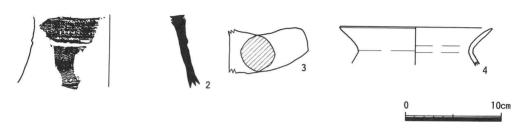
溝(SD)

S D -101

 $2 \cdot 3$ H~K地区で検出した。南東から北西方向に蛇行しながら伸びる。幅1.15~3.3 m、深 ≈ 0.2 mを測る。埋土は灰色 (7.5 Y6/1) 粘土である。溝内からの遺物の出土はなかった。

SD - 102

 $2 \cdot 3$ J・K地区で検出した。東から西方向に弧状に伸び、溝の西側はSD-101 と合流している。幅0.3 m、深さ0.1 mを測る。埋土は灰色(10 Y5/1) シルト混粘土である。溝内からの遺物の出土はなかった。



第6回 第9層出土遺物実測図

第10層上面を覆う第9層包含層内からは、須恵器器台(2)・土師器甑(3)、甕(4)が出土した。器台(2)は、脚部の破片で、外面に波状文を施している。甑(3)は、把手部分で、内外面ナデである。甕(4)は、口縁部で、内外面共に横ナデである。

第2面

第1面から0.2m下層 (標高7.6m) に存在する第11層緑灰色シルト・細砂 (5G5/1) 層上面で、 古墳時代中期初頭の土坑 3 基 ($SK-201\sim SK-203$)、溝 7 条 ($SD-201\sim SD-207$) を検出した。 土坑 (SK)

SK - 201

2 L地区で検出した。平面の形状は不定形で、長径1.4m、短径1.1m、深さ0.1mを測る。 埋土は緑黒色(5G2/1)粘土である。土坑内からの遺物の出土はなかった。

SK - 202

2・3 L地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径1.3m、短径0.9m、深さ0.1mを測る。埋土は緑黒色(5G2/1)粘土である。土坑内からの遺物の出土はなかった。

SK - 203

3 L地区で検出した。平面の形状は楕円形で、長径1.9 m、短径1.6 m、深さ0.1 mを測る。 埋土は緑黒色(5G2/1)粘土である。土坑内からの遺物の出土はなかった。

溝(SD)

SD - 201

 $1 \sim 3 \, \mathrm{B} \cdot \mathrm{C}$ 地区で検出した。南西から北東方向に直線に伸びる。溝の西肩は調査区外にあるため本来の溝の幅は不明である。検出した幅は $2.5 \, \mathrm{m}$ 、深さ $0.4 \, \mathrm{m}$ を測る。埋土は上から緑黒色 $(5 \, \mathrm{G2/1}) \, \mathrm{5} \, \mathrm{n}$ ト混粘土、緑黒色 $(5 \, \mathrm{G2/1}) \, \mathrm{5} \, \mathrm{m}$ 大部分の遺物の出土はなかった。

SD - 202

 $1 \sim 3$ E地区で検出した。南北方向に伸びる。幅 $1.6 \sim 3.0$ m、深さ0.1 mを測る。埋土は暗緑灰色 (10G4/1) 粘土である。溝内からの遺物の出土はなかった。

SD - 203

 $2 \cdot 3$ G地区で検出した。南北方向に伸びる。幅 $0.7 \sim 1.0$ m、深さ0.1 mを測る。埋土は暗緑灰色 (10G4/1) 粘土である。溝内からの遺物の出土はなかった。

SD - 204

 $2 \cdot 3$ I~K地区で検出した。南東-北西方向に伸びる。南部はSD-205によって切られている。幅 $0.2\sim0.4$ m、深さ0.1 mを測る。埋土は暗緑灰色(10G4/1) 粘土である。溝内からの遺物の出土はなかった。

SD - 205

 $2 \cdot 3$ K地区で検出した。南北方向に伸びる。南部でSD-204を切っている。幅 $0.5 \sim 1.0$ m、深 0.1 mを測る。埋土は暗緑灰色 (10G4/1) 細砂混粘土である。溝内からの遺物の出土はなかった。

SD - 206

 $2 \sim 4 \, \mathrm{K \cdot L}$ 地区で検出した。南西 - 北東方向に伸びる。南部は $\mathrm{SD}-205$ によって切られている。また $\mathrm{SD}-207$ と合流している。幅 $0.4 \sim 1.1 \, \mathrm{m}$ 、深さ $0.1 \, \mathrm{m}$ を測る。埋土は暗緑灰色 (10G4/1) 礫混粘土である。溝内からの遺物の出土はなかった。

SD - 207

 2 K地区で検出した。南北方向に伸びる。南部ではSD-206と合流している。幅0.4~1.1

 m、深さ0.1mを測る。埋土は暗緑灰

 色(10G4/1) 礫混粘土である。溝内か

 5の遺物の出土はなかった。

第11層上面を覆う第10層包含層内か

第7回 第10層包含層出土遺物実測図

らは、韓式系土器 (5)、須恵器杯 (6) が出土した。韓式系土器 (5) は、体部の破片で、 外面に平行のタタキを施す。須恵器杯 (6) は、蓋で、内外面共に回転ナデである。

第3面

第2面から0.4m下層(標高7.2m)に存在する第12層青灰色シルト混粘土(5B6/1)層上面で、弥生時代の溝2条 $(SD-301 \cdot SD-302)$ を検出した。

溝(SD)

SD - 301

2 ・ 3 I・J地区で検出した。南北方向に伸びる。幅2.5~6.5 m、深さ0.4 mを測る。埋土は 灰白色(10Y7/2)細砂である。溝内からの遺物の出土はなかった。

SD - 302

 $2 \sim 4 \text{ K} \sim \text{M地区で検出した}$ 。南東一北西方向に伸びる。幅 $2.0 \sim 2.8 \text{ m}$ 、深さ0.5 mを測る。埋土は灰白色 (10 Y8 / 2) 粗砂である。溝内からの遺物の出土はなかった。

3 まとめ

今回の調査の結果、古墳時代後期(第1面)・古墳時代中期初頭(第2面)・弥生時代(第 3面)の遺構を検出した。

古墳時代後期(第1面)

第1調査面では古墳時代後期(6世紀前半)の遺構を検出した。特にSP-110内からは須恵器の杯身が出土していることから、当時の集落が存在していたと考えられる。

古墳時代中期初頭(第2面)

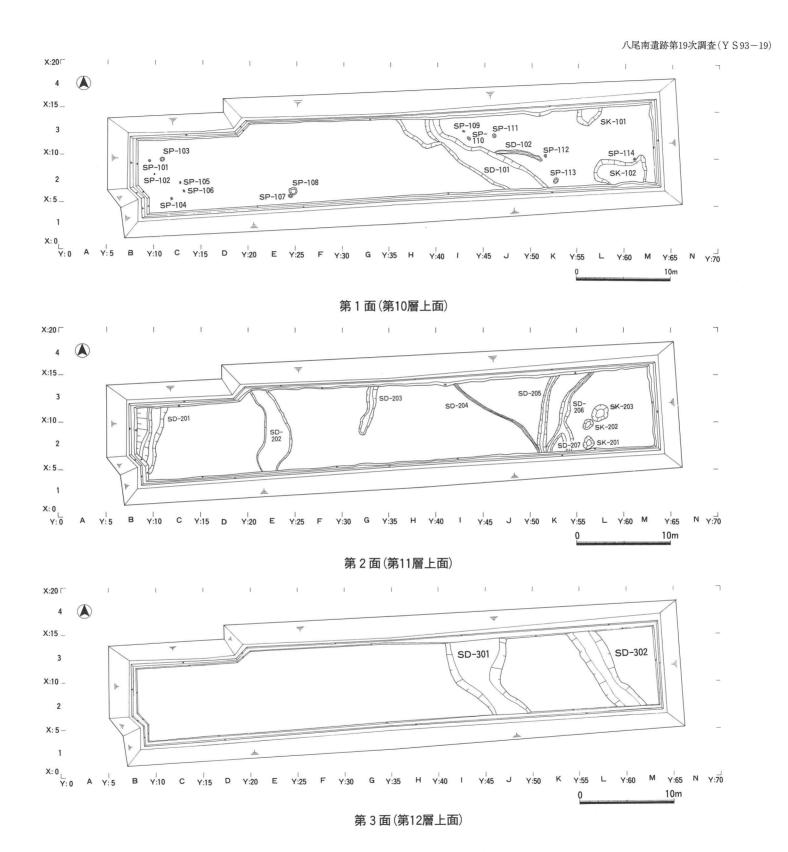
今回の調査地で検出した同時期に当たる遺構は、土坑3基(SK-201~SK-203)・溝7条(SD-201~SD-207)である。各遺構内からの遺物の出土はなく、第9層および第10層の包含層内から同時期に当たる土器の破片が極少量出土したのみであった。

今回の調査地に近接している昭和56年度八尾市教育委員会文化財課調査地【表1の⑨】では、 古墳時代中期初頭頃の土坑を検出しており、更に(財)八尾市文化財調査研究会第3次調査地 【表1の①】では、同時期の集落(居住域)を検出している。この調査地【表1の⑨・①】と 今回の調査地【表1の⑧】は直線距離にして北へ約50mと近接しており、今回の調査地でも同 時期の遺構・遺物が存在していると予想された。しかし、今回の調査地では、この時期に当た る遺構の検出はあったが、集落を構成するような遺構ではなく、また、遺構内からは遺物の出 土がないことから、集落(特に居住域)が今回の調査地には存在していないことがわかった。

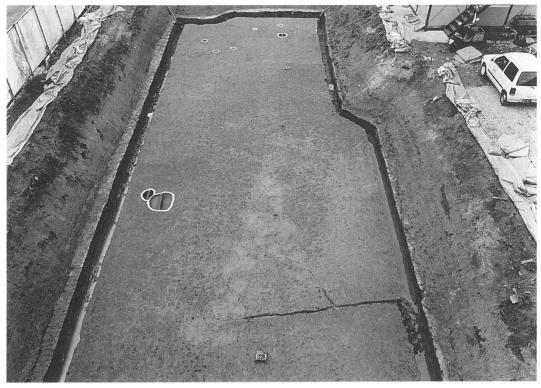
弥生時代(第3面)

今回の調査地で検出した同時期に当たる遺構は、溝 2 条(SD-301・SD-302) である。 遺構内からの遺物の出土はなく、時期の詳細は不明であるが、検出した面(第12層) が長原遺 跡南部の層序の第 8 層に相当すると考えられることから、弥生時代の遺構と推定される。

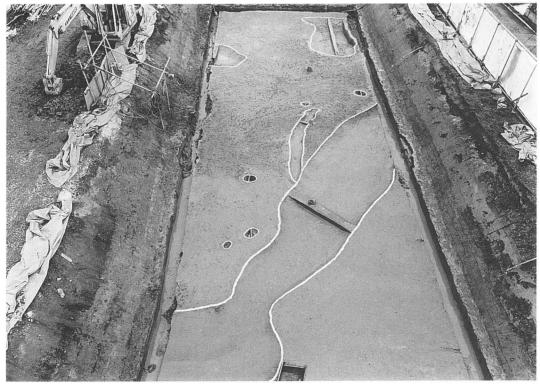
- 註 1 (財)八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』 (財)八尾市文化財 調査研究会報告 2 1983年 8 月
- 註 2 (財)八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』昭和59年度 (財)八尾市文化財調査 研究会報告 6 1985年
- 註 3 (財)大阪市文化財協会『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』 1983. 3



第8図 第1面 第2面 第3面平面図



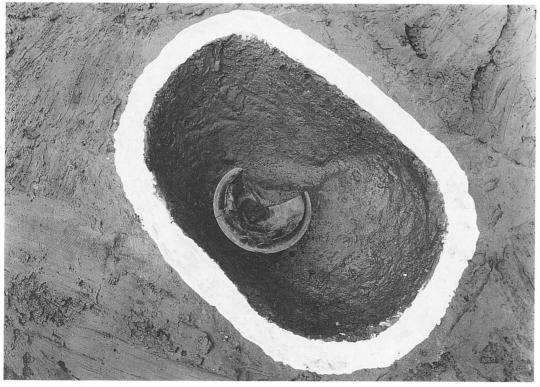
第1面(東から)



第1面(西から)



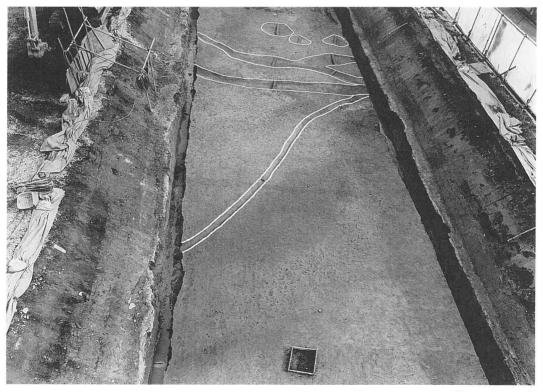
SP-110調査状況(南から)



SP-110内遺物出土状況(南から)



第2面(東から)



第2面(西から)



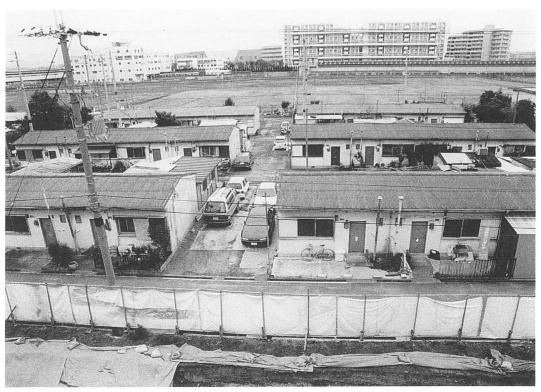
第3面(東から)



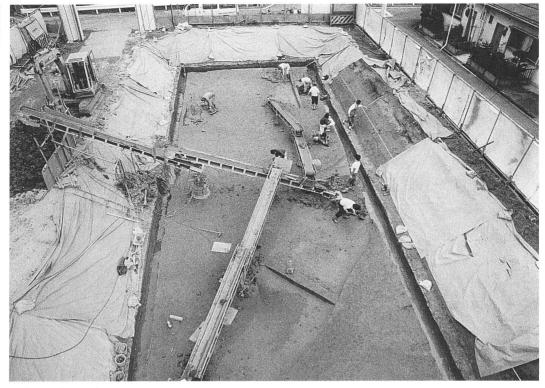
第3面(西から)



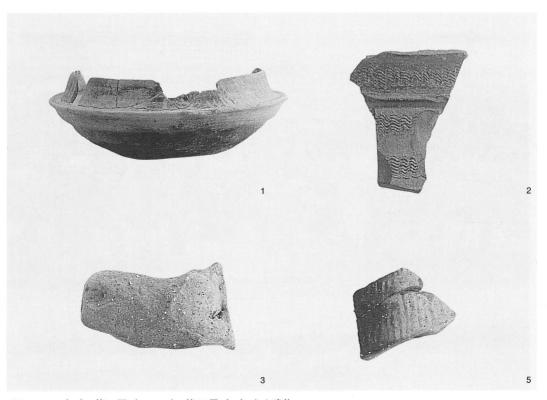
調査地周辺(西から)



調査地周辺(北から)



調査状況(西から)



SP-110(1)·第9層(2·3)·第10層(5)出土遺物

IX 山賀遺跡第1次調査 (YMG93-1)

例 言

- 1. 本書は、八尾市新家町7丁目および東大阪市若江西新町5丁目地内で実施した、公共下水 道工事(平成5年度第2工区)に伴う発掘調査の報告である。
- 1. 本書で報告する山賀遺跡第1次調査 (YMG93-1) の発掘調査業務は、財団法人八尾市 文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書 (八教社文第54号 平成5年8月12日付) に基づき、八尾市下水道部から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は、平成5年10月13日から12月3日にかけて、成海佳子を担当者として実施したが、高萩千秋・坪田真一・岡田清一がこれを補佐した。また、現地調査には、澤井 幹が参加した。調査面積は約46.24㎡を測る。

本文目次

1	はじめに	117
2	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	117
3	調査概要・・・・・・	117
	1) 1区	117
	2) 2区	118
	3) 3区	118
4	まとめ	118

Ⅳ 山賀遺跡第1次調査(YMG93-1)

1 はじめに

山賀遺跡は、八尾市北西端の新家町・山賀町、東大阪市若江西新町・若江南町一帯に所在している。今回の調査地は府道大阪中央環状線上に位置しており、道路上にある近畿自動車道天理~吹田線では、道路建設に伴う大規模な発掘調査が、(財)大阪文化財センターによって行われている(1983~1985年-昭和58~60年)。その結果、当遺跡は縄文時代以降の複合遺跡として認識されており、とくに弥生時代の大集落であることが明らかにされている。

2 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事(平成5年度-2工区)に伴うもので、当調査研究会が山賀遺跡内で実施した最初の発掘調査(YMG92-1)である。

調査区は、発進立坑2か所・到達立坑1か所の3か所(1区~3区)である。そのうち、北側の1区・2区は東大阪市若江西新町5丁目に位置している。調査においては、工事の進捗状況に合わせて随時調査を行い、工事による掘削が終了する時点まで立ち会った。調査期間は、平成5年10月13日から12月3日までである。なお、3つの調査区のうち、中央環状線沿いの2区・3区は夜間調査であった。

調査は、北東部に位置するNo. 2発進立坑 (1区) から開始し、次いで1区から西75m地点のNo. 1発進立坑 (2区)、最後に2区から南約125m地点のNo. 0到達立坑 (3区) の順で行った。

1区は、平成5年10月13日から鋼矢板を打設し、11月8日から掘削を開始し、11月16日に現 地表下6.3m前後までの掘削を終了した。1区の調査面積は19.2㎡である。

2 区は、平成5年10月14日に鋼矢板打設に伴う機械掘削を行い、11月18日から掘削開始、11月25日に現地表下6.5m前後までの掘削を終了した。2 区の面積は1 区と同じく19.2㎡である。

3区は、平成5年10月15日に鋼矢板打設に伴う機械掘削を行い、11月29日から掘削開始、12月3日に現地表下4.5m前後までの掘削を終了し、調査を終えた。3区の面積は7.84㎡である。

3 調査概要

1) 1区

1区の地表面は、T.P.+4.4m前後を測る。ここでは、現地表下約4.7m (T.P-0.3m) 前後までが、過去の下水道工事によって攪乱を受けており、それ以下では、遺構・遺物は認められなかった。ここで確認できた土層は101層 ~ 112 層までの12枚である。これらのうち、101層黒

灰色礫混じり粘質シルトは第1黒色帯に、106層黒灰色粘質シルトは第3黒色帯にあたるものと考えられ、前者は2区-220層に、後者は2区-224層に対応する。101層以下には、湧水の多い粘質シルトやシルトと微砂の互層などがあり、101層以下0.7mで106層に至る。以下には粘質シルトと植物遺体の互層などがあり、最下は112層灰白色細砂に至る。

2) 2区

2区の地表面は、T.P.+4.75mを測り、盛土は約1m程度ある。以下には、旧耕土・床土を含むブロック層があり、現地表下1.3~1.4mで201層青灰色礫混じり粘土上面に至る。201層および202層灰褐色砂混じり粘質土には、土師器の小破片が含まれている。それ以下には、粘土・シルト・微砂・植物遺体を含む互層などが約2.8m程度にわたって数枚堆積しており、この間に、複数時期の河川流路があったものと考えられる。次いで、現地表下4.7m(T.P.±0m前後)で第1黒色帯である220層黒褐色礫混じり粘土に至り、以下には1区と同様、湧水の多い粘質シルトなどが0.5m程度あり、第3黒色帯である224層灰黒色粘土に至る。それ以下も1区と同様、粘土や植物遺体層などがあり、最下は湧水層である228層灰白色細砂~粗砂に至る。

3) 3区

3区の地表面は、T.P.+4.5m前後で、盛土は0.8m程度、以下には2区同様旧耕土・床土を含むブロック層がある。以下、301層青灰色粘土(2区-201層に対応)、302層灰褐色粘土・303層暗褐色礫混じり粘質シルト(2区-202層に対応)が認められる。301~303層には、土師器・瓦などの小片が含まれている。これ以下には、河川流出土である粗砂~シルトや粘土などが堆積している。

4 まとめ

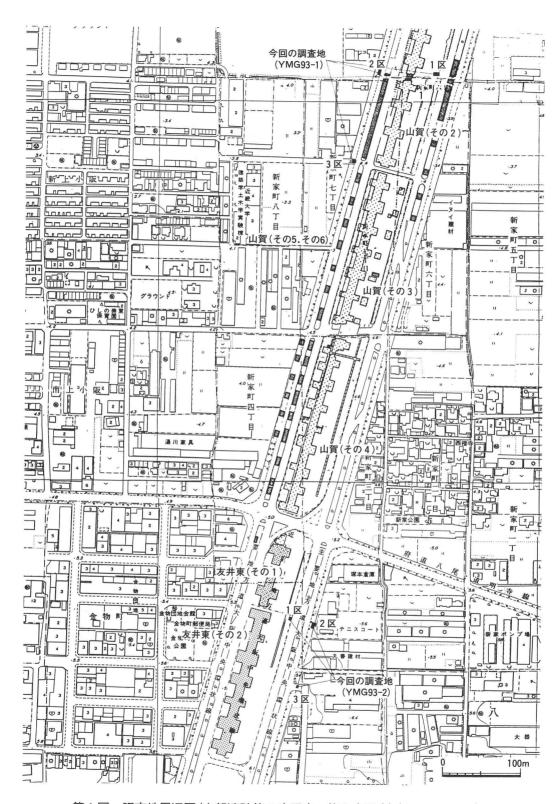
今回確認した層序を、(財)大阪文化財センター の調査結果に対応させたものが右の表である。

今回の調査地は、小面積ではあったが、地表下6mにまで及ぶ工事掘削に伴って、低平地の深層部の断面観察ができたことは有意義であった。また、過去の調査結果からも、当調査地が弥生時代~古墳時代を通じて居住地の外側に位置していることが明らかになった。

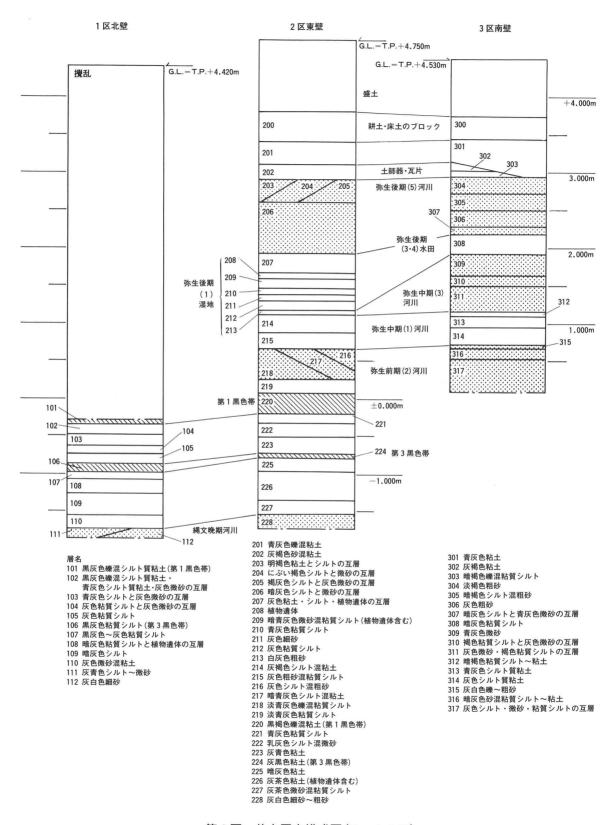
層序対照表

(財)大阪文化財センター調査地	今回の調査地						
(山賀その5・その6)	1 区	2 区	3 区				
弥生時代後期(5) 河川		203~206層	304~307層				
弥生時代後期(3・4) 水田		207~211層	308層				
弥生時代後期(1) 湿地		201.~211层					
弥生時代中期(3) 河川		213層	309~311層				
弥生時代中期(1) 水田		214層	312~314層				
弥生時代前期 (2) 溝・河		216~218層	315~317層				
第1黒色帯	101層	220層					
第3黒色帯	106層	224層					
縄文晩期以前 河川	111~112層	228層					

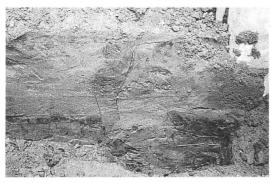
参考文献 (財)大阪文化財センター 『山賀(その5・その6)』 1986年



第1図 調査地周辺図(山賀遺跡第1次調査・第2次調査)(S=1:5000) ※アミカケは(財)大阪文化財センター調査地

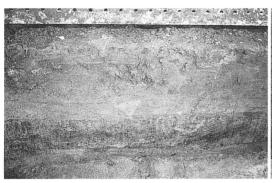


第2図 基本層序模式図(S=1:50)



1区北壁(101層以下)

1 区北壁(108層以下)



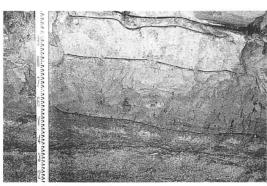


2区北壁(201層以下)

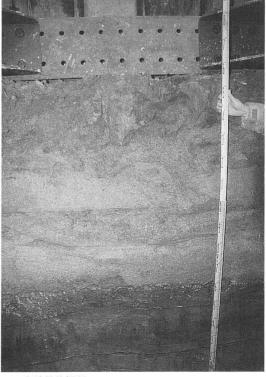
3区1次掘削



2区北壁(208層以下)



2区北壁(223層以下)



3 区南壁最終掘削



X 山賀遺跡第2次調査 (YMG93-2)

例 言

- 1. 本書は、八尾市新家町3丁目地内で実施した、公共下水道工事(平成5年度第3工区)に 伴う発掘調査の報告である。
- 1. 本書で報告する山賀遺跡第 2 次調査 (YMG93-2) の発掘調査業務は、財団法人八尾市 文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書 (八教社文第72号 平成5年9月17日付) に基づき、八尾市下水道部から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は、平成6年1月11日から2月26日にかけて、成海佳子を担当者として実施したが、他に高萩千秋・原田昌則・西村公助・中野篤史がこれを補佐した。調査においては、 澤井 幹・柴田達弥・西村和子が参加した。調査面積は約66.12㎡を測る。

本文目次

1	l	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	123
2	言	調査の方法と経過	123
3	i	調査概要	123
	1)	1 🗷 ·····	123
	2)	2 ☑·····	123
	3)	3 ☑	124
4		まとめ	

X 山賀遺跡第2次調査 (YMG93-2)

1 はじめに

今回の調査地は府道大阪中央環状線上に位置しており、山賀遺跡第1次調査地の南約700m 付近にあたる(山賀遺跡第1次調査 第1図参照)。

2 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事(平成5年度-3工区)に伴うもので、当調査研究会が山賀遺跡内で実施した2度目の発掘調査(YMG92-2)である。

調査区は、発進立坑1か所・到達立坑2か所の3か所(1区~3区)で、そのうち1区・3 区が東大阪市友井5丁目にあたっている。調査においては、工事の進捗状況に合わせて随時調査を行い、工事による掘削が終了する時点まで立ち会った。調査期間は、平成6年1月10日から2月26日までである。この調査では、2区が夜間調査であった。

調査は、北西部に位置するNo.1到達立坑(1区)から開始し、次いで1区から東35m地点のNo.2発進立坑(2区)、最後に2区から南85m地点のNo.3到達立坑(3区)の順で行った。

1区は、平成6年1月11日から掘削開始、1月14日に現地表下6.3m前後までの掘削を終了した。1区の面積は11.16㎡である。

2区は、平成6年2月3日から掘削開始、2月16日に現地表下6.0m前後までの掘削を終了した。2区の面積は40.56㎡である。

3区は、平成6年2月22日から掘削開始、2月26日に現地表下6.0m前後までの掘削を終了し、調査を終えた。3区の面積は14.4㎡である。

3 調査概要

1) 1区

1区の地表面は、T.P.+ 5.7m前後を測る。ここでは、工事による最終掘削深度(現地表下 6.3m=T.P.-0.5m前後)までが、過去の下水道工事によって攪乱を受けていた。

2) 2区

2区の地表面は、T.P.+5.5mを測り、東部の民地側では盛土は0.9m程度、以下には201層 黒灰色礫混シルト(旧耕土)、202層青緑灰色礫混粘質シルト(床土)、203層緑灰色礫混粘質シ ルトなどがある。西部の道路(歩道)側では盛土は1.2~1.3m程度で、203層までが削平され ている。以下には、黄褐色~灰色系の粘性の高い粘土が数枚堆積している(204~206層)。 次いで207層暗灰色粘土に至るが、この層は上面に高まりなどがあり、古墳時代後期の水田耕作土に対応する。207層の上面はT.P.+3.6~4.7m、厚さ0.3~0.4m程度である。

207層の下部には、白~灰色の粗砂~微砂・植物遺体とシルトの互層などが $1.7~2.0\,\mathrm{m}$ にわたって堆積しており(208層)、次いで炭化カルシウム・植物遺体を含む灰色~青色系の粘土(209~213層)があり、粘性の高い黒色粘土($214\cdot215$ 層)に至る。 $214\cdot215$ 層は、 $T.P.+1\,\mathrm{m}$ 前後にあり、いわゆる「黒色粘土帯」に対応するものであろう。

以下には216層淡青灰色粘土が0.2~0.3m程度堆積し、再びシルト~粗砂の互層(217層)、植物遺体を多量に含む茶褐色粘質シルト(218層)、青灰色粘土(219層) に至る。219層は厚さ0.5mまでを確認し、最終面は現地表下約6.0m、T.P.-0.479mに達する。

3) 3区

3区の地表面は、T.P. +5.7m前後で、盛土は1.0~1.3m程度あり、旧耕土・床土は削平されている部分が多いが、以下には2区と同様の土層堆積が認められる。

301層黄褐色粘土は 2 区-203・204層に、302層褐色粘質シルトは 2 区-205・206層に、303層 灰色微砂混粘土は 2 区-207層に対応する。次いで灰色シルトと植物遺体の互層を数枚含む305層粗砂が堆積するが、これらは 2 区-208層に対応する河川内堆積土である。

以下には、炭化カルシウムを含む306~308層灰色~青灰色系のシルト(2区-209~213層対応)があり、次いで粘性の高い309層黒灰色粘土・310層暗灰色粘土に至る。309・310層はT.P.+1.5~2.0m付近にあり、2区-214・215層とともに「黒色粘土帯」に対応するものであろう。

以下には311層青灰色粘質シルト・312層微砂混シルトがあり、再び河川内堆積土である313 層灰色粗砂に至る。313層の厚さは1.5m以上、最終面は現地表下6.0m、T.P.-0.285mである。

4 まとめ

以下のようになる。

第1次調査同様、今回の調査でも低平地の深層部の断面観察ができた。また、過去の調査結果からも、当調査地が縄文時代晩期から弥生時代後期を通じて、少なくとも3度の河川流路にあたっていたことが明らかになった。今回確認した層序を、(財)大阪文化財セ

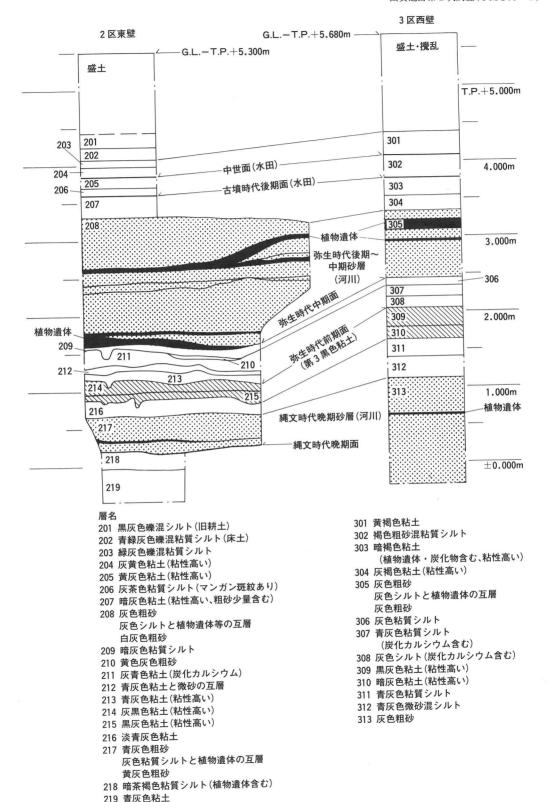
ンターの調査結果に対応させると、おおむね

層序対照表

(財)大阪文化	今回の調査地			
友井(その	1)・(その2)	2区	3区	
中世面	水田	205層	301層	
古墳時代後期面	水田	207層	303層	
弥生時代後期砂層	河川			
ş		208層	305層	
弥生時代中期砂層	河川			
弥生時代中期面		209~213層	306・307層	
弥生時代前期面	第3黒色粘土	214・215層	309・310層	
縄文時代晩期砂層	河川	217層	313層	
縄文時代晩期面		218層 ?		

参考文献 (財)大阪文化財センター 『山賀(その5・その6)』1986年

『友井東(その1)』1984年 『友井東(その2)』1983年



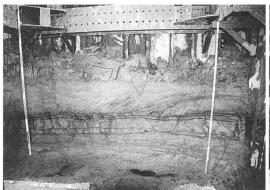
第1図 基本層序模式図(S=1:50)



1 区完掘



3 区西壁 (303~305層)



2 区東壁(207~208層)



3 区西壁(305~309層)



2区東壁(208~219層)



3 区西壁(307~313層)

報告書抄録

2 to 222	[(A. (B.) 17 \ 10 1 A \ 1 \ 10 1	<u>+12 D E</u>						
ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょう	さけんきゅうた	かいほうこく					
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告 4 3	(MoseyL=HI=k-)	ere alarmat	Ent (Mexa)	-##*\	· Jana tank (Man	0)上部士)	ひ 中田津屋 /株の
副書名	I 中田遺跡(第16次調査) II 中田遺跡		III 中田選			/ 中田遺跡 (第2		V 中田遺跡 (第21
		[] 中田遺跡	(第23次調査)	VIII /	、	(第19次調査) IX	(川質道)	水(第1次調査) X
Mt v I	山賀遺跡(第2次調査)							
巻次	(01) + (0+1) (01) (01+1) (01+1)						BE-176	
シリーズ名	(財)八尾市文化財調査研究会報告							
シリーズ番号	43							
編集者名	高萩千秋・成海佳子・西村公助・岡田清一							
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会							
所在地	〒581 八尾市青山町 4 丁目 4 番18号 TEL 03	729-94-4700						
発行年月日	西暦1994年10月							
ふりがな	ふりがな		- k				(m²)	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
an t				34度	135度			井田仕々研乳に扱う
中田遺跡	大阪府八尾市八尾木北1丁目33・34	27212		36分	36分	$19930517\!\sim\!0527$	170	共同住宅建設に伴う 事前調査
(第16次調査)				49秒	51秒			尹 則 剛追
i	おおさか A や お ! おさかべ			34度	135度			共同住宅建設に伴う
(第17次調査)	大阪府八尾市刑部3丁目82-2	27212		36分	37分	19930728~0811	140	事前調査
(NAT1-5/(bri ET)				40秒	18秒			
				34度	135度			
	************************************	27212		36分	37分	19931004~1009	10	電気管路新設に伴う
(第18次調査)	人	0,515		34秒	18秒	10001001 1000	**	事前調査
	- A - A - A - A - A - A - A - A - A - A			0.10				
				34度	135度			ハサエヤネエ車に体
(Marris = male)	光宸府八尾市八尾木北6丁目地内	27212		36分	37分	19931012~1015	28	公共下水道工事に伴 う事前調査
(第20次調査)				38秒	07秒) 学用調査
	bank a se to 1 to the			34度	135度			公共下水道工事に伴
(第21次調査)	大阪府八尾市刑部 3 丁目地内	27212		36分	37分	19931020~1022	28	う事前調査
(第31公嗣王)				34秒	13秒			7 1119111
				34度	135度			
	*************************************	27212		36分	37分	19940118~0214	22.5	電気管路新設に伴う
(第22次調査)	大阪府八尾市刑部3丁目~八尾木北6丁目	21212		33秒 09秒		19940116~0214	44.5	事前調査
				00/2	05/1			
				34度	135度			
(Marie et al. 1999 and a)	学版存代是市华笛 4 丁目118	27212		36分	36分	19940301~0304	64	防火水槽設置工事に 伴う事前調査
(第23次調査)				53秒	58秒			円り事別側重
《『常禮》	おおさかふ ヤ お しにしき - もと			34度	135度	10001010 1010	500	宿舎建設に伴う事前
(第19次調査)	大阪府八尾市西木の本4丁目4番地	27212		35分	35分	19931018~1213	700	調査
(NATO-ACHATET)				48秒	01秒			
***				34度	135度			
^{でまが} 山賀遺跡	大阪府八尾市新家町7丁目	27212		38分	35分	19931013~1203	46.24	公共下水道工事に伴
(第1次調査)	八欧/ 八欧/ 八 八 八 八 八 八 八 八 八	3.515		47秒	57秒	-2001010 1000		う事前調査
		-						
				34度	135度			公共下水道工事に伴
/姓ov上四十)	光酸蔣八尾市新家町3丁目	27212		38分	35分	19940111~0226	67.92	公共『小坦工事に計
(第2次調査)				27秒	55秒			7 Tr (1) (6) E.
所収遺跡名	種別	主カ	· ·時代	主か	遺構	主な遺物		
中田遺跡 第16次	集落遺構	古墳時代	·- v I N		物1棟・土	布留式土器		10 HO 11 N
第17次	集落遺構	弥生時代後		土器集積		弥生土器・庄内	弥生時代	後期の大型器台
6b	Long Vil Liff	古墳時代前	朝	土坑・溝		式土器・布留式		
第18次	水田遺構	中世	19	水田 土坑		土師器 須恵器		
第20次 第21次	集落遺構 集落遺構	古墳時代後! 鎌倉時代	41	河川		須思奋 十師器		
第22次	集落遺構	古墳時代	×-	なし		なし		
第23次	集落遺構	古墳時代前	期~中期	土坑・小江	穴・溝	古式土師器		
八尾南遺跡第19次	集落遺構	弥生時代		溝		なし		
		古墳時代中		土坑・溝	÷	韓式系土器・須		
山賀遺跡 第1次	水田遺構	古墳時代後	明 期~弥生時代	土坑・小り		恵器・土師器 土師器・瓦	-	
第2次	水田遺構	縄文時代晚		水田・河		なし		
L	1 - 4	1 3.020-4 (4.50)		1 22	·	: -		

鸎八尾市文化財調査研究会報告43

I 中田遺跡 (第16次調査) VI 中田遺跡 (第22次調査)
Ⅱ 中田遺跡 (第17次調査) VII 中田遺跡 (第23次調査)
Ⅲ 中田遺跡 (第18次調査) VII 中田遺跡 (第19次調査)
Ⅳ 中田遺跡 (第20次調査) IX 山賀遺跡 (第1次調査)
V 中田遺跡 (第21次調査) X 山賀遺跡 (第2次調査)

発 行 1994年10月

編 集 財団法人 八尾市文化財調査研究会

〒581 大阪府八尾市青山町 4 丁目 4 番18号

TEL0729-94-4700

印刷 ㈱近畿印刷センター

表 紙 レザック66 <260kg> 本 文 マットアート< 90kg> 見返し 上 質 < 90kg> 色トビラ 色 上 質 厚 口

